
man with the title of infinity and redo

サレンダー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The tale of a man with the title of infinity and redo

【Nコード】

N9469W

【作者名】

サレンダー

【あらすじ】

「ここは何処ですか？」って事で始めましたよ。時には愉快に、時にはCOOLに、時には遊びながらも主人公は頑張って家に帰る為に四苦八苦……するのかわからない物語。

一応主人公はチートですが、使用すればする程BAD END直行
まっしぐら仕様です。

内容は、シリアス3% 寒いギャグ97%仕様で行ってみたいと思
います。

簡単なご説明（前書き）

あくまで簡単な説明ですので、読んだ方が……いいのかな？

簡単なご説明

これは自分が、書いてるお粗末過ぎるお話、「人生は矛盾しっぱなし」のもしもの話です。

● 具体的な違い。

1・転生物

2・段々と主人公の思考回路が変態化する。

3・おもつくそ、原作介入する時もあれば、原作スルーをする時もある。

4・神だの相棒である霧生 零が一切出てこない。

5・話の都合上、元からチートの能力設定を更に、それこそクソみたいにチート化させる。

6・元々あつたかは不明だが、恋愛描写。
一応迷ってますが、今の所は無いで通しますが、作者の気分で変わります。

7・戦闘描写及びオリ主無双乱舞の大減少。
まあ、言う程無双してた描写を書いた……のかはわかりませんが、
戦闘描写は多分格段に減ります。（一応あるつもりです）

○共通する所

1・主人公の名前と容姿

2・家族構成（一部改変あり）

3・主人公の持つ能力。あれです、ザ・インフィニティ無腎蔵です。

4・ハーレムだのなんだの一切無し。
（捌ける気がしない）

5・駄文

（永遠にです）

主な違いは以上ですが、もしかしたら途中で心変わりする可能性が
無きにしもあらずなので悪しからず。

尚、クオリティーの向上は絶望的ですが気が向いた時、目に入った時、究極に暇な時などに読み下さい。

以上

簡単なご説明（後書き）

次回から本編に入りますが、暫くは原作キャラとは関わる所か顔すら合わさない可能性があります。

0：私の名前はもぐ——霧生 零です（前書き）

まあ、オープニングですな。

くだらねえ始まり方は許して下さい。

0：私の名前はもぐ——霧生 零です

——世の中には、『ああ、あの時告白しとけば……』という、俗称“やらずに後悔する”と『ああ、告白して玉砕……最悪だ』の“やつて後悔する”の二種類がある。

ちなみに俺は前述にも後述にも当て嵌まらない微妙な位置にあるのだが、それはまた追々説明しよう。

「ズルズル……！」

ウム、このカップ麺は中々どーしてだな、思い切ったの『ご当地〇ラーメン』の唄い文句につられて、何時もより百円多く出した甲斐があるつもんだが、いかんせん量が少ないのがネックだな。

「ご馳走様でした……」

と、誰も居ないくたびれたアパートの一室に俺こと、霧生 零は住んでいる。

家族なんて者は居ない……いや、この世界にはいない、と言った方が正解か……。

何故、“この世界”等と表現するかというと、それは約一週間程前に遡る必要があるのだが、その事はまた後で説明するとして、今は食後のブレイクタイムに移行しよう。

「ヤニとライターは……あつたあつた」

テーブルの上に無造作に置いてあつたタバコ、LUCKY STRIKEとANGLEと刻み込まれたZIPPOライターを手前に引き寄せた後、タバコを口にくわえ、火を点けて吸う。

紙巻きタバコ故なのか知らないが、巻いてある紙がチリチリと静かで淋しい部屋の中にまるで『お前が一人でも、俺が居るから安心せえや!』と励ますように静かに音を立てる。て、現在進行形で自分に酔って格好付けているが、実際問題んな事は有り得ないし、本気で聞こえるとか言ってしまった奴は診療内科に行く事をオススメする。

「フウ」

口の中に含んだ煙りを吸い込み、肺の中に浸透させて吐き出す……
こういった行為にリフレッシュ後悔を期待出来るのだから凄い。
と、喫煙がいかに素晴らしいかを勝手にアピールしている訳なのだが、嫌煙家さんからしたらこの行為すら迷惑千万だろう。

なんせ、自身がフィルターから吸う紫煙より、火を点けた先から出る副流煙の方が人体に影響が出る割合がデカイと、何処かのお偉い学者様が言ってくれたお陰で、俺達喫煙家の肩身が狭苦しくなってしまうているのだから。

が、勝手に喫煙家を代表して物申させて頂くと、正直タバコから出てくる副流煙が人体に悪影響を及ぼすという理屈はまあ、事実だからしょうがないとして、だ。

なら、戦時中や戦後とかにあった放射線とかはどう説明するんだ？

こつ俺は聞きたいね。

詳しく言わせて貰うと、放射能とタバコの副流煙、果たしてどちらが危険なのか？ そう聞けば、余程のお馬鹿ちゃんじゃ無い限り、『放射能』と答えるだろう。

そして、戦時中に放射能を直でバンバン浴びて尚且つ、放射能たっぷり漬けの野菜やら魚やら食ってきた戦時・戦後時代の方々が『今も現役バリバリじゃない！』と言わんばかりの元気っぷりで俺と将棋やら囲碁やら麻雀を嗜んだりするのだが、まさしく『これいかに？』だ。

また、当時の方達いわく、戦時中の空気の悪さからしたら、紫煙等屁でもねえし、モクモク吸いまくってた喫煙暦何十年の方が、非・喫煙家の方達より長生きしたってのもまた事実だ。

結局の所、何が言いたいのかと言えば、確かにタバコを吸っても良い事はねえさ、だからと言ってそこまで毛嫌いされてもねえ？ こう言いたい訳だ。

まあ、向こうからしたら健康に悪いだけじゃなくて、マナーが悪いのだと反論してくるだろうが、だったらアンタ等はゴミをポイ捨てした事ねえか？ 車やバイクの排気ガスも健康に良いとは思え無くない？ つーか俺達人間が居る時点で母なる大地である地球様が危険なんすけど？ とまあ、何十年もの間に喫煙家と嫌煙家の不毛な争いが続いているのだ。

「フウ……」

フィルターまで火種が行き渡った所で灰皿で揉み消す。

喫煙家と嫌煙家の不毛な争いの歴史話で、本来の話題から右斜め45°くらい話が逸れたので修正する。

何故俺が『この世界』と心の中で誰に対して分からない説明をしていた訳……それは、今から調度一週間前に遡ってしまうのだが……。

続
く

0：私の名前はもぐ——霧生 零です（後書き）

次回は何故零が、異なる世界に飛ばされたのか、が話しの内容ですが、まあ、良くあるパターンですね。

1…てんぷら(テンプレート)？ ストリップ(トリップ)？ ……ええととと

この主人公は物事をすぐに信じ、尚且つすぐに諦める癖があります。

1：てんぷら（テンプレ）？ ストリップ（トリップ）？ ……ええっとどっ

一週間前、自分の家の居間で飯を食いながらも、俺は珍しくやる気に満ちていた。

「やるぞ……やってやる……やってみせましょう！」

「……？ どうしたの？」

ブツブツと端からみたら不審者全開の俺を、何も知らない様子で見てる女性一人。

女性の姿は、ぱつと見自分と同年代の姿、身内鬚眉差し引いても余裕で美人に入る容姿……なのだが。

「フツ……何でも無いよ……婆ちゃん」

目の前に居る人物に無駄にカッコつけながら言うが、全く動じてない事から中々のショックを……いや、只の自爆なのだが。

「今日のれーくんは変だね」

「アハハ」

呑気な声色で話す婆ちゃんに、『行くな……！
まだ機ではない！』と理性と言う名の獣が叫びまくってる。

この人は、俺の祖母……といっても血は繋がって無く、自身の本当の両親は今何処で何をしているのかは知らない、というか興味が全くない。

婆ちゃんの姿は、何かしらの力が働いてるお陰とかで、見事なまでの若々しさを誇り、俺も何かしらの力を持つてるが、その話しはまた後でにしよう。

「ご馳走様でした……。婆ちゃん、行ってくる」

「ん、いつてらっしゃい、今日は遅くなるとかあるの？」

「愚問だね、俺が遅くなるまで家に帰らないなんて話あったかい？」

「……そうだったね。全く、健全な男子高校生がそんな事じゃ駄目じゃないか？」

と、表情の変化はさほど無いが、若干声の質が違う所、ダチと全く遊ばない俺を心配しているらしい。

別にダチがいない訳では無いし、遊びにもしょっちゅう誘われていたのだが、俺としてはんな事よりささと家に帰って、“婆ちゃん成分”を摂取しなければ、干からびてミイラと化してしまう。まあ、

そんなだからダチと遊ぶ暇等皆無なのさ。

「俺の中では、健全な男子高校生より、婆ちゃんが優先順位に入ってるからね……最近の遊びは、やたら金も掛かるし」

一回遊びに行く事に、諭吉の兄さんとか野口の兄さんが俺の財布から名残惜しそうに出て行ってしまうから、俺としては遊びになんて行く必要性を感じないのさ。

「ふーん？ まあ、良いって言うんならこれ以上何も言わないけどさ」

「まあ、そういう事だから。じゃあね……ってさっき言ったような？」

「言っただけど、二回言っただけじゃない決まりなんて無いし、良いんじゃない？ てな訳でいってらっしゃい」

家を出る時は、軽くハグをしてから出るというのが、我が家の昔からの決まりで、この行為も早十三年近くにもなるので、決してやましい事等考えてない。

二度言うが、やましい事等考えてないからな。

《キーンコーンカーンコーン》

あつという間に、授業が終了し放課後。

周囲の人間は、『これから部活だ』『だの』『遊び行くぜえ！』『だの騒いでいる中、俺は先程説明した通り、さっさと帰る。遊びに誘われても断つて俺も一応は誘われたが、当たり前障りの無い様にお断りさせて頂いた。

なんせ今日は、ある意味で俺にとっちゃあ“特別な日”なんだからな。

—

—

—

「
〜
♪ ♪
」

辺りが暗くなってくる中、携帯を弄りながらの下校。

それが何時もの日課なのだが、今日は何時もと何か違う、ていうか俺以外に人様がない。

「
……?
」

良くは分らないが、一つだけ認識出来た事……“恐怖”だ。
辺りが暗く、更に人がいねえというのは恐怖を助長するのに十分過ぎるのに加え、何故か霧まで出て来てた。

「えっ？ えっ！？ 何これマジ？」

元々オカルトな類は苦手だと自覚があるだけに、今の状況は極めて危険だと判断、だから走る、この嫌がらせに似た状況から脱出する為に。

「ゼエツ……！ ゼエツ！」

軽く30分位は全力疾走したのが良かったのか、気が付けば霧だらけみたいな空間から脱出できた、のは良いが。

「此処は……何処やねん？」

別に関西人では無いのに、関西弁での独り言も仕方ないと、自分で言い訳がましいと思うが、だっていつの間にか知らない山中みたいな場所に行き着いてしまったんだよ？

「い、いやいやいやいや。待てって俺、確か真っ直ぐ走ったよな？」

来た道を見える範囲内で観察するが、全くと言っていい程に知らない山道だった。

「んな馬鹿な……」と口には出しつつ、内心不安だらけの中、元来た道を歩いて山を下りて街中に進む……すると。

「な、な、なな……」

目の前に広がる街並みに俺は只驚愕する。

何一つ俺の記憶と合致しないのだ。

そして思わず頭を抑えながら……。

「なんじゃこりゃあああ！……！」

と、周囲の人目を気にせずに有名俳優さんの有名な名言を叫んでしまっただった。

「……」

あれから約三時間後、自分で出来る限りの情報収集を終えた俺は、取り合えず今居る状況の整理の為、聞いた事も無い名前のファミレ

スに居た。

「……」

まず、第一に知ったのは、此処はどうやら俺の居た世界とやらとは似てる様で全く違う世界だという事……という説明が明記されてる手帳を、もう何回目になるか分からなくなる位に読み返していた。もっと簡略化すると。

1 . 平行世界に飛ばされた。

2 . 何故か俺の服装が普段着。

3 . 帰りがかったら手帳に書いてある条件のみ。

4 . それまでの生活等は一番始めのみ力を貸すのみで、それ以降はこちら関与は一切せず。

1 については、もう認める他無かった。

近くにあった交番に行き、カップ麺を食いつつ、いかがわしい本を読んだ青の国会権力さんに元に住んでいた世界の街を聞いたら「何言ってるんだこいつ？」みたいな顔された揚句に「無い」と一言で終了した。

俺としては、カップ麺食いながらエロ本読んでる目の前の国家権力

振りかざし野郎の顔面を、原形が解らなくなる程にボッコボコにしてやりたい衝動に駆られたが、そんな事した瞬間に「はいお縄」と逮捕されてしまうので我慢した。

2については、言った通りの意味で、何故か俺の服装が元の世界にいた時に着ていた学校指定の制服じゃ無くて、私服だった。それも、一番安い服という、俺に恨みでもあんのかと言いたくなる位だ。

3については、少し救われた気がした。なんせ帰れる可能性があったのだからな。詳しい説明は最後にする。

4は、書いてる通りで、最初の自分で住む家と資金、身分証明その他、最低生活に必要な物が俺の持ってた鞆の中に詰め込まれてあり、それ以降、この手帳の作者は関与してこないらしいのだ。

「フウッ」

タバコを吸いつつ、今の状況を一通り整理した所で、最後の項目『何故俺がこの世界に飛ばされた』のか、だ。

「暇つぶしって……」

手帳に書いてある項目を読むたんびに怒りのあまり、声がボソリと出てしまう。

最後の項目ついてた。

君の能力について、と説明書きに載ってた時はマジでビビったが、この手帳の作者が………言いづらいのだが、神様らしいのだ。無論、最初は「ふざける、バツキヤロイ！」と手帳を地面に叩き付けたのは記憶に新しい。

だが手帳を読むにつれて、段々信じる他無いような気がして来たのだ。

てのも、婆ちゃんと爺ちゃんならまだしも、何故この作者が俺の能力を知ってるのか？ 手帳の筆跡からしても、爺ちゃんと婆ちゃんの筆跡と一致しないから除外となると……居ないのだ、他に俺の能力を知ってる人間が。

「グビグビ」

メロンソーダを飲みながら、もう一度頭の中で整理をする。

この手帳の作者が、神様（仮）だとするにして次は、元の世界に戻る条件の整理だ。

……ここは何でも漫画か何かの世界らしく、俺が帰る為の条件は『その世界の原作ストーリーが終了する前に君が死ぬ事が出来たら、君の勝ちとし、元の世界に戻る事が出来るが、死ぬ事が出来なかったら永遠に君はその世界で生きる事になる』らしい。

正直「んだよ、簡単じゃねーか」思い早速中々のスピードを出してあった大型のダンプの前に飛び出し、自殺願望全開で自分から跳ねられてみたのだが……あら不思議、クソみたいな痛みと跳ねられた時の浮遊感来るだけで、死ぬ気配が全くしなかった。

それ処か、跳ねられた際に出来た傷や骨折が、瞬くまに修復してい

ったのだ。

こればかりは、齡18歳にして一番驚かされた、確かに俺は普通に人には無い力が備わっちゃいるが、それはあくまで“他人様の力を吸収”するだけで、こんな化け物じみた回復力なんか持つて無かったんだから。

ダンプに跳ねられて死ね無いと判った瞬間、即刻その場から立ち去り、ファミレスへと避難した。そう、これが第5の項目“能力強化と帰還方法”だ。

どうやら俺の能力は、この神様（仮）によってとてつもなく強大な力にしてくれたらしいな。

主に言うところ……俺はそう簡単には死ねない身体になったらしく、いわく『例え肉体を消し炭にされようが、バラバラにされようが、宇宙空間に放り込まれようが、遺伝子レベルから消し去られようがetc……とにかく一瞬で元に戻る』らしく、あろう事かそれプラス不老不死なんだと、手帳に書いてある。

この項目を見た時俺は思った……「あれ？ 将棋で言う所の詰みじゃないですか？」と、一瞬思ったが、俺はこう考えてみた“致命傷レベルの攻撃を絶えず受けまくる”そうすれば、何時かは死ぬんじゃない？ と。

まあ、この世界がどんな世界か知らないし、惑星破壊レベルの力を持った人間が居るとは到底思え無いが、何時か現れる事を願って手帳に明記されていたアジト兼、家に向かうのだった。

その際、家の様子を見た時に、抑えてた怒りが爆発したのは言うまでもないだろう。

続く

1:てんぷら(テンプレ)? ストリップ(フリップ)? ……ええっやめっ

次回は時系列が発覚します。

主人公の設定もどき（前書き）

まあ、よくあるパターンッスね。

主人公の設定もどき

名前：霧生 零

年齢：18（現↓14相当）

身長：183？（現↓175？）

血液型：Rh - AB型

利き腕：左

神とか唄ってる存在によって、いつの間にか別世界に飛ばされてしまった青年。

本人は始めの方は、軽く信じちゃいなかったのだが、元居た世界との違いが次々と発覚したために、早い段階で認める。

原作ストーリーが終わる前に死ねば元の世界に帰れる、そうでなければ永遠に死ぬこと無く飛ばされた世界に閉じ込められてしまう、といった、罰ゲームみたい嫌がらせを無理矢理執行させらる。その為、日夜死ぬ方法を模索しているが、神とやらに勝手に実装されたチートボディのお陰で、そう簡単に死ねない体質になってしまう。

性格は、周囲に流されやすく、それに加えて死ぬ事ばかり考えてる為、時たま不気味がられる。
要は変態に近い思考回路。

好みの女性のタイプは“年上のお姉さんタイプ”で年下とか口り系に全くと言って良い程反応を示さない。

容姿は普通にイケメンで、モテそうに見えるのだが、前述の好みのタイプ、性格が災いしてなのか余りモテてない。

能力1

ミュータント ゼロ・インフィニティ
突然変異：無腎蔵

主人公が元々持つ能力。 能力名を一部変更しましたが、効果は変わりありませんので、詳しくは「人生は矛盾しっぱなし」の主人公設定をご覧ください。

その2

リセツ
再臨

全てをあるべき状態に戻す力。

主人公のチートボディの原理にて、別の能力からの干渉が一切不可能で、常時発動に加えコントロール不可。

この能力が常時発動しているお陰で、主人公がいくら致命傷を負おうが、遺伝子レベルで消され様が、人間が知りえる理屈を通りこして再臨^{リセット}される。

この力の発動条件は、主人公が怪我を負ったり、死にかけると、主人公の意思とは関係無く発動するので、主人公が怪我を負わない時は発動はしないが、この能力のお陰で不老不死の不死身人間にされてしまう。

2：つーかこの世界の女（タレ）ってレベル高いな（前書き）

短いです。

2：つーかこの世界の女(タレ)ってレベル高いな

神とやらから状況を教えて貰い早8日……。

「ほら、ついたぞ！ 降りろ」

「……ハア」

俺は拉致られたのだ、中学校の進路相談員に。

「何時までもため息なんかついてねえで、さっさと教室に向かいやがれや!!」

「イダッ！ わ、解りましたよ……っ！」

進路相談員からして見たら、学校に行きたくねえオーラをバシバシ出しまくってる俺のケツを蹴りまくり、無理矢理学校へと強制送還させたのだ。全く、今の時代にそんな事をすれば、モンスターナンチャラと呼ばれる親からバンバンクレームが来ると言うのに、それを知ってか知らずか、この目の前に居る進路相談員は「でもそんなの関係ねえ!!」と言わんばかりであれよあれよと俺を名も知らねえ中学校に引っ張っていったのだ。

「じゃあ！ 何かあつたら俺んどこに来て良いからな。頑張^{テン}って頂^{ベシ}点^{ベシ}とってこいや！」

そんな進路相談員に後押しされ、何のだよ……とツツコミを心の中
で入れながら言われた通りに教室へと向かうのだった。

「……ハア」

処で、何故俺が中学生をやってるのかと言うと、何故かこの世界で
の俺の立ち位置は14歳の中学生で、この世界の物語が始まる三年
前からのスタートらしいのだ。

ちなみにに物語のタイトルは“めだかボックス”という名で、正直
内容は知らない。ジャンプに載ってたとか手帳に書いてあったの
を見て、ジャンプを読^よんでる筈の俺が知らないのが引^ひつ掛^かかるが、今
となつてはどうでもいい、とにかく一刻も早い内に死^しんで家に帰^{かえ}
つて婆ちゃん成分を補給しなければ、生き地獄をリアルに体験コース
直行だ。

まあ、今の所は向こう三ヶ月は大丈夫なんだが。

「オット……此処が俺が名簿だけに入^いってるクラスの教室か」

これから先、また中坊をやり直さなけりやならんと思うと、不思議
とテンションが下が^さってしまう……。

《ガラッ!》

「あ？」

「……………」

下がったテンションの状態で、教室に入ろうと扉に手を掛けるか掛けないかの時に事件は起きた。なんつーか一言でいうと、デンジャラスな人が居た。

うん、背は……今の俺よりちよいと高い程度で、金髪ロングの憎い程のイケメン。

そして肩に担いでるのは……折れにくいように短く切った鉄パイプ……。

「フツ……古い番長気取りってか？」

「……………」

鼻で笑いながらの一言が原因かはたまた、目の前に居たのがうざかったのかは定かでは無いが、肩に担ぐ感じで持ってた鉄パイプで顔面9発、頭頂部11発、計20発殴れた。うん、それはそれは清々しい位にぶっ叩かれたよ、だけどこの程度じゃあ死まない……てか死ねない。

出来れば後5億発位同じパワー、同じスピードで殴ってくれたら死

ねた可能性があったのに、地面に突っ伏した俺に満足したのか、さっさと帰っていった。

てかよ……何だこの学校は、人が殴られて倒れてるってのに周りはシカトですかい？ 薄情にも程があるってもんだよ。

「イテテ……」

頭から血がダラダラ流れてる。

俺は一応、死にはしないが、痛いという感覚はあるので頭を摩りながら、教室に居る連中に文句の一言でもいってやろうと中に入ると教室の真ん中に人の円が出来た。最初は、宇宙人かなんかを信じてしまってる別の意味で怖い集団が、宇宙人とやらを呼び出す儀式でもしてるのかと思ってたら、どうやら違うらしい、皆の顔が青ざめているのだ。

不思議に思った俺は、円の中心を一般的な中学生より若干背が高いのを利用して覗くと、一人の女の子が俺と同じ様に頭からダラダラと血を流して倒れてるのだ。

「成る程な……」

誰も聞いてないと思う一言が俺の口から飛び出す、どうやら彼女は俺よりチョイト前にさっきの金髪ロング君の生贄か何かにされた様だ。

だから、俺が殴られた時はスルーされたって訳なのね。

「つてオイ！ 君も頭から血が……！」

一人の男子君が俺のリアル血達磨人間状態に気付き、叫ぶと倒れてる女の子から俺に一齐に視線が向く。気が付くのが遅いぜ、よつちやんよ……と最初に気付いてくれた男子、仮名“よつちゃん”に心の中でツツコミを入れてると、このリアル殺人未遂現場に耐えられなかった者達が、次々と気絶して行く。

当然、授業処では無く中止。

俺は保健室に強制連行されかけたが、既に傷口が塞がってる為断り（その際に、大半の名も知らぬクラスメイトに変な目で見られた）その前に女の子の方が大変そうだったので、意識を女の子の方に持つてくる事に上手く成功させたのと同時に、このクラスの女の子について結構レベル高いなあ……と血だらけの顔をしながら、不謹慎な事を思う。まあ、全員俺の好みの対象外ですがね。

続く

2：つーかこの世界の女（タレ）ってレベル高いな（後書き）

中学生時代の話は飛び飛びで進みます。

3：「世の中を上手く渡る方法は、思った事をストレートに言わずに、オブラー

このお話の主人公は、結構人を突き放す言動が多いです

3：「世の中を上手く渡る方法は、思った事をストレートに言わずに、オブラー

——あの、会った瞬間に血達磨にされてしまった事件から早、何ヶ月か過ぎた。

「フ」

その何ヶ月かの間に、校内で人気の無い場所を調査した場所に俺はタバコを吸いながら、ボケーツと黄昏れていた。
一応この数ヶ月の間は、色々な死に方を試してみたが、イマイチ効果的なのは無かった。

具体的に言くと、自分で刃物を身体中（男の勲章以外にだが）に刺しまくって失血死を狙ってみたのだが、死ねず。

ある時は、狭い部屋に一酸化炭素を充満させて安楽死も試してみたが、逆に良い睡眠薬がわりになってしまい効果無し。

またある時は、首吊り自殺を試すが、気を失うだけに留まり、これまた効果無し。そしてこけ最近、阿久根君（一応設定的には先輩）を挑発して撲殺死を望んでみたのだが、「殺してくれえ」と言ったのがまずかったのか、気味悪がられて逆に近付きもしなくなってしまった。

しかも何時の間にか、俺が最初に見た時に血達磨にされていて、しかもそれ以降、ほぼ毎日の様にタコ殴りにされて居た黒神 めだかさんとやらが、何をしてくれたのか知らないが、阿久根君を改心させてしまったお陰で、この学校に居る間は恐らく、俺は死ぬ無かったのだ。

そう……唯一“肉体的な暴力”という名の爆弾を解体してくれたのだ、黒神さんとやらは。

全く、余計な事をしてくれるよ。

「フウ」

まあしかし、たかが中坊如きが本気で人を殺^ヤれる訳も無いのも事実だし、これはこれで良かったのかもな。

改心させられた本人も満更でもなさそうだったし？ それに、次の目星が無い訳でも無い。

あの現・生徒会長である球磨川君とやらは、ごく近い将来何か強大な能力を手に入れてくれそうだしな？

なにせ、あの生徒会の副会長さんはアレだもんな。

「おやおや？ こんな所に校則違反者がいるぞ？」

つと……噂をすれば何とやらだな、と思いながら声がした方向へと首を傾ける。

「まだ授業は始まってないんですがね……」

「そんな事は分かってるよ。僕が言いたいののは、君が口にくわえてる物のことさ。」

ああ、タバコね。

ハイハイ解りましたよ、消せば良いんでしょ、消せば、と悪態をつきながら携帯灰皿で揉み消す。

「ほら、これで良いですか？ 安心院先輩？」

キーホルダータイプの携帯灰皿を目の前にいる人物……安心院さんに見せ付けながら言うと、本人は「それで良い」と言わんばかりの顔をしながら頷く。

タバコ位、自由に吸わせてくれたっていいのにさ……と思っている
と、昼休み終了のチャイムが鳴り響く。

フト見ると、校庭で遊んでいた何人かの生徒が、校舎の中に入るの
が見える。

だが俺は、午後の授業もサボる気満々な為動かない。

「僕の事は親しみを込めて、安心院さんあんしんいんと呼んでくれたまえ……と
再三に渡って言って来たのに、まだ言うつもりが無いみたいだね……」

……」

「別に貴女と親しくなつたつもりは無いですし、これかもあるとは思え無いんでね、悪いがお断りさせて頂きますよ……ファゝア」

欠伸混じりに、ハッキリと拒絶の意を伝えた後、その場にねっころがる。荷物は教室だし、このまま良い感じに日が当たるこの場所でお昼寝と洒落込む腹積もりだ。

放課後辺りに、真面目さんな黒神さんに絡まれるがね。

「……あ？ 何だあ、まゝだいたんですか？ 安心院先輩、授業始まりませ〜」

「君もだろ？」

「良いんですよ俺は、中学生なんて義務教育なんだから、単位なんてねえし……てな訳お休み〜」

シツシツと、追い払うような仕種をしつつ本当は知ってる癖に、業と煽る様にして言う。

てか寝たいから早く消えて欲しい、ハッキリ言って……邪魔だ。

「君は……」

「あん？」

「君はどうして何時も僕を邪険にするのかな、僕に恨みでもあるの？」

軽く瞼を閉じつつ安心院さんの話を聞く。

邪険、ねえ。

「何時も、と言うほど貴女に会ってた気がし無いんですがね」

「そうだったかな？ 確か今日を入れて25回は顔を合わせてるんだけど」

「なに？ そんなに会ってたんすか？ なら今度からはお互い、0回を目指しよう」

くだらねえ事言っていないでとっと消えて欲しい、別にアンタに恨みなんか無いが、アンタの顔^{ツラ}を見ると、逢いたくて仕方が無い女性^ヒ性が頭の中に浮かんでしまう……。だからこれ以上、俺に関わらないで欲しい、と流石に声には出さないが、思ってしまう。

「……」

「……」

何時もなら、此处から妙な言い回しで俺を更にイラ付かせるのだが、今日は妙に大人しなと思うのと同時に、逆に何も言ってこないで俺を見下ろしている人物に腹が立って来る。

「……チッ」

思わず舌打ちをしながら、これ以上この空間に居ると苛々した感情が爆発するので、直ぐに別の場所へと移動して、そこで昼寝の再開をしようと思い、仰向けに横たわってた状態から重い身体を起こして、第二の安住の地へと足を運ぶ。

「……」

「……」

歩く……。

「……」

「……」

止まる、後ろを見る。
何か居る。

「……」

「……」

歩く……。

「……」

「……」

止まる、そして後ろを見る。
何か居る。

「……何ですか？」

いい加減鬱陶しいので、一定の距離を保ちながらついてくる安心院
さんに怒りを抑えながら聞く。

「別に……君と同じ方向に用があるだけさ」

「……」

ほう？ なら。

「そうでつか、なら俺は気が変わったんで、元の場所に戻って寝ますから……安心院先輩はこの先にある用事とやらを頑張ってくださいね」

と、恐らく自分で見ても、小憎たらしい笑みを浮かべながら、心にも無い事をすれ違い様に言い、元居た昼寝場所に向かいお昼寝モードに移行する。

流石の安心院さんも、それ以降はついてこなかった。
ちなみに何時もの俺なら、あそこまで人を邪険にしないつもりだし、ましてや人嫌いじゃない、それ相応の理由がある。

あの安心院さんの顔は似過ぎ……いや全く同じなのだ、婆ちゃんにいや、婆ちゃんの方が安らぎオーラが出てるから、一概には同じとは言え無いし、そもそもあの人と婆ちゃんを一緒にするつもりは無い。

そりゃあ、最初に見た時は本気でびっくりはしたが。

だけど、安心院さんを見るたび、俺の胸は苦しくなる……万が一いや億が一にでも、二度と婆ちゃんに逢え無くなるかもしれない不安感……。

だからあのひとだけは、必要以上に親しくするつもりは無い。
でないと、取り込まれてしまう、あの人に……安心院さんに。

「畜生……」

気晴らしのタバコも味がまずく感じる、午後だった。

そして更に数ヶ月後。球磨川君が何かしらをした影響か、安心院さんが……一部の人間以外の者の記憶から消えた。

続く

3:「世の中を上手く渡る方法は、思った事をストレートに言わずに、オブラー

次回……又はその次辺りから、原作に入ります。

4：「学校と学園って……つぶあんとかしあんの違いと同じ……じゃねえか」

どなたが知りませぬが、このお粗末小説を評価して頂き、ありがとうございます。

これかも地味に頑張りたいと思います。

さて、今回で中学生時代は終了します。

4：「学校と学園って……つぶあんとしあんの違いと同じ……じゃねえか」

あれよあれよと二年の時が過ぎ、季節は出会いと別れの春。
無事に中学を卒業してしまった俺は、もう何に対しても嫌になってきた。

「……ハア」

この二年もの間、何があつた訳も無く、結局死ぬ事が出来ずにズルズルとそしてグダグダとこの世界で生きて来た。

死ぬ為に様々な策を張り巡らし、ある時はヤの付く人が経営する違法賭博会場に向いてわざと馬鹿勝ちをし、ヤのつく人のイチヤモンにわざと反抗、そしてドラム缶コンク詰めにされて、東京湾沈められたりしても死ぬ、スカイダイビングをやった時は、パラシュートを開かずに上空一万メートル転落死を試みてもやっぱり死ぬない。まあ、そんなこんなで、二年が過ぎたつて訳だ……。

「ハア……」

そして今では、日に三回はため息をつくのが日課になってしまった。ちなみに、当の昔に婆ちゃん成分が切れたのだが、どうも俺の思考回路が“どうしたら死ぬる”とか“どう挑発したら殺してくれる”で頭が一杯で婆ちゃん成分が無くても生きられる状態なのだが。

「逢いたいな……」

二年という決して長くは歲月……それでも逢いたい気持ちは変わらない……いや、以前よりも逢いたい気持ちが強くなってる。

そう……自身の能力チカラの様に。

「……」

自分の掌を見ながら、二年前の時の能力チカラを思い出す。

今日で分かった事だが、俺の能力チカラは一年周期で増大していつてる。

始めの一年は、気が付か無かったのだが、今日この瞬間、俺の中に存在する二つの能力……婆ちゃんから名を貰った能力、無ゼロ・インフイニティが勝手に俺の中に容れてきやがった再臨リセットの力が増大して行くのが解る。

「早く死なないと……もう時間が無い」

あの手帳に明記されてるのが本当なら、タイムリミットは後三年、俺がこの世界に飛ばされる前の年齢になった瞬間に……俺は奴の暇つぶしの勝負とやらの負ける。

何故なら俺が18歳になった時、一年周期の力の増大とは比べ物になら無い位に能力チカラが肥大化する。原作ストーリーが終了するとか関係無い、認めたくもねえが、その時点で俺は完全に不死の生物になっちまうらしいのだ、そうなれば誰にも彼にも俺を殺す事が出来ず、自ら死ぬ事も出来ない。

それだけは……。

「絶対に……死んでやる!!」

端から見れば、危ない人みたいな発言をしてるのだが、生憎自分の部屋なのでその様な心配は皆無だ……それはそれで寂しいもんなのだが。

その夜……。

「明日からまた、高校生、か」

高校の“箱庭学園入学案内”と有りがちな文字がタイトルになる資料を読みながら、また面倒な学生生活を送るのかねえ、と肉体年齢と精神年齢のギャップを感じながら缶ビールを片手に柿ピーをポリポリと食う。

何故中坊の頃にサボりまくってた俺が高校に行く嵌めになったのかというと、あの進路相談員が余計な気を利かせてくれたお陰だ。

勿論最初は断ったが、進路相談員いわく、中々の身体能力を持つ者達がいったり、喧嘩が強そうな所謂“猛者”と呼ばれる奴らがゴロゴロ口といえると言うので興味本位で願書を出したのだが、次の日になって、合格通知書が我が家のポストに何故か投函されていた。

「数ヶ月前」

（何故に？）

意味が解らない状態で、進路相談員にその事を説明すると「よくやったな！！」と怪しむそぶりすら見せずに、暑苦しい抱擁をして来た。

これが女……しかも年上のお姉ちゃんとかだったらどれだけ良かった事か……と思いつつ、目の前にいる進路相談員は、もしかしたら真性の馬鹿なのかもしれない……と一人考えたのは記憶に新しい。しかも……。

「よしっ！ お祝いだ、学園の制服やらその他必要な物を買ってやらあー！！」

「はあ！？ いや、良いからー！！」

この三年で、一番絡む割合が多かったのが、この進路相談員だったのだが、流石にそこまでして貰う義理は無いので断った。だが、この強引な進路相談員は、全く聞く耳持たずに、学校に必要な物全てを買い揃えてくれたのだ。

「よし、これでお前は、気兼ね無く箱庭学園で頂点^{テッペン}としてこいやつ

！
」

「いやだから、何のだよ……」

人の話を聞かない人だと、三年もの間に分かった事で、半ば諦めながら聞くしか無く、結局、箱庭学園に行かなければいけなくなっ
てしまったのだ。

く回想終了く

「グビッグビッ……ぷっはぁ！ まあ、暫くは学校に行って、俺を
殺せる相手が居るかどうかわかる事にするかなあ」

4本目のビールが飲み終わり、明日の入学式に出る事を、取り合え
ず決めてさっさと寝る事にした。

（しかし……未だに不思議だな。何で俺が合格？ あれだけ中坊や
ってた時はわざと悪い事してた気がしたんだかな）

布団を被り、天井を眺めながらあの学園の事を考える。
授業には殆ど出ず、学校は直ぐ抜け出しサボり、そのままパチンコ
店直行等々……逆に素行が悪いのが目だったのだろうか？ と今更
考えた所で遅すぎるのだから。

「まあ明日は、ほんのちょっぴり楽しみだな」

あの進路相談員が言うんだから、良い奴の一人や二人居るだろう、いなかったら……うん、その時考えよ。

続く

4：「学校と学園って……つぶあんとしあんの違いと同じ……じゃねえか」

主人公は原作を知らないで、自身の利益になる為ならいきなり突撃をかます事が多々あるかもしれません。

設定2（前書き）

タイトル通りその2です。

設定2

名前：霧生 零

年齢：16歳（本来の年齢は18）

身長：180？（後に3？程伸びる）

血液型：Rh - AB型

容姿：ジュエルペットに登場するキャラ、アンディ王子と全く一緒
（知らない方は画像検索でもして下さい）

結局何だかんだで、この世界で三年程生きて少し成長した青年。
本人はさつさと死にたいのだが、チートボディのお陰で死ね無い、
そして殺されないので全体の三割程、諦めモードに入ってるが“婆
ちゃんに逢いたい”を行動原理に頑張ってる。

性格は死ぬ為には他者を平気で利用し、その者に利用価値が消えた
瞬間表には出さないがその者に対して一切の興味を示さなくなる。
それ以外は、「健全な死にたがりの学生」と自称している。

ちなみに中学校時代によく絡んだ“先生”のお陰でチャラ男予備軍となっていて、本人も一応の自覚がある。そして相変わらずモテない——とまでは行かなくなったのだが、性格や素行に一癖、二癖もある人間からは妙にモテる。

能力1

ミュータント
突然変異者

ゼロ・インフィニティ
無腎蔵

他者の能力をコピー又は取り込み、自身の尺度で永続的に昇華させる能力。（能力を取り込まれた者は能力を永久に使え無くなる）

1年周期で能力が強くなっていつてる。

一年目は、相手の使う異常・過負荷を見れば即自分の物と出来る様になった。

二年目は、永続進化のコントロール。

三年目は、5?以内ならワイヤレスで相手の能力を奪い取る事が可能となった。

能力2

リセット
再臨

主人公のチートボディの原理にてコントロール不可能。
こちらでも1年周期で能力が強くなっていつてる。

一年目はリセットさせるまでの時間の微妙なコントロール。

二年目は他者にある程度干渉させる事が可能に。

三年目は他者に干渉する際に30?以内ならワイヤレスで能力を干渉させる事が可能になった。

設定2（後書き）

次回から原作入ります。

5：「入学式？ ああ、つまんねーからサボるよ？」（前書き）

主人公は別に不良じゃありません。

単に面倒臭さがりなだけです。

5:「入学式？ ああ、つまんねーからサボるよ？」

花粉症の季節の春。

願書を提出しに行った時から感じてた学園のデカさに平常運行まっしぐらのテンションで学園の門をくぐった。

（右を見ても、左を見ても知らん顔ばっか……）

学園の広さと周囲の人の多さに、早くも帰りたくなつたが、中学の時の進路相談員のメンツの為にも今日位は一応行つてやらないといけない気がしたので来たのだが……。

(ダルウ……)

クラス訳も程なくして終わり、俺が通う事になった一年一組の教室に入り、時間までの自由時間が暇で仕方ない。

なんせ、知り合いのしの字も居ないのだ。

(ああ、帰りにえ帰りにえ帰りにえ帰りにえ帰りにえ帰りにえ)

脳内でずっとBGMのように帰ってえがコール流れる。

つかさつきから周りの餓鬼共が、俺を見ながらヒソヒソと話してやがるのが鬱陶しい、俺は見世物でもましてや食い倒れ人形でも無

い。

（我慢しろ……此処でブチ切れてこのガキ共をぶちのめしたら、それこそ俺の計画がペアだ）

此処は、古今東西昔からある机に突っ伏して睡眠学習モードが一番だと思い、お眠りに入るが。

「ねーねー！」

「……ZZZ」

誰だか知らないが、俺の背中をチョンチョンと突きながら呼ぶ。対して俺は、古今東西である“シカト”を発動中。

「ねーねーってば！」

「……ZZZ」

我慢しろ、キレるな俺。

「オゝイ寝てるの？ 寝てたら返事してよゝ」

「だあああ！！　るっせえぞゴラァ！！！！」

俺の制服を引っ張りながら起こしに来やがって……決まりだ、ブツ殺す、と並々ならぬ決意の下、目の前いたチビなクソガキを睨む。

「オウ！　ワレエ、よくもワシを起こしてくれたのお！！」

人に聞けば100%ヤー公の口調ですと言わんばかりの形相と口調で、目の前のアホ毛チビ餓鬼（見た目判断）の頭を片手で掴み、自分目線まで持ち上げる。

周りが「こ、殺される」とか「うほっ、いい男」等と言ってるが知らん。

「いやーゴメンゴメン。機嫌が悪かったみたいだねっ」

何だこのチビ、全くヒビツて無いばかりか、腹の立つ笑顔を見せてきやがったぜ。

「今の俺は最っ高に気分が良いんでね、この窓から放り投げて擬似スカイダイビングの刑に処してやるよ」

これで普通の人間は死ねるのだから、羨ましい事この上ない。

「アハハッ！ その前に君の足元にあるメモ帳を拾ってくれと嬉しいんだけどなあ」

「あ？」

最後の遺言か？ と思いながら自分の足元を見ると、確かに今時の餓鬼が使用しそうなメモ帳が。

「なんだこれ？」

「それ、アタシのなんだけど、返してくれると嬉しいなあ……なうんて」

「あ？ ああ、ほら」

「アリガト……ついでに降ろしてくれると嬉しいなあ、ってね」

「え？ お、おお」

アホ毛チビ餓鬼の言われた通りに降ろす。
何か言いくるめられてる気がしないでも無いが。

「うん、それじゃあ拾ってくれてありがとだねー!!」

そして風の様に、俺の前から姿を消した。

「なんだっただ？」

もはや、怒りも湧いて来なくなったので、その場に座る。

周囲の餓鬼共が俺をスゲー目で見てくるので、たまたま筆記用具容れの中にあったカッターを取り出し、刃を出したし引っ込めたりしたら、一斉に視線を逸らしてくれた。しかしあのチビ……友達には慣れそうにないな、気にはなるがね。

第一、メモ帳を取る位で俺を起こそうとする意味が解らない。だとすれば、単に俺が珍しかったのか？ まあいい、いずれにせよだ。

（確かに、アンタの言った通り……この学校は面白いかもな）

心の何処かで、余り期待しちゃあ居なかったが……フッフ、少し評価を改める必要ありだな。

それから暫くして、入学式が始まったが当然の如く出席してない。

所詮入学式なんて何処の学校も同じだろうし、何より今は喫煙場所の搜索が先だ。

（体育館裏、旧校舎裏、そして時計台の頂上。フフン、この学校は穴場がいっぱいだぜ）

既に頭の中は、ヤニ、ニコチン、タバコ、煙り、と続け様に流れていく。学校の為にニコチン摂取が出来ねえとかフザケテやるからなあ。

（んで、最後が……）

どっかの屋敷みてえなデカサを誇る建物を見上げていた。此処は剣道場……噂によると、剣道部が廃部になった後に不良のたまり場になったとかならないとか。

「さて、小僧共は仲良くしてくれるかな？」

まあ、いざとなれば全員追い出しゃあ良いんですけどね。

「1年坊！　ここ座れや！！」

「ウゝッス」

「1年坊、火いかせや火！！」

「オイゝッス」

結論、直ぐに仲良くなりました。

いやあ、こつも簡単に仲良くなれるとはねえ。

先輩方いわく『オメエから同じ匂いを感じる』ってんで、凄い歓迎されちまったよ。

「そついや、知ってるか、新しい生徒会長？」

俺が先輩方のタバコに火を点けると、誰かが不意に話題を振って来た。その内容が非常に興味深いので聞いてみる。

「生徒会長お？　なんだそりゃあ？」

「なんでも、スゲエ奴が生徒会長になったとか……」

「ああ、しかも1年らしいぜ？」

「明日の朝会辺りに出て来るとか」

「どんな奴なんだ？」

「聞いた話じゃ、化物みたいな奴だとか……」

「それ俺も聞いた、なんでも3Mはある巨人とか」

いる訳ねえだろ、んな奴と思いながらも、明日の朝会は出てみま
すかと思うのだった。

続く

5：「入学式？ ああ、つまんねーからサボるよ？」（後書き）

次回から本格的に原作突入です。

6：「『24時間365日誰からの相談を受け付ける』……………いやいや、男が

あえて原作沿いに主人公を突っ込む……と見せ掛けて、です。

クオリティーは何時も通りです。

6：「『24時間365日誰からの相談を受け付ける』……………いやいや、男が

ゝ何だかんだで数日後ゝ

『世界は平凡か？ 未来は退屈か？ 現実 is 適当か？』

「ふあゝあ……………ねみい」

『安心しろ、それでも生きてることは劇的だ！』

（今日の夕飯何にすっかなあ……………）

『そんな訳で本日より、この私が貴様達の生徒会長だ。 学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで、悩み事があれば迷わず目安箱に投書するがよい』

（あつ、塩と醤油切らしてたんだつた。 帰りに買わないと……………）

『24時間365日、私は誰からの相談でも受け付ける！』

「やべえ、タバコも補充しとかねえとな」

体育館の外まで響く女の子の声をバックに、俺こと霧生零は黄昏れ

ていた。

いや、最初はきちんと中に入って噂の生徒会長さんのツラを拝もうとしたのだが、なんか怠くなったので音声が届く場所まで行って、そこでサボる事にしたのだ。

「ふわぁ……ねみい」

今日になつて何回言つたか解らない。

なんせ昨日は、珍しい高レートの雀荘に行つて遅くまでジャラジャラやってたからなあ。

まあ、結果だけ言えば勝つたけどね、四暗刻・大三元の西の単騎待ちが炸裂した時の爽快感は半端無い、一気に点差が開いたし。

「今日もタルいし、帰ろうかなあ……」

学校に登校して約一時間チョイ、早くも俺の中の悪魔が『帰って寝た方が良くぜえ、ケケケ!』と囁いてる様な気がしてる。

「うん、決めた……帰ろう!」

心の中の天使が『真面目に授業を受けなさい!』とか言ってる気がないでも無いが、悪魔の方と契約を交わした俺にはもはや聞こえなかった。

教室に戻ると、俺の席の隣の席にて突っ伏しながら何かブツブツ言ってる野郎一人と、誰かの噂をしている昨日のアホ毛チビ餓鬼がいる。

「……」

その横をさりげなく座り、鞆を取りながら帰りの準備をする。

横の二人以外の餓鬼共が俺を『何でいんの？』みてえなソラで俺を見てくるが、もはや慣れたもんだ。

（よし、準備完了……かゝえろつと）

今日の夕飯は何にすっかなあ、とか考えながら帰る為に席を立つが、隣にチヨロチヨロと動いてたアホ毛チビ餓鬼が喋ってるのが聞こえる。

しかし今更だが、この学校の制服って、なんかダサいな。

「しかし、あのお嬢様。全校生徒の前でよくあんな啖呵が切れるもんだよ、人前に立つのに慣れてるっつかさー」

「カッ！」

横目で何気なく聞いていると、机に突っ伏してた男子が、苛々した感じで身体を起こす。

「ありやあ人の前に立つのに慣れてるをじゃねーよ、人の上に（・・・）立つのに慣れてんだ！」

「んーそうだね。そうでなきゃ、１年生で生徒会長になれないもんねー」

ああ、何だ生徒会長の噂ねえ、周りの餓鬼共と一緒にか。

まあ、俺はその生徒会長さんのツラを見ちゃいねえからな、話題についていけない。

そもそも集団の輪に入る事はもはや不可能だが。……ってくだらねえ事考えてないで早く帰ろうと思ひ席を立った瞬間、椅子が後ろの机に良い感じで当たったお陰で、中々の音がした。

「あ……」

思わず出てしまった俺の声。

「うん？」

「あん？」

直ぐ隣に居たアホ毛チビ餓鬼と金髪坊やがこちらに気付く声。

「……何？」

何でか知らないが、俺の顔をジーツと見てきやがる目の前の餓鬼二人。

肉体年齢的には同い年かもしれないが、精神年齢は二十歳ぐらいあるからな、頭の中では餓鬼と認定してるのだ。
声には出さないがね。

「あれ？ 君って昨日の……？」

「ああこの前、睡眠妨害してくれたチビね……」

取り合えず、あたかも今気付きましたみたいな感じで話を合わせる。

「チビって、そりゃあいくらなんでも——「霧生！？」……え？」

「は？」

アホ毛チビ餓鬼との会話とは余り言えない行為に勤しんでると、後ろに居た金髪ボーヤが指差しながら俺の苗字を叫ぶ。

てか、あんまり目立ちたくねえからデケエ声で俺の名前を呼んで欲しく無いし、何故デメエが俺の名前を知ってるんだよ。

「えーっと、何で君が俺の名前を知ってるの？ …… どうかで会ったっけか？」

『ワレエー！！ 何処の組の者じゃコラア！！』とは言え無いので、比較的優しめに聞く。

真面目な話、こんな金髪ボーヤの事等知らないし。

「人吉善吉だよ。ホラ、中学の時に同じクラスだったろ！？」

中学？ いや、俺殆ど授業サボってて当時のクラスの顔と名前なんて覚えちゃいないんだけど。

「ん？ ゴメン覚えてないや」

「そうか…… あっ、なら黒神めだかは知ってたんだろ！？」

「ん？ あゝ よく覚えてるぜ、授業サボるたんびに絡んで来た女の子だろ？」

ヒデエ時は、無理矢理連行されそうになった事もあったっけな、逃げたがね。

「そうそう、そんな時に横に黒い髪をオールバックにした奴がいたろ？」

オールバック？ …………… あっ、ちょっと思い出して来た。

「いたけど……え？ あの時の子って君なの？」

「思い出したか！？ それが俺だよ」

お、オイオイ。マジかよ、人って髪型が変わるだけで分からなくなるもんだなあ。

「そうなんだ……ほえゝ
わかんねえもんだなあ」

「まあ、あの後直ぐに周りから『ダサイ』って言われて直ぐに戻し

たからな」

「へえ……所であの子は元気なの？」

「あの子って……ああ、あいつの事か？ その言い方だと、あいつがこの生徒会長になったの知らないのか？」

「そうだったの？ ゴメン、俺朝会サボってたからさあ」

「ハハッ、相変わらずだなあ」

苦笑いしている金髪ボーヤ改め、人吉君から聞いた情報に少しばかり驚かされたぜ。

確かに今からしたら聞いた様な声だった気がしたけど、まさかこの学校にいるとは。

参ったな……あの子が生徒会長となると、少しばかりめんどうになりそうだな。

「あの〜」

「ん？」

二人で軽い会話を交わしていたら、いつの間にか空気が奴になりかけてたアホ毛チビ餓鬼が、会話に乱入して来た。

「いやー二人共、アタシの事忘れてるっばいかなあゝなんて……」

「……スマン、正直忘れてた」

普通に申し訳なさそうに謝る人吉君に対して俺は。

「申し訳ございません。正直に言えば意識して忘れようとしてました」

友達にはしたくないような言葉で攻める。
俗に言う軽めの毒舌だ。

「あはは……」

「相変わらずだなお前。なんつーか、わざと人を突き放す言動が目立つつーか……ああ不知火、コイツが言う言葉は一々間に受ける必要なんて無いからな？ 単なる挨拶代わりみてーなもんだし」

「アタシは全然気にしちゃいないから大丈夫だよー！ 昨日も色々

あつたしねー霧生く〜ん？」

俺は人吉君の事を知らないのに、俺の事をある程度知ってるってのは妙な気分だな。

それとアホ毛チビ餓鬼改め不知火さんとやら、ニヤニヤしたツラで俺を見るなよ、この前のアレは結構マジだったんだからさ。

「人吉君がそこまで俺を知ってる理由を聞くのは置いといて、だ。新しい生徒会長さんの事が少しばかり気になるんだが……」

これ以上グダグダと話す気も無いので、さっさと内容の起動修正する。

適当に話をすれば、向こうも勝手に満足するだろうし、俺も気持ち良く帰れるって訳だ。

「あ？ ああ、あいつね……本当めんどうな事をしてくれたよなあ」

「それは本心で言ってるのか？」

「どついつ事？ 霧生君」

「ん？ ああ、この子……っーか人吉君ね、俺が中坊の時の記憶か

ら察するに、いつも黒神さんと二人一緒だったからなあ」

「へ〜？」

「ばっ！ 誤解を招く言い方をすんな！！ あれはあいつが勝手に
だなあ！」

照れ隠しか何かで、まくし立てる人吉君。
ほほう、なら。

「不知火さん不知火さん、見て下さいよアレが俗に言う“ツンデレ”
ってやつですぜ？」

「見ました見ましたよ〜霧生さん。全く何で素直になれないのです
かねえ」

流石だぜ不知火さん、やつぱりこの子は、人を引つ掻き回すタイプの
様だな、アドリブもなんのそのでこなしてくれたぜ。

「お、お前等……さっきまで余り仲良くなかったよな？」

「えー？ これは別に仲が良いとかじゃ無いんだけど……」

「そつだよ人吉君、単なる“ボケ”と“ツツコミ”みたいなもんだよ……」

「「ねー？」」

「ぜってえ仲が良いだろお前等！？」

人吉君のツツコミに久しぶりにゲラゲラと笑ってしまった。

不知火さんからのパスも良い感じで受け止められた俺は気分が良くなったのか、そのまま三人で談笑する事にした。

心の中の悪魔が『サボんじゃ無かったのかよ！？』とか言ってる気がしたが、面白けりやそれで良いやになってしまった俺は普通にスルーを決め込む、別に俺は人嫌いじゃ無いし、普通に面白いのなら人に話掛ける事だっけるさ。

↓数分後↓

「でもよ、確かにあの子は凄いケドさ……捏造ばっかだな、聞いた限りじゃ全長が250メートルあるとか聞いたんだけど」

「いやいや、ないない」

「あたしも聞いたよ、高度6万フィートをマッハ2で走行とか」

「何だよそれ、身体が超合金か何かで出来てるってんなら解るけど」

「つーかもはや人間じゃねーよ」

自然と生徒会長さんの話をしていた、なんせ話題が無いもんだから。

「んでさあ、人吉」

「あ？」

「アンタもやつぱり生徒会に入るの？」

「あ、そりゃあ俺もきになるね」

まあ、多分入るんだろうが。

「カツ、確かに何度も誘われちゃいるがな、これ以上あいつに振り回されるのはゴメンだな！ だから……」

予想はできるが、何かを宣言する為に一息入れ、そして。

「俺はぜってー！ 生徒会には入らない！！！」

元々容姿は普通にカッコイイので、妙に決まっている人吉君なのだが……ああ、後ろに何かいなければもつとカッコイイのにな……。多分隣に笑顔で固まってる不知火さんも似た様な感想を思ってる事だろう、うん。

「まあ、そうつれない事を言うな善吉よ」

そして後ろに居た女の子は、人吉君の頭をガシツとわしづかみにする。

本人はこの世の終わりみたいな顔をしてる、成る程ねえ性格は余り変わっちゃいねえか。

「ん？」

「あ？」

何故か知らないけど、俺のツラを見て一瞬固まる生徒会長さん。思わず喧嘩越しの口調の返事を返してしまったのは仕方がないでし

よう。

「貴様は……」

「はい？」

「フツ、調度良い貴様も来い!!」

「えっ——グエツ!!」

そう言つて俺の首根っこを掴みながら、連行して行く。
それを不知火さんはハンカチん振りながら見送るのが見える。
フツ、白状な子だぜ。

続く

6：「『24時間365日誰からの相談を受け付ける』……………いやいや、男が

先に言っときますが、主人公はチャラ男予備軍です。

7：「この俺に後退は無い！ 在るのは前進全勝のみ！」……うゝむ一度でい

いつの間にか総合評価が100を越えてました……。

いやマジで恐縮です。

これをバネに頑張りたいです。

ありがとうございます。

さて、今回で主人公のルートが決まってしまいましたが、先に言え
ば王道ルートって奴です。

元々はこのルートにするつもりは無かったのですが自分、二次創作
で主人公ルートで話を作った事が無かったので、チャレンジの意味
でやってみました。

ちなみにお互いの呼び名ついて突っ込みたい所があるとは思いますが、
一々主人公を〇〇何年と長くなるのであえて下の名前で呼ばす
様に無理矢理矯正しました。

そのところは広い心で受け止めてくれたら幸いです。

それではどうぞ。

7：「この俺に後退は無い！ 在るのは前進全勝のみ！！」……うゝむ一度でい

理不尽という言葉がある。

意味は『道理に合わない事』なのだが、今この瞬間にも俺はそれ（・
・）を味わってる。

「霧生、大丈夫か？」

「人吉君さあ……理不尽って言葉、誰が考えたんだろうね？」

「言いたい事は分かった……オイ！ 普通に連れてこれねえのかよ
！？ 生徒会長さんよお！！」

人吉君が目の前に仁王立ちして居る生徒会長さんに吠える。
出来たら俺も援護射撃をしてやりたい気分だ。

「フン、私の誘いを断り続ける貴様が悪い。それに昔のように“め
だかちゃん”と呼ぶが良い」

「そんな事は今は良いんだよ！ 俺はともかく、何で霧生を連れて
来たんだよ？ 見ろよ霧生の奴、余りに唐突な事が起こってボーッ
としてやがるぞ？」

「……アハハハ、ちょうちょになりてえ」

窓の向こう側に居る紋白蝶が羨ましいぜ。

「ム……。そうだな、善吉にも言って置くか……。オイ、コッチを向け！！」

「ブヘッ！！」

頭に鈍い衝撃と共に意識が紋白蝶から元に戻る。決まった、文句を言ってやるう。

「ってなあ……。ゴラア！ 人の頭は叩けば600万個の脳細胞が死滅するとか訳の分からない説が流れてるんだよお！！」

論点が軽くズレてる気がしないでも無いが、文句の一つ位言っても罰は当たらんだろう。

大体昔から苦手なんだよ、こういったタイプのガキ女^{タレ}は。

「フン、人が折角引っ張って来たのに話を聞かないから悪いのだ」

「うわぁ……人吉君聞きました？ バツサリ切り捨てましたよ？
彼女は鬼ですか？」

「諦める霧生、奴は昔からそうだ」

「うん、何となく分かってたさ」

人吉君に慰めると言った情けない構図になつてるにも関わらず、当
の生徒会長さんはやり切った感丸だしの表情で制服を脱ぎだす。

「うぉーい！！ 当たり前のように人の後ろで着替えてるんじゃない
！！」

「？ 私と貴様の間に恥じらいなんてないだろうに、少なく共小六
の時まで、一緒に風呂に入った仲だろう？」

「昔の話だろうが！ それに霧生だっていんだらうが！！」

「つかよ、俺はこんな茶番劇を見せられる為に連れて来られた訳じ
やねえよな。」

何か今になって眠気が来ただけど。

「フン、奴なら別に問題は無い。その証拠に見ろ」

「ああ!？」

「ふあゝあ……」

「よ、余裕な表情をしながらの欠伸……」

「あゝ ねみい」

「奴は中学の時の修学旅行の時に女湯に間違って入った時も、あんな態度だったしな」

「おい……」

俺の黒過ぎる歴史をほじくり返すなよ。

「あゝ オレも思い出した。確かすつげえ涼しい顔して何か言ったら、女子にタコ殴りにされてたって噂が……」

「君も思い出すなよ」

人吉君の言った通り、中学の修学旅行の時に何を間違ったのか、女湯に入ってしまった事がある。まあ、中学生という餓鬼の肉体を見て欲情する変態なつもりは無いし、俺の好みの女性のタイプから大きく掛け離れた人種なので思わず鼻で笑いながら素っ裸の女の子達に向かって『乳臭い身体だな』と言ってしまい、女子全員からの報復を喰らったのだ。

結局死ぬ程のダメージは無かったが、多分生きて来た中では一番死に近いダメージだったかもしれない。

「俺のくだらない話は置いて、だ。俺を連れてきた理由は何ですか？ まさか思い出話に花を咲かそうなんて事は無いでしょ？」

「フツ、相変わらずだな……何、善吉と貴様を呼んだ理由は他でも無い」

「……」

どーせ人吉君を呼んだ理由は分かるからアレだけど、俺を連行した理由がわからない為、何時に無く真面目に聞いてやろうと、生徒会長さんの顔を見る。

「改めて言おう二人共生徒会に入ってくれ、私は貴様等が必要だ」

誠意の籠った言葉と共に頭を下げる生徒会長さん。

人吉君は、何かを想ってるのかダンマリだが、俺は訳がわからない。

「ちょっと待って下さいや。俺が必要？ 冗談は顔だけにして下さいよ、何で俺なんですか？」

マジで意味がわからない。

俺が必要って……俺は人吉君みたいな幼なじみとやらでも無いし、お世辞にも模範生徒じゃ無い。それに中学の時は決して仲が良かった訳では無いのだ。

「貴様は中学の時に私の言う事に全く従わない者の一人であり、尚且つ私以上に……だからな」

「！？ 何だと？」

ボソリと言った言葉に、思わず口調が戻る。

まさかこの餓鬼……気付いてやがるのか？

俺が普通を通り越した存在だって。

なら……。

「どうだ？ 頼む……私を手助けてくれ、霧生一年よ」

「……フッ」

「？」

「クツクツクツ……」

やべえ、我慢が出来ねえよ。

「クハハハハハハハハハハ！　ハッハハハハハハアッ！！！」

多分この世界に来て、一番の笑い声を出したと思う。
まさかなあ、こんな餓鬼に気付かれるたあな。

「フウ　良いだろう！　アンタに着いてけば、俺の目的は更に完全なものになるからな！！」

「そうか、なら」

「ああ、生徒会とやらに入ってやんよ」

この餓鬼がこの世界の主人公だつてのは、名前で分かつてた。
なら逆に奴等の輪とやらに入つて、いずれ来る死亡フラグとやらに
真つ向からぶつかつて……………死んでやるよ。

「ではよろしく、生徒会長さん?」

「ウム、こちらこそ頼むぞ霧生一年」

「ノンノン、俺の事は零で構わんよ……………まあ、呼びたく無ければ良
いんだケドね」

「良いだろう貴様は特別だからな、喜んで呼ばせて貰おうか。それ
なら私の事はめだかちゃんと呼ぶが良い“零”」

「フフツ、今だけ君が好きになれそうだよ“めだかちゃん”」

お互いに握手を交わしながら俺は思う。
今日を持って俺は生徒会に入ることになった、俺自身の目的の為に…
…頼むぜ? 黒神めだかよ、お前なら俺を殺してくれるかもしれないのだからな。

「さて、善吉はどうだ? 零は喜んで生徒会に入ってくれるらしい
が、お前はどうか?」

「ちくしょう、こんな状況で断れる訳ねえだろうが。良いぜ、テメーに振り回されるのははや慣れっこだからな、俺も入ってやんぜ生徒会によー!!」

「決まりだな」

「だな」

黒神めだかが微笑むと同時に俺も薄く笑う。

人吉善吉君、君も俺の為に頑張って貰おうかな？　ククク……。
その後、何故か三人で円陣を組む事になった。
ハズイぜ……。

続く

おまけ

零

「そっいや、俺と人吉君の役職って何さ？」

善吉

「俺の事は善吉で構わねーぜ」

零

「あ、マジ？　なら俺も零って呼んでくれや」

善吉

「おう！」

めだか

「役職については、後で言う、今は早速来た依頼を片付けてからだ」

零

「依頼？」

めだか

「『三年の不良達が剣道場をたまり場にしてます、どうか彼を追いつめてください』だそうだ」

零

「え、っ！？」

善吉

「ん？　どうかしたのか？」

零

「い、いや（俺もその仲間だった……って言えねえ）」

めだか

「よし、行くぞー!!」

零

「（先輩達……ご愁傷様でござりまする）」

終わり

7:「この俺に後退は無い！ 在るのは前進全勝のみ！」……うゝむ一度でい

先に言っときます、主人公はニコ中です。

8：「勝つぞ……！絶対に勝つぜえ！！」とか言った瞬間負け確定さ（前書き

急ぎで書いた為に、話が飛び飛びのクオリティー最低です。

申し訳ございません。

8：「勝つぞ……！ 絶対に勝つぜえ！！」とか言った瞬間負け確定さ

——やはり世の中は解らないもんだ。

なんせ俺が生徒会とやに入る事になったのだから。

まあ、それが普通の生徒会なら入りはしない、だがあの生徒会長さんは話は別だ、あの子は何かを持っている。

その何かのおこぼれを貰う為に俺は疲れない程度に頑張る事にしたのだ。

剣道場の件から一週間後……いやあ、あの時は大変だったなあ。

生徒会と先輩の板挟みをもろに受けたし、同じクラスの日向君とかいう奴（その時初めて知った）が良い感じでイッちゃってやがったのを善吉君とめだか君が上手く纏めてくれたし、俺も色々と裏で動いて上手く片付いたのは奇跡に近いぜ。

主に先輩達に土下座しまくったり、場合によっては殴りまくって記憶を消したりとか……。

「フウ……生徒会室は、空調完備だからサボるのにはもって来いだな……ニコチンは摂取出来ねえがね」

中々に日当たりも良いし、エアコン常備、これに灰皿が用意されてりゃあ言う事無しなんだがね。

「いやいや、お前未成年だよね？」

「アアン？ 良いんだよ、俺の精神年齢は二十歳越えてっからさあ……っーか俺がヤ二吸ってる事知らなかったっけか？」

「知ってたけどよ……学校に居る時ぐらいいは我慢したらどうよ？
それに、その理屈は理屈にもなってるねーぞ」

「アハハ……確かに」

実際問題、俺の精神年齢は二十歳過ぎなんだかな……と言った所で信じちゃいけないか。

「っーか善吉君よ……さっきから鏡の前で何してんのさ？ 自分の姿に酔いしれてるの？」

さっきからソファでねっころがる俺の斜め前で、全身が写る鏡を前にして、生徒会専用の制服を着ながら、何やらため息をついてる善吉君が地味に気になるんだがね。

「ちげーよ。俺って黒の服が似合わねえと思ってる訳でさ」

「はあ、そうか？ 俺は結構様になってるように見えるんだが」

実際に善吉君は普通に着こなしてる様に見えるんだが、一体何が気に入らないんだか。

「あゝあ、だから制服白のこのガッコにしたのによ」

「学校選ぶ理由が軽すぎ無いか？」

何その『このラーメンは気に入らねえから、ちょっと県外まで行く』みたいなノリは。流石にビツクリよ？

「いやそんなことはない、善吉には黒が良く似合う」

おう？ いつの間に善吉君の後ろで同じポーズしているめだか君が居るぜ、ボケーツとしてたから気付かんかった。

「どうわっ！ だからなんでお前はいつもいきなり後ろにいるんだよ！ー！」

そして何時もの様に驚く善吉君。

「チヨリッス！ めだかちゃん」

軽目の挨拶をする俺に対して、ウムと一言返したためだか君。

「善吉よ、見てくれが気になるなら内側にジャージでも着てみたらどうだ？ きつと格好よいであろう」

めだか君の提案にほほうとなる俺。

確かにカツチョよさげな気がするからね。

んで案の定半信半疑で中にジャージを着てから制服を羽織るとあら不思議、トラックの運ちゃんみたいな格好の出来上がりだ。

「デッ、デビルかけえ！！ 反骨精神のカタマリみてーだ！」

「良いなあ善吉君…… オリジナリティある格好に加えて普通に似合ってるし……」

「そ、そうか？」

テレテレしてる善吉君に対して普通に羨ましいと思う俺。

いや、普通に格好良いっしょアレ？ なんか世間じゃダサイみてーな事言われてる気がするが、少なく共俺は良いなあと思うぞ。

「ねえねえ、時々真似して良いかな？」

「おう！　どんどん真似てくれ！！」

お、おおふ……ニカッと笑う善吉君が眩しいぜ。

「制服の話はそこまでにして、そろそろ目安箱のチェックの結果を
言うぞ」

会長専用の机の上に目安箱を置き中に入ってある紙を取り出す。

あ、ちなみに俺は普通に制服着てるだけです。

「明日から目安箱の管理は庶務である善吉の仕事だ。本生徒会の最
優先事項だから、決して手を抜かぬ様に」

「へい」

けだる気に返事をする善吉君。

彼の役職は庶務で、ちなみに俺は……。

「ねえ、俺に対しての仕事は何か無いの？」

「“役員補佐”である貴様は今の所は善吉の補佐をしてくれ、今の所私が手を貸して欲しい所は無いからな」

「ういゝ」

これが俺の役職“役員補佐”で内容は他の生徒会役員の手伝い及び意見出しで、なんでも緊急時には生徒会長と同じ権限を持つ事が出来るとか……。

まあ緊急時以外は庶務と殆ど（・・）変わらないのだがね。

「でもさあ、俺の役職って十代前の生徒会で無くなったとか聞いたんだけど、何で今更復活させたのさ？」

「先日も言った通り、私は貴様……零に手を貸して欲しいとは言ったが、お前が私の下というのは私自身納得がいかないからな。だから緊急時に会長と同じ権限を持つ事が許される役員補佐を復活させたのだ」

「ふゝん、別に俺は下でも構わないんだけどなあ」

「それじゃあ私が納得出来ないのだ。とにかく貴様は役員補佐で決定だ」

「へいへい」

「では早速来た依頼を片付けるぞ」

「ウッス！」

「おうっ！」

まっ、この子の近くにいたりやあ、いずれでかいヤマが来るはずだしその時までは無難に従わせて頂きますよ。

つー訳で目安箱に投書された依頼をやる事に。

「ふむ、今回はちゃんと記名されてるみたいだな」

「あの……ごめんなさい。本当はこんなこと下級生のあなた達に相談することじゃないかもしれないんだけど……」

「下級生？……って事は貴女は先輩？」

「え、ええ……（なにこの子……）」

「なんだ貴様、ちゃんと投書の内容を読んで無かったのか？」

「まあ、一人が内容を把握してりゃあアレになって……で、ちなみに学年は？」

「二年九組……だけど」

「ほほう、なぐるほど、へえ？」

「おい零、急にニヤニヤしてどうしたんだよ？」

「フツ、後ろの二人が俺の好みの女性のタイプを知ってる筈無い、か。それにしてもフムフム、年上かぁ。良いね良いねえ、テンション上がって来ましたたよ？」

「よし、遠慮はいりません。俺達は誰からの相談を受け付けるがモットーですから、ササッ！ お茶をどうぞ」

先輩……いや有明さんにお茶を出す。

一応精神年齢から考えたら年下なのだが、肉体年齢的にはこの方のほうが上なので最上級の敬意を表するぜ。
結局俺は言ってる事が曖昧なのだよ。

「あ、ありがと……（さっきまで死んだ魚の様な目だったのに急に態度が変わった……）」

しまった、露骨過ぎたか？ くっ、テンションの上げ下げがむずいぜよ。

「貴様……私の台詞を取るなよ。さっさと下がれ」

「お前ホントにさっきからおかしいぞ？」

善吉君とめだか君が俺を無理矢理後ろに下げる。畜生終わったよ、この野郎が。

（1時間後）

それから俺は、意気消沈な状態で依頼を聞く。
なんでも陸上部に所属している有明先輩のスパイクが悪戯でスタスタにされたとかで、犯人を突き止めて欲しいとかで、何だかんだで一時間が過ぎたのだが……。

「善吉君よ。あの子ってコロンも真っ青の推理力だよな？」

「ありすぎて逆に引くぜ」

校舎の陰から陸上部の練習風景を覗きながらの俺と善吉君の会話。

「んで？ 不知火さん、どれが諫早先輩？」

横目で直ぐ横に居る不知火さんに犯人であろう諫早先輩の姿を教えて貰う、正直また先輩だってんでテンションが上がり始めてるぜ。

「あの水道の所にいるのがそうだよ。三年九組諫早先輩、有明先輩と同じ短距離専門のアスリートで利き腕は左、同じスパイク履いているのはみてのとーり」

「ほう、俺と同じ左利きか、話が合う……とは思えないな」

気難しそうな目つきだな。

「お住まいは23地区で三年前から文車新聞を購読中——だつてさー！」

「……いつも思うのだが、不知火の情報ってどこから引つ張ってくんの？」

「あひやひや！ 人吉が正義側のキャラにいたいのなら知らない方がいいね」

様は人には言え無いような事ってか？

「ちなみにあの諫早先輩、有明先輩が代表に選ばれたせいでレギュラー落ちしてまーす」

「ふゝんて事は、だ」

「ああ、決まりだな」

上級生が下級生に出し抜かれたのが面白く無い故の犯行って所かね。やはりあの子の推理は正しかったって訳だな。

「意外とあっけなかったな」

「といつても、ほとんどめだか生徒会長の推理のお陰だね……お
おっ！ 水を飲んでる姿がなんかセクシーだ！……ってオイ、二人
とも何故俺から距離を取るんだよ」

「いや、なんかお前の言い方がヤラシー感じだったから」

「アタシも」

「フン、いずれ善吉君にも分かる時が来るさ。そして不知火さん、
心配しなくとも俺は君に人間としては興味あるが、女性としては興
味が1ナノも感じ無い！！」

言ってやったぜ馬鹿野郎が。

「……それはそれで傷付くかなーなんて」

「零。お前はもうちょっとオブラートに包んで言えないのか？」

「フツ、曖昧な供述をした所で意味なんて無いからな、ハッキリと
言ってやった方がお互い良いのさ……」

「いや、そんな無駄に格好付けながら言う事じゃないぞ」

とまあ、こんな感じでグダグダとやっている、めだか君が後ろからやって来て、物的証拠も無い癖に諫早先輩に『貴様が犯人か？』とメジャーリーガーも真つ青な直球１８０キロストレートで聞き出す。

諫早先輩もいきなり核心を突かれたのか、返ってテンパリボ口を出しまくった揚句に逃げ出すが、身体能力のスペックからして違うめだか君に直ぐに追い抜かれ結局捕まるのだが、めだか君も先輩を捕まえ様とはせずに何かを語った後その場を立ち去る。

その後、その場にヘナヘナと座り込む諫早先輩の所へ行つて善吉君がめだか君について語り、いい感じで事件は解決の方向へと向かつて行くのだった。

余談だが、善吉君の格好を諫早先輩がダサイと評した時は二人してマジでガッカリしたのは言うまでも無い。

〳次の日〵

「クッソー どうしてこのカッコ良さが伝わらないのか……」

「全くだ……諫早先輩にはガッカリだよ畜生！！」

善吉君と二人して制服の中にジャージを着た格好をしながら鏡の前で唸る。

やっぱどっから見てもカッコ良いと思うんだがなあ。

「あの……人吉君と霧生君、ちよつと良いかな？」

「え？」

「あ、有明先輩！？」

いつの間にか有明先輩が後ろに居たのだが、なんか最近背後を取られる事が多いな。

「人吉君のその格好、個性的でカッコイイと思うよ？」

「な、なぬっ！！」

「あ、アリガトございます」

「ちよつ、ちよつと有明先輩俺は？　ねえ俺は！？」

「あ、ああ、うん。格好良いんじゃないかな？」

「な、何で疑問形なんすか！？　せめて俺の目を見て言っして下さいよー！」

「うんカツコイイカツコイイよ」

あからさまに目を逸らしながらの発言に、俺の心はズツタズタさ…
…グスン。

「お、落ちつけて、な？」

「善吉君は良いよなあ、先輩にカツコイイって言って貰えてさあ…
…グスッ」

鬱だよ……死にたいぜ畜生。

「あ、ああ。そう言えばどうしました？　また何か変な事でも？」

俺の事など無かった事にしやがった。

「今度はロッカーから代用していたスパイクが無くなってて……」

「は？」

「代わりに新品のスパイクとこんな手紙が入ってたんだけど、どう
いう事だと思う？」

「これは——「何々『ごめん』か……」おい零、話に割り込んで来
るなよ」

「うっせ、色男はだまってる！」

（かなり引きずってるな……コイツ）

先輩にカツコイイって言われたんだ、会話に割り込む位でガタガタ
抜かすなや。

「……有明先輩、見た限りですがこれからはあんな悪戯も無いと思
いますので、もう大丈夫ですよ？ 心配無いです」

「そ、そうかな」

「ええ……陸上、頑張ってくださいや。応援しますよ」

うんうん、良い感じで解決出来たから自然と頬が緩むのが分かるぜ。

「あ……」

「へえ？」

「なにさ？ 善吉君に有明先輩」

俺の顔見て新発見でもした様な顔してコツチを見る善吉君と有明先輩。

何だよ、照れるじゃねえか。

「あゝ 俺が言うより有明先輩お願いします」

「うん、霧生君って笑うと結構カッコイイかも」

「えっ？ マジっすか！？ いやッホーイ！！ 褒められたぜー！！」

この喜びをどう表現しようか……そうだ！

「俺は鳥になるぜえ！」

何か今なら飛べる気がするので、窓を豪快に空けて窓枠に足を乗せようとするが。

「ばっ、馬鹿！　ここ4階だぞ！？　飛び降りようとするな！」

「うつせやい！　離せ、喜びの表現じゃああああ！！！」

「アハハ……」

後ろで苦笑いしている有明先輩の事などつゆ知らず、俺は喜びの余り窓から飛び降りようとするが、善吉君に後ろから羽交い締めになされて出来なかったのだった。

続く

8：「勝つぞ……！絶対に勝つぜえ！」とか言った瞬間負け確定さ（後書き

主人公ってもしかしくなくても真黒と相容れないかもしれない。

9：「ん？ 間違っ たかな？」（前書き）

主人公の淋しい放課後の過ごし方です。

9:「ん？間違ったかな？」

スパイク事件の後始末も済み、帰ろうと校門を出る。

[illegible]

俺は走っていた。

学校にいる間は、タバコを吸わない……と勝手に決めたのだがそんな俺の一大決心を無視するかの如く俺の身体は『ニコチン！ タバコ！ 紫煙！ 早く……早く摂取しやがれやああ！』と頭の中でリピートしまくってる。

(け、煙を吸わせろおお！！！！)

何時もなら学校から少し離れた所で胸ポケットに隠してるタバコを取り出すのだが、あのガキ女……いや、めだか君がタバコを発見するや否や俺の目の前で真つ二つにしてくれたのだ。

当然俺は烈火の如くキレたのだが、学校で吸うなとか未成年をだしに正論で返してきたので何も言え無くただ黙認するしかなかった。いくら精神年齢が二十歳過ぎてても、この世界での俺はまだ16歳、本来ならパチンコにも行けない歳なので酒やタバコは以つての外なのだ。

まあ、普通にそんなルールは破ってるのだが。

(つ、着いた……)

呼吸を整えながら、我が家であるボロアパートの階段を上がる。

なんだかんだでこのアパートに住み始めて二年が経過している、そして後三年……いや二年半位で俺がこのボロアパートに永住するか死ぬかが決定するのだが、この世界に永住となった場合……あくまでも場合であって永住する気なんて更々ないのだが、もし永住決定となったらまた一から進路を考えなアカンのかと思うと異常に気が重い。

「ハッ……くだらねえ」

馬鹿馬鹿しい何を考えてるんだ俺は違うだろ零。お前は帰るんだろ？ 死んで家に帰るんだ。婆ちゃんがない世界なんて……鬣の無い雄ライオンじゃねーか………チヨイスが何かおかしい様な気がしたが気にしたら駄目だ。

「……よしっ！」

両頬をバシッと叩き気合いを注入しながら、部屋へと入る。

「帰ったぜえ……って誰もいないがね」

もう何回目になるか分からない淋しい光景。

まあ、普通に考えれば孤独な独り暮らしの部屋に『ただいま』って言って『おかえり〜』なんて返ってきたら、間違いなく空き巣が酔っ払いだけど。

「……………まずはニコチン摂取からっ」と

学校を出た時から、ずっと頭の中でリピートしていたタバコを吸う、口を含んだ煙を肺に浸透させてから吐き出す……………うゝむ、マイルド。我慢して我慢させられた後の一服の爽快感と開放感は最高だ、心が落ち着くぜ。

「さて、と所持金は……………野口の兄さんが5人に福沢の兄さんが8人……………まずは夕飯の買い出しだな」

財布の中を確認してからバイクのキーを取り、上着を着る。

ちなみに口座の方には、おおよそ人様には胸を張って言えない様なやり方で得た金がうん百万単位であり、しかも元の世界に居た時から持ってた大型二輪と車……………普通免許がこの世界に来た時も所持してたのだが、よくよく免許証を眺めてたら何故か今いるこのボロアパートの住所になっていたのは嬉しい誤算だった。要は、この世界で免許を取得出来る年齢になれば、わざわざ教習所に通わなくても車やらバイクに乗れるようになる、という訳だからだ。

んで16歳になった今。現在は原チャリと250CCまでの二輪車が青の国家権力さんを気にせず、堂々と乗れるようになった。ちなみに大型二輪と車は18……………即ちこの世界へ永住する事になった瞬間

間、解禁されるのだ。

「ガソリンは……あんまり無いな、帰りに入れとくかな」

ガソリンが高騰してる世の中の情勢に軽くイラッとしつつバイクのエンジンをいれる。

ちなみに俺が乗ってるバイクは、ローソンレプリカ仕様の“Z1000J”カウル無し、通称“ジェイソン”だ。

今の年齢では乗ってはイケナイのだが、たまたまバイクを買う時に目に入ったのがこれだったので『まあ、いいか』の精神で乗ってる。サツにも捕まった事無いしね。

「さて、とエンジン音に違和感無し……行きますか」

軽い曇り空の中、ハンドルを握りアクセルを入れ、近所の大型スーパーに向かう俺だった。

《リーチ！》

「おっ？ 赤オーラ……激熱リーチってか？」

スーパーでの買い溜めも終了しいざ家に帰りましょう……という筈だったのだが、たまたま走ってた時にたまたまイベント開催中の旗があるパチ屋が目に入ってしまったいフラフラと店に入って、何となく打ってみたのだが……。

《世紀末覇者拳○！！》

「おおい！ いきなり文字赤ラ○ウリーチかよ……これはもしかしたらもしかするぞ？」

座ってから打ち始めて、まだ二千円しか使っていないのだが、いきなりの激熱リーチに心躍る。

《ハアア》

「ああん！ ケンシ○ウ対ラ○ウリーチかい……どうせならト○対ラ○ウが良かったが……後は時の運だな」

《フォアタァー！！！！》

《又オリアァー！！！！》

ケンシ○ウとラ○ウが正面からぶつかった瞬間上のロゴが揺れる……

…ヤバイ、来たんじゃないか？ 後は……。

「頼むぜえ……しゃっ！……！」

画面の中の二人が空中戦を繰り広げた後地上に降り、振り返りながらお互い睨み合う画面……そしてボタンプッシュのマークが出たので『頼むぜ……お小遣！』と思いながらボタンを押すと……。

《お前は……この時代に必要な男！》

（お……おおっ！ 来た、来たぜ！！ プレミア縦カットイン！！）

本来なら、ケンシ〇ウが何か一言言うカットインが、プレミアであるレ〇のカットインになってる……という事は。

《フンッ！》

ラ〇ウの兜が割れ、そして。

《ラ〇ウ……！ そんな駄馬の上ではこの俺には勝てん！！》

当然ケンシ○ウ勝ち、更に……。

「フフフリーチだったから何もせずともハイパーボーナスってね」

大当り……という訳だ。やっべ、周りのおっちゃんやおばちゃんやら兄ちゃんやら姉ちゃんやらがスゲー羨ましそうに俺を見てくるぜ、ククッ此処は余裕の表情でタバコだね。

「フウ……」

この後、夕方から入店して閉店ギリギリまで打ってた訳で、総額15万の臨時収入が入ったのだった。

「すんませうん、LUCKY STRIKEのBOXを4カートンください」

「かしこまりました（あら、超イケメン……）」

「うん」

いやあ、今日は色々あつて疲れたけどあのパチ屋での臨時収入のお陰でいくらか疲れが飛んだぜ。と、擬似的な疲労回復に酔いしれながら勝った金を必要な分を財布に入れて残りは口座に預けた後、タバコの買い溜めをする。

「ありがとうございました」

「フンフン」 っと……夕飯買った材料が生物でなくて良かったわあ」

これが生物だったら、腐ってた事間違いなしだからねえ、ホントに良かった。
後は家帰って飯食って寝る、大体これが俺の放課後の過ごし方だ。

続く

9：「ん？ 間違っ たかな？」（後書き）

次回は再び本編？ に戻ります。

10:「いいか？ 何度も言っては無いけど俺は年上好きなのだ！」（前書き）

主人公は結構我が儘なのかも知れない。

ってな訳でクオリティー最低ですが宜しければどうぞ！

10:「いいか？ 何度も言っては無いけど俺は年上好きなのだ！」

どうでも良いのだが、何故あの学校はバイク通学が駄目なんだろう
か。

恐らくは学校の品格とやらを著しく下げるとかってのが理由だと思
うのだが、と何時に無くごちゃごちゃと言いつつ訳がましく言ってるの
かと言つと……。

「9時、遅刻決定か。痛つつ……しかも二日酔い」

おもつくそ寝坊&二日酔いで遅刻決定なのだ。

いや、遅刻だけならこんなごちゃごちゃと御託めいた事を考える必
要は無いのだが、つい先日辺りにめだか君に勝手な約束を交わされ
たのだが、その内容が『遅刻及び授業のサボった場合は黒神めだか
による特別補習』だというお互いにとって全く利益の無いものだ。

中坊の頃からそうなのだが、何故かあのガキ女……いや流石に可哀
相だからあの子にしとか、とにかくあの子は事あるごとに俺に突
つ掛かってくるのだ、いわく『授業は楽しいぞ』だとか『そんな物
を吸ってると早死にするぞ』等など、正直何回本気でブチのめして
やろうと思つた事が……。

（また新しい目覚まし時計を買わないとな）

目の前で『ひでぶう！』となってる目覚まし時計に黙禱を捧げなが
らポリポリと頭をかく。

多分煩いとかいう理由で無意識に目覚まし時計の営業妨害という名の破壊をしてしまったんだろう。ありがとう……君の事は忘れないよ目覚まし時計君6号、と柄にも無い事を思いながら遅めの朝食と軽いシャワーを浴びて鉛の如く重い足どりで学校へと向かうのだった。

「で？ 学校に行く途中にお前好みの女性が居たからといって、ついフラフラと着いて行った……それが遅刻の原因か？」

「そうです、一目見た瞬間雷が走ったもんで」

学校に着いて早々担任から遅刻の原因を聞かれるというある意味お約束の展開を迎えてる訳だが、まさか二日酔いで寝坊しましたとは言え無いので適当にごまかす。

目の前でコメカミをひくつかせながら自身の理性を抑えてる教師と、その流れを呆然と見ているうん十人単位の餓鬼共もといクラスメイトがタルい二人のやり取りを眺める。

「もういい……早く座れ」

「ういゝ」

暫くジト目で俺を見てた教師だったのだが、やがて折れてお咎め無しで俺を席に着かせると授業を再開したのだった。
座った時に善吉君と不知火さんが軽く苦笑いしてたのは何故だか印象的だったぜ。

席に着いて早々に睡眠学習モードへと移行した俺はいつの間にか放課後に突入、更にいつの間にか生徒会室へ召喚されてました。

「一組の担任から聞いたぞ。今日遅刻したそうだな？」

「……」

そして何故だが、正座をさせられてます。

目の前には生徒会長さんであるめだか君が居てその後ろで目安箱のチェック中の善吉君、そんな物（投書）より俺をフォローしてくれよ……。

「スマン。これにはエベレスト山より高く、マリアナ海溝より深い訳が……」

「ほう、言ってみろ」

口元に扇子を当てながら何処かの時代劇風な取り調べを受ける俺なのだが、ハッキリ言ってそんなデカイ例えにする程の理由なんて無い。

だって昨日は深酒をしてからの只の寝坊だもの。“響30年”とかいう少々値が張りそうだが、なんとも美味そうな名の酒が5本限定で売ってたのをついつい買い占めてしまつて案の定美味かつたから、ついつい夜遅くまで飲んでしまつただけだもの。

「どうした？ 言え無いのか？」

「……」

どうしよう、よくありそうな言い訳『両親が危篤だつたんです』は、両親がいないという事を知つてしまつているこの二人には通用しないし、かと言って正直に答えた所で動機が不純過ぎて普通に怒られてしまう。

最悪それが原因で『ガチ補習コース』直行だ。

それだけは何とか避けなければ……クソッ！ 何で俺がこんな馬鹿らしい言い訳を考えなければ……これが年上でしかもお姉さん氣質がバシバシの家庭教師だったら『色々と至らないと思います』が、何卒ご鞭撻の程宜しくお願いします！』と嬉し涙を流しながら言うと思うのだが、その補習教師が目の前居る、1万歩譲って同年代の餓鬼……そんなの、何が悲しくて一緒にお勉強をせなアカンのだ。

「ね、寝坊です」

結局言い訳らしい言い訳も浮かんで来なかったので、正直に言う事になった……ああ、もう嫌。

それから約2・30分程の時間を使い、めだか生徒会長様のありがたいお言葉という名のお説教を受け、説教だけで補習は無しになった。

このサプライズにはその場で小躍りする程喜んだ。

「そんなこんなで本日の投書は3件——バスケット部部室の普請要請に学食の新メニュー開発そして、子犬探し、だ」

「子犬探し？」

（むっ！ 来週の日曜日は設定Aイベントか……）

ありがたいお説教も終わり、生徒会のお仕事モードへと移行した二人の後ろでパチンコ屋のイベントを携帯でチェックする俺。
仕事よりも趣味を優先するのが俺なのだ。

「ではバスケ部は私、学食の方は零、貴様が担当しろ……零？」

（フム、新台60台導入か……こっちも捨て難いな）

新装開店は大体オールラウンドに出してくれるからな。
だが、少し遠めだな。

「おい、聞いてたのか!？」

「うおっ！ な、何!？」

耳元で呼ばれたので、一瞬心臓が止まるかと思いつつ、何事かと声のした方向へと向くとめだか君が不機嫌そうな顔をしながらコチラを見ていた。

「ええつと、何か？」

話を聞いて無かった俺からして見れば、この状況は訳が分からない。

「……貴様は学食の件を担当だ。聞いて無かったのか？」

「あ、ああ、ハイハイ分かりました。頑張ります、ハイ」

「聞いて無かった様だな……」

「みたいだな」

何やら俺の背後で二人分のため息が聞こえたのだが、うん、次から気をつけますかな。

「ところで、善吉君は何をするんだ？」

「やっぱり聞いて無かったろ？　これだよ」

「ハハ、面目ねえ。どれどれ………善吉君一生のお願いだ、この学食の仕事と交換してくれ頼む、いやお願いします！
！」

何気無く話を聞いて無かったのをカミングアウトしつつ、善吉君の

担当する投書の内容を見てもの凄く善吉君と仕事を代わって貰いたい衝動に駆られ、自分でも歴代1・2位にランクインする勢いのある土下座をかます。

「なっ！？　オイオイ、いきなりどうしたんだよ！？」

「頼むっ……！　俺は昔から犬が大好きなのだ！　頼むうう！！」

超困り顔の善吉君を無視した土下座だが実際問題、犬好きだからって代わって欲しいのでない。

投書の差出人の名前と学年を見て代わって欲しくなったのだ。三年二組、秋月。かわいらしい犬のイラストに文字……間違いなく女子、更に年上、俺のやる気ボルテージは一気に上がったという訳だ。正直学食の新メニューなんて善吉君にも出来る仕事だからな、変わって貰えればお互いハッピーだ。

「うーん」

「どうだろうか？」

何やら考え込んでいる善吉君。

それに対して俺は『考えるな！　感じるままに俺と仕事を交換しろ！』と念じまくる。

「いや、ほらめだかちゃんが俺に指定して来た仕事だし本人に許可も取らずに仕事を代えるってのは……」

横目でめだか君をチラ見しながら言う善吉君、対してめだか君は目をつむり紅茶を飲んでる。

「フツ、なら本人に聞けば良いのだ………めだかちゃん！別に代わっても良いよな？」

妙に絵になる姿で静かに紅茶を飲んでるめだか君に、確認を取る。暫くするとゆっくりとティーカップを受け皿に置き目を開ける。

「私は別に構わんのだが……」

よしっしゃあ！ 言動取ったあ！

「ほら見る聞いたか善吉君！！ 後は君が首を縦に振れば……」
「だ
が！」——アアン！？」

会話に乱入して来た主であるめだか君を見ると、目をカツと見開いて俺を見ていた。

思わず喧嘩を売られた様な返事の仕方をしてしまったのは仕方が無いだろう。

「何だよ？ 何かあんのか？」

「零よ……貴様、そこまでして代わって欲しいのなら、それなりの理由があるのだろうな？」

「は？」

「そうだぞ。お前、時たまおかしな事を言い出すからな」

善吉君とめだか君に理由を言えと迫られた。

まあ、理由位は言っても良いかな？ 別に邪な理由じゃ無い……筈だし。と思い正直に理由を述べると、段々とジト目に近い目つきになっっていく二人、そして。

「分かった。代わって貰いたい理由は良く分かったよ……」

「おおっ！ なら」

希望の光が見える未来を想像しながら『オラ、ワクワクすっぞ！』の気持ちで次の言葉を待つ。

「善吉……」

「ああ」

（ワクワク）

「早く行け、子犬捜しにな……」

「了解」

「えっ！？」

「零、貴様は学食担当だ。私がやった人選振り分けに変更は無い。早く行け！」

「あ、あれ？ さっき『代わる事は別に構わない』……って」

「私もバスケット部の仕事を開始するかな……」

「おう、じゃあまた後でな」

「ねえ、聞いてる？」

何処からか出して来た虫取り網を引つ提げながら生徒会室を出る善吉君とめだか君。

出てった事で独りになる俺。

「な……何故じゃあああああ……!!」

思わず頭を抱えて叫んでしまったのはしょうがないだろう。

滞る事無く学食の件が終わったので、報告&帰宅の為に生徒会室へと向かいながらブツブツと独り言を言う。

「クソッ！ 犬探しの方が良かった……」

腐った女みたいに未練タラタラな状態で歩く。

確かに学食の件の時に上級生が居たのだが、いかんせん全員餓鬼臭かったのだ。

ああ、でも食育委員会とか変わった名前の委員会と合同で学食新メ

ニューを考えた時に会った、米良^{めい} 狐吞^{このみ}さんとかいう人は少し違ってたかな、軽くクール入ってたばいし。
まあ、俺がサンプルとして作った飯が気に入ら無かったのか、終始ガンつけられたただだったがね。

「フウ、早く帰って酒でも飲みたいぜ……」

今日の俺は良いこと無しだし、そんな時はさっさと帰って寝るに限るな。

「で？ 犬畜生にスタボロにされた揚句に捕まえられず、のこのこ戻って来たのか？」

「……ハイ」

上から下までスタボロの善吉君に、鬼の首を取ったの如く罵言を浴びせる。

代わってくれ無かった恨みはデカイよ？

「……というわけでございまして、不知火と一緒にターゲットを発見するも捕獲には失敗。その後の逃走を許してしまいました」

めだか君に報告する善吉君の後ろ姿が寂し気に見えなくも無いが、俺は全く同情はしない。

俺に代われば犬ッコロの一匹や二匹、即座に捕獲してやったんだからな。

「そうか……まあんというかアレだな。取り敢えず貴様等の仲の良さは不愉快だな」

「ふわあゝあ」

既に興味が失せた俺はソファーになっころがりながら、二人のやり取りを右から左で聞き流す。

「要するに、行方しれずとなっていた約半年もの間に、子犬は成犬になってしまったというわけか？」

「あー……まあ、そんなトコだ。いやそれどころか、ありやあ完全に野性化しちゃってるよ」

（今日の夕飯何にしようか。たまには外で食うのも悪く無いな……）

「一応投書主にも会ってみただけど『なぬっ！』……なんだよ零？」

夕飯の事を考えてながら何となく聞いていると、善吉君の発言に超反応する。

「お前……会ったのか？ 秋月先輩に」

「ああ、そうだけど……」

「どんなだった？」

「は？」

「いやだから、どんな感じの女性^トだった？」

会ったんなら是非とも感想が聞きたい。

聞く位なら別に罪にはならんしね。

「あゝ、それがいかにもって感じのお嬢さんでな？ とてもじゃねーが犬の事は言え無かったよ」

お嬢さん……か。

「あつそ、善吉君ご苦労」

何か急に冷めるものを感じながら、再びソファーに寝転ぶ。

「何だよお前、急に態度が変わったな」

「ああ、うん。まあいいじゃん、ほら続き続き」

「あ、ああ」

報告を再開する善吉君。その後ろで急に冷めた感情になりながらソファーにダイブする。

お嬢様タイプは俺の趣味じゃ無いので、一気に興味が失せた。

「つか秋月って人は馬鹿なのか？ 犬を学校に連れてくるのかよ普通。」

このクソ広い学園で逸れたらそう簡単に見つからない事ぐらい考慮しろよ、第一何で犬の種類がウルフバウンドなんだよ。よく今まで人を襲わなかったな、犬の方がよっぽど利口じゃねーか。

「やはりこの件……私が動こう」

俺が秋月さんの事を考えていると、どうやらめだか君が動く事になったらしい。

なら俺はお役御免だよな、ってことで。

「んじゃあ、俺は帰っていいか？ 学食の件は片付いたし」

「む……まあ、良いだろう。学食長からも完了の報告を受けたからな」

「そついう事だから俺は帰るぜ」

「ウム、では明日な……遅刻するなよ？」

「わかってるって」

「一々念を押すな。遅刻しづらいだろうが。」

「じゃあな零！」

「おう、善吉君も頑張れよ」

軽く挨拶を交わし、俺は生徒室を出た。

「たらら〜りらら〜」と

少し早めに学校を出れるのか、少しご機嫌に近い気持ちで昇降口を出る。

「塩〜」塩〜」名前で良くあるのはよしお〜」

適当に考えた歌を歌いながら歩いてると、周りの餓鬼共にクスクス笑われた……が今の俺は気にしない。

「〜」ん？　ありやあ」

裏口の門から帰ろうと歩いてると、何かが俺の目の前を歩いて行った。

「……………何だありやあ？」

身体中傷だらけで『俺に構う奴は食いちぎる』と言わんばかりの雰囲気全開の、おおよそ犬には見えない単なる獣だ。

「あれが善吉君達を探してた犬か？ ハードルたっけーなオイ」

あんな出で立ちの犬ツコロなら善吉君のあの傷は納得だわ。

ん？ 目が合った、アレ？ 唸ってるぞ？ そして何故低姿勢なんだよ…… オイまさか。

『ギャオオオ！！』

「うわっ！」

いきなり俺に向かって飛び付いてきやがった。

咄嗟の事だったので、右腕を前に出したら見事に噛み付かれた。

『グルルルル！』

「イゝデデデ！ 何で俺に噛み付くんだよ、しかも犬なのに『ギャオオオ！』って……」

普通なら腕が食いちぎられる位の顎の強さなのだろうが、生憎俺の肉体は普通を通り越してるから血がドバドバ出る程度だ。

「オイオイ、犬に噛まれて死ぬ実験はもう体験済みだから、デメエに噛まれても嬉しかねえぞ？」

『ビクッ！』

声色と顔つきと気配を変えて、右腕を食いちぎらんとする犬コロを睨むと、急に犬コロの様子が変わりだし、噛み付いて離さなかった右腕から離れる。

「フンッ！」

『キャインッ！！』

すかさず、調教目的のゲンコツを食らわせると、雷に怯える犬みたいな鳴き声と共に気絶してしまった。

「ハァ」 制服に穴が空きやがったな……あの秋月ってセンパイを脅して……いや、やめとこ傷は無くなったし」

既に傷が塞がった右腕を眺めながら、脅迫材料が消えた事を残念に思いつつ、気絶した犬を踏ん付けながら学園の門を出たのだった。ちなみに、その数分後に犬のコスプレをしたためだか君とその後ろに

着いていた善吉君と不知火さんが気絶した犬ッコロを見て大騒ぎしたの
は次の日になって知った事だ。

続く

10:「いいか？ 何度も言っては無いけど俺は年上好きなのだ！」（後書き）

それではまた次回

11:「反則王って呼ばれてる位だからってつきり鉄仮面と水平二連式ショットが前半と後半に分けます。

てな訳で前半です。

ちなみにこの主人公は変に正直と言いますか……チャラ男予備軍と言いますが……とにかくどうぞ。

あと後書きに質問的な奴を載せてみました。

11:「反則王って呼ばれてる位だからってつきり鉄仮面と水平二連式ショットガ

昨日は疲れた……。

なんせ、めだか君に恨みがあるとか無いとか吐かしてたエセ不良君達を善吉君と一緒にになって叩きのめしたのだ。

と言っても手を出したのは善吉君であって俺は一切手を出してない。だって、手を出したら向こうが死んじやうし、それじゃあ『死ぬ』が行動理念の俺からしたら考えられませんかね。

なので、向こうがどつから引つ張つてきたのか知らない、釘バットやら鉄パイプやら模擬刀などの凶器^{トウゲ}で俺に襲い掛かって来たのを真っ向から受けてやったら、顔を真っ青にした揚句気絶しやがったのだ、『自称グレてます』の癖してチキンな野郎だ。

まあ、殴つて蹴つてを繰り返して作つた傷がまるで“元に戻るかの様に”修復していくのだから普通の人間の神経だったら気味が悪くてしょうがないだろうけど。

ちなみに俺の外から貰ったこの力、再臨^{リセント}の力についてだが、善吉君とめだか君と他数名はある程度知ってる。……といっても、彼等の認識は“傷の治りが異常に早い”程度だがね。

EP:11start

てな訳で昨日の事を思い出しながら、善吉君と並んで生徒会室へと向かつてる。

お互い何気ない談笑って奴だ。

「しかし昨日の出来事クーデター（笑）は間違いだったって事にし

て、本人に言わん方が良いかもね」

「そうだな、これは俺達の胸の中にしまったところ」

誰だったかのくだらないクーデター事件についての話だ。

「てか今更なんだけど君等ってさ、よく俺と一緒にいられるよな？」

「は？」

突然話の内容をすり替えたので、キョトンとした表情の善吉君。

「いや、さ。俺の身体ってさ、どんなに殴ろうが、蹴ろうが、刺そうが、斬ろうが、落とそうが、すり潰そうが、その場で出来た傷が瞬くまに修復するんだぜ？ 君等から見ても気持ちの良いもんじゃ無くね？」

むしろその逆だ、近付きたくも無いと思うのが普通の人間の考えだ、と何時に無く弱ネガティブ思考になると、善吉君は「んな事かよ」と言っただけ、続けた。

「まあ、なんだかんだでお前の場合は“アイツ”と違って他の人間の害になって無いしな。お前、中学の時は単なる素行の悪い不良中学生で通ってたし」

「ふん？」

確かにあの頃は、授業をサボる程度に留めて置いてただけで、暴力沙汰は無かったなそっぴや。

それに、善吉君の言う“アイツ”というのは、恐らく球磨川君の事だろうね。

善吉君ったら彼の事を死ぬ程毛嫌い&怖がってたし、でも今はどうなんだろうか、会えばトラウマ再発かな？

「まっ！　そういう訳だから零。　気にせずめだかちゃんを手伝ってやってくれや」

柄にも無く頭を下げる善吉君。

うん、まあ……手伝うっちゃあ手伝うけど、俺の本当の目的を知った時はどんな反応をするんだろうね。

「ああ、可能な限り手伝わせて貰うよ」

「おう！」

まあ、時期が来るまでは君等に従わせて貰うよ時期が来るまで、ね。

「!？」

およ？ 考え事をしてたら善吉君がひっくり返ってらあ。

「どうしたよ？ 善吉君…… ってああ、なるへそ」

「善吉、零。今日は柔道部に行くぞ」

下着姿のめだか君が柔道着を掲げながら言ってる。

相も変わらずの露出狂っぷりに感心するぜ。

うゝん、これが年上のお姉さんだったらと思うと悔やまれるぜ。

「鍵をかける！ カーテンを閉める！ 人目をはばかれ！！ 何遍
いったらわかるんだ！！」

疾風の如き動きで扉、窓、カーテンを閉めてめだか君に怒鳴り散らす善吉君だが、その手のタイプの人間にやあ無駄だろうぜ、と思いつながら二人の不毛な争いをボケーツと眺めるのだった。

「柔道部？」

「うむ、柔道部部長の鍋島三年生は知ってるな？ 彼女から目安箱に投書があったのだ」

「鍋島つて、チームトクタイ特待生の鍋島猫美さんか？ あの有名な柔道界の反則王と呼ばれたあの人？」

反則王？ 誰だそりゃあ。

生憎、最近まで人付き合いもへったくれも無かったのでその鍋島とかいう人の事は知らない。

唯一分かるのは女性……しかも三年生って事か。

「フム……興味あるな」

「ほう、貴様がそんな事を言うなんて珍しいな」

「まあ、人間ですから興味位は持ちますぜ？」

「まあ、何にしても行ってみようではないか。柔道部といえは懐かしい顔にも会えるだろうしな」

「あ、ああ……」

「懐かしい顔？」

「零。貴様も知ってる顔だ」

俺も知ってる？ うーん…… ますます分からない。
まあ、行ってみれば分かる事か。

「失礼します」

「おお、やっと来たか」

「……チッ」

「あからさまな舌打ちは止めろ」

つー訳で俺は柔道場……では無く職員室に居た。本来なら俺も一緒

に行こうとしたのだが、悪意のあるタイミングでの担任の呼び出しを喰らった、呼び出された内容は大体分かる為に苛々する。

「……今度からは気をつけろよ？」

「……………ハイ」

「よし、この話は終わりだ。早く行け」

「失礼しました」

予想通り、似たり寄ったりな話題での説教を喰らった。

頭の中で何百回になるか分からない程、目の前でウダウダ吐かしてる教師を様々なシチュエーションでSATSGAIしていたので8割は話を聞いて無かったがね。

その後、得に何も無く柔道場に到着。

例によって剣道場と同じ位にデカイ道場なのは言うまでもなく、こんなもん金に金をつけるのが理解出来ない、俺なら売り飛ばして直ぐ金にするね。まあ、所詮人によって価値観は違うのだから、只の道場に無駄に金を掛けまくる人からしたらそれはそれは素晴らしいのだろう。

「すんませ〜ん、遅れますい〜た……って、うわ〜お、モウレツウ」

柔道場の中はまあ〜凄かったわ。

いやだって数名以外の人間がお昼寝タイムなんですもの。

「むっ……零か。遅かったな」

「ゴメンよ、思いの他長引いたんでね」

「フン、普段から真面目に授業に出てればそんな事にはならなかったんだ。自業自得だな」

「返す言葉もございません」

「まあ、良い。後少しで鑑定も終わるからお前もあそこに居る善吉と一緒に待ってる」

「ほい」

めだか君が後ろ指を差した先に居る善吉君の元に行くと、他二人の柔道部員がいる。

「つかその内の一人って……そういう事かいな。」

「よお零、遅かったな」

「君は……」

「ほお？」

何時もの様に挨拶する善吉君にちよっぴり顔が青い様な様子の金髪ロングイケメンに、誰だか分からない人。

「ん、先公の話が嫌に長くてね……っと、久しぶりですね阿久根センプай？」

「……」

善吉君に理由を説明しつつ、金髪ロングイケメンもとい阿久根君に挨拶をするが、あからさまに警戒してますな顔で俺を見てくる。

「へえ？ めだかちゃんが俺も知ってる顔ってんだから誰かと思いきや……いやはや、まさかの阿久根センパイだったとはねえ……意外だわ」

普通に言っただけなんだが、阿久根君は気に入らなかったのか睨みが強くなっていく。

「意外？ どういう意味だ……」

「んだよ……そんな睨まなくても良いんじゃないか。俺が言いたいのは、中坊の頃の貴方から考えてたら今の状況が信じられないって意味ですよ」

まあ、それも俺が勝手に阿久根君に期待しただけなんだが。

「……」

警戒と軽い恐怖が交じった睨み方で俺を見る阿久根君。

その空気がキツイのか流石に善吉君と……誰かさん、得に善吉君がオロオロしだす。

「お、オイ二人共。落ち着けて、な？」

「俺は至って平常心だぜ？ 善吉君。 だけど向こうが敵意バンバンだからねえ？」

「……………」

ニヤケ顔の俺が気に入ら無かったのかより一層睨みを効かすが、殺気を出すならもうちょい真面目にやって欲しいもんだね、これならヤー公の睨みの方がまだ怖いしな。

「まあまあ、阿久根君に…………霧生君っていうたかな？ 何があったか知らんケド思い出話もそこまでにしときや」

「あ？」

横からいきなり話に割り込んで来たもんだから、例によってまた喧嘩腰の口調が出てしまった。
この癖早く治さないとマズイな。

「そんな睨まんといてーな……………」

「ごめんなさい。これ半分癖になっちゃって……………」

「本当だぜ、早く直せよな？」

「わゝとるわい」

「グホッ！」

後頭部に両手を組ながら軽口を叩く善吉君に軽くイラツとしたので、空いていた脇腹に軽い肘打ちをすると良い感じで入ったのか、その場で悶絶する。

「ったく、一タリアクションが大袈裟なんだよ……… っとんな事より自己紹介を、生徒会“役員補佐”の霧生零です」

悶絶する善吉君をほつといて、名も知らぬ女性に自己紹介をする。相変わらず阿久根君は睨んでくるが、これから先もう君に用は無いから何もしないんだがなあ。

「ここらご丁寧にどうも。鍋島猫美です、どーぞよろしゅう」

握手をしつつ名前を告げられた、がその名前を聞いた瞬間思わず鍋島さんの顔を見る。

「？ なにか？」

珍しい物を見る様な目をしたのが気になったのか、聞いて来る鍋島さん。つか、え？ この人が善吉君の言ってた反則王さん？

「いや、善吉君から反則王さんの話を聞いたから、どんな人なんかなあって思ってたら、まさか貴女が……」

「それはどういう意味や？」

「うーん、俺の勝手な想像ですが『俺の名前を言ってみる』とか『兄より優れた弟など存在しねえ！』や『馬鹿め勝てばいいんだ！』とかいう鉄仮面被りの人みたいな外見を想像してたもんで」

「そ、そうなんや」

反則の“王”ってんだから、そもそも男だと思ってたしね。

「それがこんな美人さんだとは……うん、来て良かったです」

「は!？」

「お、お前何言っただよ!？」

「まさか君がそんな事を言うとは……意外だ」

俺の言葉にビックリした様子の鍋島さんと善吉君。阿久根君は冷静に俺が言った事が意外だったらしい。

「つか鍋島さん普通に美人じゃん、事実を言っただけが悪いんだよ。」

「意外って阿久根センパイ……貴方は俺がホモか何かに見えただですか？」

「い、いや。そういうつもりじゃ……」

「それと善吉君。美人さんに美人と言って何が悪い？俺は美人には美人、ブスにはブスとハッキリ言っただけ？」

「あ、あのなあ……」

俺が言った事に、呆れ顔の様子で返す善吉君。
今に始まった事じゃないが、コイツ等って美人を見ても案外平気な

顔して会話するよね。

俺なら迷わずナンパに走るってのにさ。

といっても今回はナンパじゃ無くて純粹にそう思ったただけだがね。

「いやあ、こんなイケメンに言われるなんて、何か照れるわあ」

うつすらと顔を赤くしつつ照れる鍋島さん。

うゝむ、やはり美人だ。

「アハハ！ ありがとうございます。 ってそうだ、後でメルアド交換……ギャン！！」

連絡先の交換を持ち掛け様としたら横から結構な衝撃を喰らった。

衝撃の正体は名も知らない柔道部員で、どうやらめだか君がこちらに投げ付けて来たらしい。

鍋島さんと善吉君と阿久根君がそろってビックリ顔だもん。

「イッテテ……オイめだかちゃん！ 何すん………だ？」

途中で言葉が詰まったのは仕方が無い、何故だから知らないがめだか君がすんごい氷点下の目で俺を見据えてやがるのだ。

「あ、あのお？ 黒神生徒会長、一体いかがされました？」

場合にもよるが、こういった眼力の持ち主から睨まれるのは、肉体の暴力より怖い時があるのだ。だからついつい下手に出てしまうのは仕方が無い事なのだ。

「貴様……私は善吉達と談笑しながら一緒に待つてるとは言った。しかし、誰がナンパしろと言った？」

「あゝ いやだって美人さんがいたら声を掛ける事位は常識……いや申し訳ございません、だからその柔道部員さんをコチラに投げ付けるのは勘弁して頂けないでしょうか？」

いつの間にか発射体制に入ってた柔道部員さんを見て、瞬時に謝罪をする。

こんなアホみたいな事で死ぬのはどーせ無理だし、だったらせめて投げ付けるのは男子部員じゃ無くて女子部員……あつ、また男子部員が飛んで……。

「あべしっ!」

上手い具合にお互いの頭がヒットして、余りの痛さにその場で悶絶する。

「ひ、人は余程の事が無い限り、真っ直ぐ飛ばない筈なのに」

「フン」

俺の疑問も『そんなもん知らん』という顔をされてバツサリと切り捨てられた。

「零、今のはお前が悪いと思うぞ？ あの手道部員には悪いが」

「オレもこの虫の言う事に同意する、君が悪い。……しかし、相変わらずめだかさんは勇ましい！」

「あ、アハハハ」

どうやら善吉君と阿久根君は俺の味方では無いようだ……覚えてやがれ。そして鍋島さんは苦笑いした顔も美人だった。

「さて、鍋島三年。阿久根二年以外鑑定は終わった、後は先程も言った通り善吉と阿久根二年の試合で最後だ」

「し、試合？」

「ああ、そういえば貴様には言って無かったな。阿久根二年は善吉と試合をする形で鑑定するのだ」

「あ、ああそうでつか……」

「つかこの状況を誰も心配してくれないのですか……おじさん悲しいよ？」

「霧生君……大丈夫かいな？」

「思ったら鍋島さんが普通に心配してくれた。
何だろう、目から汁が出て来た。」

「グスッ……貴女だけです、俺に優しい言葉を掛けてくれるのは、
やべえ惚れそうになりました」

「……ま、まあ、黒神ちゃんが怒るのも分かる気がするわ、ナンパはアカンでナンパは」

「いや、別にナンパなつもりは無いのですが……一応以後気をつけます」

「そもそも美人な女の人に話掛けただけでナンパ扱いしやがるめだか
君の認識が異常なだけであって、普通の人間からしたらあんなのは
挨拶みたいなもんだ。」

それと何故か『惚れそう』の件をスルーする鍋島さんがチヨイと気になるが、取り敢えず頭の隅の方に置いて、善吉君と阿久根君の試合を見学するのだった。

続く

11:「反則王って呼ばれてる位だからてつきり鉄仮面と水平二連式ショットが恋愛描写って入れる方が良いのか？ それとも入れないべき？

このお粗末話を読んで頂いている皆様はどう思いますかね？

12:「おいデメエ！　そのうるせえ笛吹くの止めないと鼻に一発痛い食らわ
後半ですが、タイトルに意味も何ありません。

つかもはや原作沿いでは無くて単なる主人公の長考タイムになっ
ていて、その上主人公のチャラ男予備軍全開モードの回だったり…
…。

まあ、読んで後悔しないという鋼の精神力を持つ方はお読み下さい。

それと、いつの間にか評価が340位になってました。
いやホントに恐縮です。これをバネにしたいと思います。

それと、感想をくれたアキスマンさん超ありがとうございます。

12：「おいデメエ！　そのうるせえ笛吹くの止めないと鼻に一発痛い食らわ

ちゅう訳で、俺は善吉君と阿久根君の試合とやらを見学をしている訳ですがハッキリ言おう……………退屈だ。

めだか君と鍋島さんは善吉君と阿久根にお熱（試合の様子を見ている意味で）で他の柔道部員も同様だ。

その中で欠伸するのを我慢しながらボケーツと見ている俺は完全にアウエー感全開って訳だ。

あつ…………阿久根君の巴投げが綺麗に決まってるあ。

「退屈そうだな零」

「んあ？」

阿久根君の一本背負いが決まり、投げられて早四回目の善吉君を身体にフワフワした感覚を覚えつつ見ていたら、不意にめだか君から話し掛けられる。

「まあ、柔道のルールを知らないの何がアレなのかがサッパリとわからなくてね…………」

「フム、なら私が実践を交えながら教えてやるつか？」

「結構だ。只単に自分を痛めつける趣味は無いんでね」

「そうか……」

めだか君の提案を断ると、そのまま視線を戻す。先に言って置くが、俺は死ぬのが目的であって、自身を痛めつけるマゾピストの気は無いと胸を張って断言する。

第一あの程度では死ねない、ただかスポーツの柔道なんかに興味は無い。

いや、柔道をこよなく愛する人達に失礼だから『なんか』呼ばわり事は訂正しよう。

話が変わるが、さっきから何か隣に居るめだか君と鍋島さんが天才かどうかとかがこちゃこちゃと言ってる気がする。

盗み聞きするつもりは無かったのだが、どうやら鍋島さんは天才がお嫌いらしく、対してめだか君は「天才等いない」と言い張ってる。俺は思う……めだか君よ自分の姿を鏡で見たまえねって。

正直、努力だけではどうにもならん事が世の中にはごまんとあるし、この目の前で何やら語ってるがきんちょは人間の持つ得意分野を集約した様な存在だからな。

これは俺の勝手な目測なんだが、めだか君近い将来、限り無く“俺に近い存在”になりえるかもしれない。

と言うのも“人から聞いたり見たりした事を自分なりに吸収し更に上げる”は俺の中にある力と似ている節があるのだ。

さしずめ、俺が無^{ブラックホール}限吸収だとするなら彼女は完^{コンプリート}全ってところか。

まあ、俺の力の様に“特技を吸収された人間が永久にその特技を発揮出来なくなる”とまではいかないと思うがな。

「お…………ぜ…………ろ…………？」

まあ、めだか君がいい感じで成長してくれた時は俺の力を覚えさせて、その後に俺の中から力を奪い取ってくれればハッピーエンドなんですかねえ？ 上手く行けば良いのだが……。

「おい零！？」

「はっ？」

考え込んでいた俺を揺さぶる様にして現実に戻してくれためだか君が目の前にどアップで見えた。

「ええつと…………何か？」

「何か？ じゃ無いだろう。阿久根二年生と善吉の試合は終わった帰るぞと、さっきから言ってたのに貴様…………聞いて無かったのか？」

「あ、ああ。悪い、考え事をしていて聞いて無かった」

深く考え事すると周りが見え無くなるってのはどうやら本当の様だな。聞くところによると、善吉君が最後にナント力刈りだったかで阿久根君から一本取り善吉君の勝利らしいってな話を半ば右から

左へと受け流しながら聞いた。

まあ、これで視察が終了したって事なので……。

「てな訳で鍋島先輩……早速メルアドの交換を……っ！」

「あれ本気やったんや？」

「なぐにを言ってるんですか、俺は冗談で連絡先の交換を持ち出す程暇な人間じゃないツスよ」

そんなこんなで、人から聞いた連絡先の数はもう二百件近くになる。まあどれもこれも連絡先の交換止まりな訳ですが……。

「ナハハハ！ 全く、霧生君にはある意味じゃ敵わへんなあ。ええやろう、今から着替えて来るからちよつと待っててな」

「マジっすか！？ イヤッホーイ！ いつまでも待ってます!!」

俺は正に今“飛び上がる程喜んでいる”を素でやってる、周りの奴らの生暖かい視線なんてこの喜びに比べればミジンコみたいなもんだ。

「あ、阿久根先輩……俺達って」

「言っな……俺だっと思ってたんだから」

「……」

後ろにいる善吉君と阿久根君からブルーな空気を、そしてめだか君からは何とも言えない視線を浴びせられてる気がするがもはや知らんの領域に入った俺には効かないわ！

続く

おまけ

零

「送信つと……来ました？」

鍋島

「うんうん、来たでえ」

零

「暇な時は何時でもメールなり電話下さい。超喜んで受けますので」

鍋島

「そこまで言って貰えると普通にうれしいわあ」

零

「フフン、俺は年上の女性（と言っても肉体年齢的ですが……）には一定以上の敬意を払ってるつもりですから………っとそれは置いて、これからお帰りですか？」

鍋島

「そつやけど……何かあるん？」

零

「んゝ もし良かったらこれから一緒に飯食いがてらの下校でもと………どうです？ 門限とかあります？」

鍋島

「んゝん、ないよ。なんや？ いきなりデートのお誘いかいな」

零

「そつ取ってくれて構い……いやそつです」

鍋島

「おおぅ、君って結構ドキリとする事を平気で口走るタイプやねえ」

零

「『女性を誘う時はまごついて喋らずハッキリ言え』……そう教えられましたからねえ」

鍋島

「そうなんや。まあウチは構わないんやけど……」

零

「？ 何か？」

鍋島

「いや、後ろ後ろ」

零

「は？ 後ろ？」

一体何が……と思いながら後ろを振り向くと。

めだか

「……」

妙に変な空気を醸し出しながら零を見据えるめだかがいたりした。がこの男、自身の好みから外れてる女子には一定以下の興味しか持

たないので……。

零

「何だどうしたよ？ 早く帰れば？」

寧ろ邪魔だとあからさまに態度を表に出しながら言う零。
そして更にその後ろで、三人のやり取りを半ば忘れられてる節がありながらもオロオロしながら見ている善吉と阿久根の二人。

零

「あ？ 何だよ、さっきからずっと黙ってて……鍋島先輩分かります？」

鍋島

「さ、さあ？」

零

「まあ、この子が分からなくなるなんて何時もの話だから……つとくだらねえ話は置いて行きます……「オイ」——はあ、何だよ？」

軽くうんざりした口調でめだかの方へと振り返る。

めだか

「悪いが貴様にはこれから私の書類整理の仕事の手伝いをして貰うからな……今日は遅くまで学校に残って貰うぞ？」

零

「はあっ！？ 嫌だよ、何で俺がやるんだよ。善吉君にでも手伝わせりゃいいじゃんよ」

めだか

「今日の善吉は阿久根二年生との試合のダメージがあつて無理だ。それに比べて貴様はダメージ処か今日に至っては仕事すらして無いからな、調度良いだろ？」

零

「ぐっ……。確かにそうだが、だが何も今からじゃ無くたって……」

めだか

「もう決定事項だ。ほら、行くぞ！！」

零

「グエツ！ 制服の襟を引っ張るな！ 嫌だ！ 俺はこれから楽しい楽しい下校TIMEなんだよ！！」

めだか

「決定事項だから仕方が無い。それに、そんなに鍋島三年生と下校したいのなら、代わりにこの私が一緒に下校してやらん事も無いぞ？」

零

「ふ、ふざけんなっ！ 何が悲しくてテメエみたいなガキ女タレと一緒に帰らなアカンのじゃい！ それにお前は歩きじゃねえだろうが！」

めだか

「知らんな、そんな事は」

零

「ぜ、善吉君、阿久根先輩、鍋島先輩！！ 誰でも良いからこの暴ラント君を止めてくれ……って何で一斉に目を逸らすんだあああ！？」

一同

「（ご愁傷様です）」

ちなみに、零の学校滞在時間が過去最大を記録したのはいうまでも無い。

終了

12:「おいデメエ！ そのうるせえ笛吹くの止めないと鼻に一発痛い食らわ
フラグでは無い…… 筈だ！！

13：「『芸術は爆発だ！』って言うが、実際に国宝級の芸術品が爆発した

一時間で書き上げた為に結構おどろきは感否めないとは思いますが、悪しからず。

ちなみに最後のオマケについては“主人公がこの世界についてある程度心を許した”という描写みたいなもんなので、内容については「そんな事がありましたとさ」程度に捉えてください。

それでは鋼の心を持つ方はどうぞ。

なんかかんやで、その後阿久根君が生徒会“書記”として入る事になった。

めだか君が決めた事なので別に俺としてはさして問題は無いのだが、どうも阿久根君と俺の仲はぎこちないと言いますか、ギスギスしてると言いますか……って感じだったのを見兼ねたためだか君が俺と阿久根だけに生徒会の仕事をやらせた。

内容は手紙の代筆とかで、依頼人は三年の先輩しかも女性だったのに俺は珍しくやる気に満ちていたのだが、書かされる内容を知れば知る程にやる気が削げていった。

というのも、八代先輩いわく書いて欲しい手紙の内容がラブレター的なアレだったのだ。

俺としては何が悲しくて余所様のカップル成立の為に働かなけりやならんと思うのと、その告られる野郎に殺意が芽生えていたのだ。

その際、ブツブツと『呪詛してやる』や『両手両足をブツた切つて……その後』といったの間にか口に出していたのがマズかったのか、

二人には“危ない奴”のレッテルを貼られた。

その視線に腹が立った俺は八代先輩に向かって『テメエが告るんだからテメエの手で書いて渡せば良いだろうが。アン？ それとも何か？ 俺達に書かせりゃあ告りが上手くいくとも思ってたんのかい？ だったらパソコンで打った文章でも印刷してそれを渡せば良いんじゃないの？』と仮にも先輩相手にタメ口&因縁口調で凄んだところ、それが良い方向へと向かってしまったらしく一緒に居た阿久根君は何か目覚めたらしく、八代先輩に半無理矢理な感じで直筆で書かせたのだ。

八代先輩も何かに気が付いたらしく、ものスゲエやる気と根性でラブレターを書き上げて告白したのだが、結果は知りません。んでその結果……。

「ありがとう」

とまあ、にこやかゝな顔でめだか君に阿久根君とついでに俺がお礼を言われた。

何ででしょう、先日（残業の件）のせいか全くと言っていいほどに喜べ無いぜ、と目を回す程喜んでる阿久根君の横で思う俺だったりする。

これがここ数日に起きた面白い内容のダイジェスト。

E P 1 4 s t a r t

「…………ふわあゝあ」

誰もいない日当たりの良い生徒会室にて俺は昼寝をしていた、じゃなくてしようとしていた。

ソファーになっところがりながら思う事が一つ…………俺って何気に学校生活をきちんとしてね？ と。

授業はまあ…………アレにしても、こっやって何かに入ってた働き同然の仕事らしき事をするなんて、以前の俺だったらまず有り得ないのだから。

「ん？ 霧生君か……君は相変わらず怠け者だね」

長考タイムに差し掛かったところで阿久根君が入ってくる。

ちなみに阿久根君とは、ラブレターの件があった後、少しだけ仲の悪さが軟化した……と言っても阿久根君が一方的に毛嫌いしてたのであって、俺は別に阿久根君の事はどうも思っちゃいない。

そう……どうも思っちゃいない（……………）のだ。

「チーッス！ 阿久根先輩。めだかちゃんも来て無いからこうしてねっころがつてるだけですからねえ」

俺の言葉にピクピクとコメカミが痙攣する阿久根君。

なんか知らないけど、俺が『めだかちゃん』と言うと音で反応する玩具みたいに反応するのだ。

多分だが、俺がめだか君の事を名前と呼んでるのが気に食わないんだろうが。

「……………」

「……………」

これ以上話す事は無いのでお互い沈黙する。

「おゝっす……って何だ先に阿久根先輩と零がいたのか」

おっ、良いタイミングで善吉君の登場か、ナイスだね善吉君。

「よう！ 善吉君。授業は楽しかったか？」

「楽しくは無かったが……お前出るよなあ」

「やはりサボってたのか。全く、めだかさんが君を生徒会に勧誘した意図が全く分からないよ」

「ハハハ、手厳しいぜ阿久根先輩」

こうして男三人になると自然と会話が成立するのだから凄く、流石は善吉君だね。

「絵のモデル？」

そう誰かが言った瞬間に仕事が始まった。

つーのも、依頼人の美術部員の誰かさん（名前を覚える気無し）が言うにはコンクールに出展する絵を書いているのだが、自分の満足いく絵が書けなくなりスランプに陥ったのだ。

そこで絵のモデルとやらをめだか君に依頼した……って流れな訳で。

「さあ、夕原同級生……存分に書くがいい……！」

美術室にての絵かきが始まりましたとさ。

「エッ………クセレント！！ 素晴らしいめだかさん！
貴女は女神だ……！」

「おいおい阿久根書記、女神は言い過ぎであろつ。せめて妖精と言ったところではないか？」

「……」

水着姿でボディアビルのポーズングするめだか君の横で呆れ返った顔をする善吉君。

うん君の気持ちはわかるよ、かくゆう俺も「あゝあまたやってるよ」って気持ちだもん。

「まったく、なんで女神がボディビルのポージングをするんだよ」

「さあ？ 持ち上げられて気分が良いとか？」

めだか君はどうやら、持ち上げられると馬鹿みたいにはしゃぐ習性があるみたいだ。

「いや人吉君、阿久根さんの言う通りだよ」

「何が？」

「今回の僕のテーマは『女神の浜辺』！ つまり女神でなければ描く意味が無い！」

「あつそ、そりゃあ何よりだな……」

なにやら力説している夕原君とやら。
てか女神で……。

「……ぷっ」

「？ 何笑ってんだ零」

「い、いや別に……」

女神で、いや確かにめだか君は人間としての造りは良いかも知れないけど、女神はちょっと違うと思うのは俺だけか？

まあ、そんな事は鼻から下のパーツが無くなっても言えないけど。

「駄目だア！ 描けない……僕には黒神さんが描けない！！」

俺がここに居る意味無くな？ と思い始めた頃に、いきなり絵を床に叩き付けながら芸術家特有の苦悩とやらの苛まれてるご様子の夕原君。

絵の様子を見てないので少し気になる俺は、床に放置された絵を善吉君と一緒に見る。

「ああ？ 何言ってるんだ、いい絵じゃん」

絵を見ると、ポーズをしているめだか君がしっかりと描かれていた。

「うんうん、これでいいじゃん。いやこれがいい、てな訳で君の依頼は完了……」

「いや、人吉君に霧生君。僕には夕原君の言ってる事がよくわかる」

「……チッ」

クソ、上手く言いくるめてさっさと帰れると思ったのに……余計な事を。

「この絵はめだかさんの『美』を表現しきれて無い！ モチーフ以上のものを描かなければ絵画とは言えんだ！！」

知るかよ、君の目にはめだか君が何に見えてんだってんだよ。

「……その通りです。モチーフ通り描きたいのなら写真でも取ればいいんだ。僕達、アーティスト芸術家は常に現実以上を行かなければならない」

こりゃあ、言いくるめる必要も無かったな。

だって言った所で無駄だな面倒なタイプの人種だからねと考えてる中、夕原君は続ける。

「つまり、完成した『美』であるところの黒神さんには………芸術性がない！！！！」

めだか君を指差しながらバツサリと言い切る夕原君。
思い切り腹を抓り、爆笑しそうになったのを押さえ込んだ自分に表
彰を送りたいもんだ。

「……フツ」

壁に手をつき『猿の反省』の如くポーズでブルーになってるめだか
君。

「おーいおい。君が余計な一言を言ってくれたお陰で我等が生徒会
長様が面倒な事になりましたよ?」

「フツ、アーティスト芸術家とは勝手なものなんだよ霧生君。否！ 勝手になけ
ればならないのだ!!」

「あつそ」

ああ、やっべ。多分何時もの俺だったら、この目の前に居る餓鬼を
半殺しにした後に素っ裸にして屋上に逆さ吊りにしてるな。
だが、これは単なる餓鬼の我が儘だと思ってるから怒りは湧いて来
ないのでこの餓鬼……いや夕原君は運が良いな。

「どーします阿久根先輩？」

「どーするもなにも、めださんがあんな感じじゃ……オレ達が代わりのモデルを探してくるしか無いだろう」

「スイマセーン。俺もう帰っていいですかね？ 何かさっきから俺の存在意味が無い気が……」

さっきから処か、美術室に入った頃から思ってたんだが。

「いや、お前はオレ達が代わりを探す間にめだかちゃんをなんとかしてくれ」

「本来ならオレがやりたいのだが、この際だから君に譲ってあげよう」

「ちょっと待て、それは単に俺に面倒な仕事を押し付け……」
「じゃっ！ そーゆー事で！」
「聞けよっ！」

何時もの二人なら考えられない程の息のあつた動きで美術室から逃げた。取り残された俺は後ろをチラリと見る。

「ブツブツブツブツ……」

「舞い降りてくれえ！　僕が描くに相応しい女神よ！！」

「……」

正直こんな空間に1秒たりとも居たく無いのだが、仕方ないので俺はめだか君のブルーモードを取り除くのに心血を注ぐのだった。

「あー……なんだ。ほら元気だせよ、なっ？」

「モデルすら満足にこなせないなんて……私は駄目な会長だ」

うわあ、面倒臭えええ！！！！

「いやまあ、今回は夕原君のイメージと君が合致しなかったただけだし、気にすんなよ」

「……」

こりゃ相当重傷だな……うゝむ、どうしたものか。
あつ、そつだ。

「夕原君。余ってる画材道具ってある？」

「え？ 準備室に行けばあるけど……」

「よし、ちょっと貸してくれ」

「？ いいけど」

数分が経ち夕原君が画材道具一式を持って来てくれた。
さて、上手く行くか……。

「……」

「……！？ 霧生君、君は……っ！」

「あゝ？ 昔知り合いに絵描きの基礎を教えて貰ってね……と言っても君等プロに比べたら月と鼈並だがね」

（霧生君の手の動きが見えない！ それでいて描かれてる絵はしっかりと絵になってる……これで素人だと？）

しょうがないから、そこでブルーになってるめだか君を描いてるんだが、はたして上手く描けるかどうか……。つか、後ろで俺が描いてる絵を凝視してる夕原君がちょっぴり怖いんだけど。

――約2分後――

「まあ、素人が描きゃあこんなもんかな？　夕原君どう思う？」

「……僕から見ても凄いと思うよ。僅か2分足らずでこれだけ描けるなんて」

「まあ、全部鉛筆描きだが……ホラめだかちゃん？」

「……………何だ？」

「「うつ！」」

めだか君の背後から膺気楼みてえな何かの幻覚が見えたので二人揃って思わず半步程下がってしまった。

「い、いやほら。これ見てみん？」

「これは……私か？」

虚ろな目を通り越した目で俺の描いた絵を見る。

「俺が今、そこで落ち込んでためだかちゃんを描いてみたんだけどさ、どう思う？」

「……絵は上手いが、モデルが酷いな」

「あ、ありがとう。でも今の君はこの絵みたいなもんさ。落ち込むだなんて人間誰しもある事だからとやかく言うつもりは無い、だけだめだかちゃん？ 俺はどちらかと言えば凛々しい顔ツラをしながら『生徒会を執行する！』って言うめだかちゃんが好きだぜ？」

「はあっ！？」

「——！？」

おっ、どうやらめだか君のブルーモードが徐々に解除されつつあるな？ 後一押しして所か。

てか夕原君は何をそんなに驚いとるんだ。

「つー訳だから、さ。俺は今“元氣な姿のめだかちゃんを描きたい病”に罹ってるみてえだからさ、書かせてくんねーかなあ」

これでどうだ？

「……………フツ、仕方ないな。そんなに描きたいのなら……………存分に描くがいい……！」

閉じた扇子で俺を差しながら、何時ものポーズを取るめだか君に『
ミッション・コンプリート
任務完了』』と思いつつも、慣れない事はするもんじゃねーかと苦笑いしつつ、めだか君を自分の技量限界を掛けて描き上げるのだった。

「まさか、お前がめだかちゃんをここまで元氣付けるとは……………何をしたんだ？」

「ああ、色々な」

「てかさつきからめだかちゃんがずっと見ているあの絵は誰が描いたんだ？　夕原のやつでは無いし」

「ありゃあ、俺が描いたんだよ」

「ふうん零が……って、お前が描いたのか！？　この壁に手をついてるめだかちゃんの絵も！？」

「そうだけど……なにか？」

「いやだって、この絵……普通に上手いぞ！？」

「あゝ　そうなんだ。付け焼き刃程度の技術で描いてみたんだが」

（零の意外な特技を発見してしまった……！！）

なんか、変な事を考えてる善吉君の事はこの際スルーするとして、だ。

「何で諫早先輩がいんの？」

後ろで壁に掛けてある誰かの作品を見ている諫早さんの事が気になる、善吉君に聞く。

「あ、ああ。モデルだよ、絵のモデルをあの人に頼んだんだよ」

「ナイス善吉君」

善吉君が連れて来るってんだからどんな奴を連れて来るんだろうと思っただけ……。

「ふむ、どうやら人吉君。考える事は一緒のようだな」

善吉君の偉業を内心褒めていると、いつの間にか阿久根君が鍋島さんを連れてやって来た。

「阿久根先輩……」

取り敢えずお礼を言おうとするが。

「同じイ！？ ハア！？ オレの諫早先輩ナメないでくださいよ！
この人脱いだらスゴいんですよ！？」

「何をほざくか虫が！ オレの猫美さんは脱がなくともスゴいぞ！」

あつ？ この二人今何つつた？ 脱いだらスゴい？ って事は。

「オイコラア！！」

「はっ？」

いきなりデカイ声で俺も参戦したもんだから、ビックリした様子の善吉君と阿久根君。
だが今はそんな事はどうでも良い。

「見たのか？」

「は？」

「霧生君、君は一体何を言ってるんだ」

「だあかあらあ！！ この二人の裸を見たのかってんだよあ！！！！」

後ろで呆然としてた鍋島さんと諫早さんを指差しながら聞く。
答えようによつては死刑執行だ。

「は？」

「へ？」

「『は？』とか『へ？』じゃねえよこの野郎！！　なんて羨ましいんだ馬鹿野郎おお！！」

自分の欲望が前面に押し出されてる気がするが、気にしない。
それくらい重要なものだからな。

「いやいや、見せてないから！？」

「ウチもやで！？」

諫早さんと鍋島さんの二人の言葉を聞くまで、延々と阿久根君と善吉君の二人に尋問紛いの行動を取り続けたのだった。

（10分後）

「最後に聞くが、ほんつと~~~~に！ 見てないんだよな？
阿久根先輩に善吉君」

「はい、お二人の裸体を見るなんて恐れ多い行為等、一切いたしておりません」

目の前で正座させた二人は、心の底からやってませんと土下座までしている。

……まあ、そんな事は初めから分かった事だから良いんだがね。

「フム、ならよい……釈放!!」

二人を正座から解除させ、そして……。

「いや〜どうもお見苦しい所を見せて申し訳ございません……諫早先輩に猫美先輩」

「う、うん。それは別に良いんだけど」

「アッハハハ！ 相変わらず面白いね、零君は」

「いやいや、俺は結構本気でしたぜ？　もしお二方の裸を見たとか吐かしてたら、そのまま処刑してましたからね」

「ゾクッ！」

俺の言った事に反応して顔を真っ青にしてる阿久根君と善吉君、まあしょうがないよな。君等がんな事を口走るのが悪いんだから。

「なんや知らんけど、地味に嬉しいわあ。零君にそんな風に思われるなんて」

「そうすか？　ハハハ、あざーす」

ザキ○マ風に挨拶を交わす、ちなみにお互いが下の名前呼びな理由は、俺がその旨の提案したら猫美さんが乗ってくれたのだ。とまあ軽い過去話はこれまでにして、いよいよ諫早さんと猫美さんがモデルとなる夕原君の絵描きが始まる。

「ってな訳で、アスリートとファイターの夢の共演やー！」

先輩方二人の思い思いの衣装でモデルとなる。その姿に俺の心は『我が生涯一片の悔い無し！！』ばりの満足感で

満ち足りてたのだが。

「次の方……お願いします」

バツサリと夕原君は切り捨てた。

そして多少なりとも回復したためだか君の横で『猿の反省』のポーズが二人増える。

「っ……」

「次々と犠牲者が……」

「芸術は人を脅す為の道具では無いというのが僕の持論です。正直、あの二人は怖いです」

「……そこまでの信念でやってるから何も言わんが、普段の俺なら間違いなく君をミンチにしてたろうな」

うん、てかこの瞬間にも消し炭にしてあげたい位さ。

「ハア、仕方ないな。善吉君と阿久根先輩の二人はまた代わりを探して来てくださいな。俺は先輩二人の心のライフポイントをなんと

か回復させますから」

「す、すまねえな」

「あ、ああ。頼む」

今度は二人か……何とかなるかしら？

〈更に数分後〉

「ふう〜 取り敢えず二人の峠は越させたんだが……モデルがいないだつて？」

「ああ、断られた」

「オレもだ」

「チツ……参ったな」

どうやら誰だかは知らないが、モデルを頼みに言ったら普通に断られたんだとさ。

「……仕方ねえ。こうなりゃあ最終兵器を呼び出すかな」

「「最終兵器？」」

「ああ、俺としては対価がデカ過ぎて呼びたくは無かったが……」

とブツクサ言いながらも携帯を取り出し、先日（10日前）に無理矢理メモリーに登録させられた相手を電話で呼び出す。
出るかな………あつ出た。

「もし？ ああ、俺俺。今から美術室来れる？ ハイハイわかってるよ。今日の放課後に君が好きなのを好きなだけ食わしてやつから……うん、うんサンキューてな訳でヨロ」

用件を言い携帯を切る。電話の相手はもの凄い張り切った口調で『1分以内に来る』と言ったが。

「おい零。今の電話の相手って」

「あ？ そつ、」察しの通りよ」

「？ 誰だ？」

「まあ、奴いわく1分以内に来る——」「やつほー 霧生君。呼ばれて飛び出てパンパカパ〜ンだよー!!」……………な？」

「成る程ね、不知火か…………でもなあ？」

「うん、難しいと思うが…………」

「これで無理ならもう知らんな…………ってな訳で夕原君、どうよ？ 夕原君？」

何だ？ さつきから夕原君が「こっ こっ こっ」とか言ってるが、鶏の真似か？

「これだあああ!!」

火山噴火の如く夕原君が叫びまくる。

「イツツ・シヨータ〜イム!!」

あれよあれよと、不知火さんを着替えさせ、物凄い気迫で絵を描き始める。

不知火さんったらキョトンとしとるぞ。

「そのあどけない横顔！ 寸胴のようなボディ！ 未成熟な四肢！
！ これまでのモデルとは比べ物にならない！ これが芸術だああ
あああ！！！！」

「はうっ！！」

多分無自覚であろう夕原君の言葉に再びダメージを喰らう不合格の烙印を押されたモデル三人。

ああ、せっかく元気付けてあげたのに……。

そんな訳で無事描き上げた夕原君……俺の財布の中身を犠牲にして。

続く

おまけ

程無くしてコンクール課題の依頼を完了した俺達は。

不知火

「うーん、良く分からないけど、霧生君が夕飯をご馳走してくれる

んだよね？」

零

「うん、実際君のお陰で依頼が終わったからね。好きなだけ良いぞ？」

不知火

「やったー！！　じゃあ早速行こー！」

零

「ちょい待て。その前にやる事がある……善吉君、阿久根先輩に諫
早先輩とめだかちゃんと猫美さん！」

零がその場に滞在している人間全てに声を掛けると皆、零の方へと
向く。

零

「つー訳で……俺はこれから不知火さんと夕飯を食いに行くんです
が………良かったら皆も来ます？」

零以外

《へっ？》

零

「いやほら、皆さんには……得にモデルを頼んだ人達には色々と迷惑掛けちゃったし、お疲れ様でした」を込めた意味でどっかのファミレスで食わねえかなあ……と」

一応、今回の依頼を通して何か思う所がある様子の零。
誘われた全員の反応は……。

――善吉の場合――

善吉

「いいのか？ 不知火だけでもかなりキツイぞ？」

零

「ああ、今財布には十万位はあるからな、なんとかなんだろ」

善吉

「そうか……なら俺もご同行しようかな」

零

「そうか……サンクス！」

―阿久根の場合―

阿久根

「オレなんか誘って、大丈夫なのか？　俺は君を……」

零

「フツ、その謝罪を込めての意味での……と言ったら？」

阿久根

「……いいだろう、オレも是非行かせて貰うよ」

零

「ありがとうございます！」

―諫早の場合―

諫早

「てか私って、君と余り接点無いよね？」

零

「ハハッ！　そんな事気にしてたんですか？　俺としてはこれから仲良くなれば良いかなあ……って思っているが」

諫早

「そう……なら私もお願いしちゃおうかな？」

零

「ありがとうございます！..」

―めだか&不知火の場合―

めだか

「フム、私は……」

零

「ああ、別に無理しなくてもいいぞ？ 強制参加じゃねーし」

めだか

「そうでは無い……只、な」

不知火

「……」

零

「あゝそう言えば君等って……ふむ、なら今日だけはそんなしから
みを忘れてってのは無理？」

めだか

「……」

不知火

「アタシは別にかまわないよー 霧生君がいるしい？」

零

「……？ まあ、良くは分からないが、めだかちゃんはどうすんの？ やっぱ無理？」

めだか

「いいだろう、不知火とは一度話てみたかったからな……」

零

「そ、そうか、ありがとう。不知火さんもいいかな？」

不知火

「あひゃひゃひゃ！！ アタシは霧生君に奢って貰えれば構わないって言ったでしょ？」

零

「うん、二人共ありがとな」

不知火

「うつ！ そんな畏まらなくてもいいじゃん。気持ち悪いよ」

めだか

「ああ、それは不知火に同意出来るな」

零

「ハハッ！ 手厳しいぜ」

―鍋島の場合―

零

「てな訳で最後に猫美さんになりましたが、どうします？てか俺としてはこれが本命だったり？」

鍋島

「零君は、相変わらずドキリとする事を平気で言っなあ？ まあ、ええよ。部活は引退したし、これから何があるって訳ちゃうし」

零

「っしゃあ！ ありがとうございます！ イヤッホーイ！！」

鍋島

「アハハ、子供みたいにはしゃいじゃって」

そんなこんなで、全員誘う事に成功した零。
自身の財布の8割のお札が消える事になっても、不思議と心は満ちてた。

不知火

「ほら霧生君。早くー!」

零

「痛たたた!! そんなに腕を引っ張らないでくれよ!!」

鍋島

「あの二人、仲がいいなあ?」

善吉

「というより……」

阿久根

「うん……」

零・不知火以外

《兄妹？》

終

13：「『芸術は爆発だ！』って言うが、実際に国宝級の芸術品が爆発した

前書きにもありましたが、主人公はほんの少しだけこの物語の世界に心を許してしまってます……ある意味では危険な状態かも？

14:「実写版の利根川さんが『fuck you! ぶち殺すぞ!!!めろー!ー

ちよいとカイジネタがあつたり無かつたり。

14:「実写版の利根川さんが『fuck you! ぶち殺すぞ!!!めろ!-」

「結構いるなあ……」

「ああ、中々にシユールだな」

俺は初めての体験をしていた。

そう、日曜日の朝っぱらから学校に登校したのだ。その理由ってのは余り深くは無いのだがご説明させて頂こう。

今から約6日位前のこと俺は何時に無く真面目に仕事、まあ世間一般に例えるならデスクワークだ。しかし。

「……」

「……」

「まゝた部費についてかよ。面倒だなチクショイ! てか君等寝てる暇無いぞ!」

机に突っ伏している阿久根君と善吉君に激を飛ばすのだが、イマイチ効果が無い。この場に鞭か何かがあれば、バシバシとブツ叩きたいのだがそれは流石に酷なのかも知れない。ても、机に置いてある書類の山、山、山！　が5つはあるのだ。

最初に見た時は思わず『えっ？　何処の漫画？』と呟いてしまったのだが今更ながらここは漫画の世界だったと、最近この世界に馴染んでしまってる自分がいたりする。

まあその事は置いて今は書類のお片付けをしなければ。

「……人吉くん。オレ　生徒会やめちゃ駄目かなあ？」

「あっはっは！　逃がしはしませんよー　阿久根先輩」

阿久根君と善吉君が死にそうな顔をしながら、何やら言い合っているが仕事片付け無いとまた居残りになっちまう。

えーっと次の山は……また部費陳情かよ、金にがめついなこの学校の奴らは。

「しかし……流石にめだかさんはさすがだなあ」

「俺達の十倍は働いてる筈なんですけどね」

「と言うより気になるのは……」

「ええ」

「何故零（霧生君）がめだかちゃん（さん）と同じ動きが出来るんだ？」

「んだよ、俺がめだか君バリに働いてるのがそんなに信じられないのかい。」

「別に……柔道視察の件の時に、めだかちゃんにあの後本当に手伝わされましたね……その時にめだかちゃんの動きを大体真似てみただけでっせ」

「本当……あの時は二人だったから大変だったぜ。日付が変わる前に終わらせられたのが奇跡に近いよ。」

「……てかよ、無駄口叩いてないで、アンタ等もキリキリ働けよっ！！」

「は、ハイ！！」

充血した目で睨むと、即座に仕事に戻る。

「20分後」

「めだかちゃん、取り敢えず4山終わらせませう」

「ご苦労、流石だな……が、まだ私の席の後ろにもあるからそれも片付けてくれ」

と後ろ指を差すめだか君の背後を見ると、確かにまだ書類の山々が……。

「うつそ〜ん？ 死角になってて分からなかったけど……まだこんなにあるのかよお〜」

流石に限界だぞ。“秘技・ペン6本持ち”のお陰で地味に指が痛てーしよ。

「しかし、流石に私と零だけではこれだけの書類を片付けるのに時間がかかるな」

「ああ、それには全面的に同意だ。所詮俺は君の動きを猿真似しただけだし……ってオイ、二人共寝てねえで働けやつ！ー」

「あだっ！」

「うぐっ！」

机に突っ伏して睡眠モードに入っていた二人を叩き起こす。
全く、油断も隙もあったもんじゃない。

「書類内容の殆どが各部活動の部費に関する陳情なんだよな」

「ウム、勧誘期間が終わり、部活動が本格化したのが大きいな」

「カツ！ 副会長はともかく、会計の不在はやっぱ痛いな」

「ああ、痛い所じゃ無いよ。そもそも今の時点で役員が揃ってないのがキツ過ぎだぜ」

まあ、その分の仕事をめだか君が全て兼任してるつても凄い話だ。
てか善吉君、なにナチュラルに会話に混ざってるんだよ、お前の分の仕事はまだあんぞ？ まあ、言わないケド。

「元柔道部員の人間として言わせて貰えば、部費は一円でも多い方がいいですからね。連中の気持ちもわかりますよ」

「ふむ、何をするにも先立つものには必要か」

「うんうん、まあ何をするにも先ずは金……だからな」

この三年弱で一番身に染みてるからな……金の重要性って奴を。

「とはいえ……増額できる部費の予算枠は限られておる。全員で分け合えば雀の涙程度しかならん。それだと公平性を欠くことになりそうだな」

めだか君の言う通りだ。この学校は、馬鹿みたいに部活の種類がありすぎる。

なので、予算委員共から出た予算程度では足りないのだ。

「……だったらこうしませんか？　いつその事、増額枠を一つの部の総取りにしようというの？　例えば……オレが担当している業務の中に部活動対抗リレー大会というのがありましたでしょう？　あれで優勝した部が予算増額とか！」

「成る程……でもそれって陸上部辺りが有利になりませんかね？　走るんだし」

「まあ、確かにそうだが……」

俺の呟きに阿久根君も考えるのだがその提案は良いと思う。
なんとかして上手い方向へ持ってきたいものだが。

「あ、だったら丁度いいのが……えっと、あ あったあった」

何かに気が付いた様子の善吉君が机の上にある書類をガサゴソと探り一枚の紙を俺達に見せる。

「「「ん?」「」」

「後で話そうと思ってたんだけどさ、目安箱にこんな投書があったんだ」

んで冒頭に戻る。

様は目安箱に投書してあった内容“新設された50メートルプールの活用”ってのを使い、部活動対抗水中運動会を開催したって訳だ。

「結構集まったなあ」

「陳情していた部活が全て参加か」

「急なイベントだったのによくあつまったものだよ」

阿久根君の言う通りだ。余程予算が欲しいのか。

「知ってる顔もいるじゃん、剣道部に陸上部」

「美術部に柔道部……って猫美さんじゃん。引退したんじゃない無かったわけ？」

「あ、ホントだ」

ナチュラルに混ざってる猫美さんに脱帽つか？ と同時に目の保養だなあ、と親父臭い事を思っていると、後ろからマイクを持っためだか君がご登場。

『さあ、貴様達。戦争の時間だ』

マイク片手に開口一番の言葉がそれだった。

『働かざる者食うべからずと言うが、これは真理に反している。私達は寧ろこう言うべきなのだ』

お得の演説を開始し、一旦一息入れ。

『働いた者は食ってよい！ 貴様達、欲しい部費^{モリ}は勝って得よ！！』

めだか君の言葉がプールサイド全体へと響き渡る。この瞬間、水中運動会が始まったのだ。

『えーそれでは競技の説明に移りたいと思います』

善吉君が競技の説明をする、大まかなルールは以下の通り。

1つの競技につき、各部から3名の代表者を選出し競い合う。

それに加えて男子生徒はハンドとしてヘルパー（浮輪）を装着。

んでこれが一番重要、もし生徒会より総合点が高かった場合は、無条件で予算が三倍となる……めだか君の私財とやらで。とまあ、ル

ールを説明したのだが、俺には関係が無い為死ぬ程やる気が無い。

阿久根君と善吉君がプールサイドのタイルに両手を付いて『あゝ！』とか言ってるのが愉快だが。

『それではここに第一回水中運動会の開催を宣言——する前に』

つてオイ。いい所で止めんなよ、みんながズッコケてんぞ。

『我々生徒会に所属する“役員補佐”から話があるそうだ』

「はあ!!?」

いきなり俺に話を振ってきたので思わずデカイ声が出てしまった。
そりゃそうだ、だってそんな話俺は聞いて無い。

『では霧生役員補佐、頼む』

「お、オイ。そんな話、聞いて無い……」

「頼む」

マイクを俺に押し付ける様にして渡すめだか君。他の生徒達は俺を
ジーンと見てるし……ええい!!　こうなりゃあ破れかぶれだ。

『ええーっと　只今黒神生徒会長からご紹介に預かりましたー霧生

零です。万年彼女募集中だったり……ああ、ごめんなさい。冗談です』

取り敢えず無難な挨拶から始める。ちょっと私情を挟み掛けると、隣に居ただか君に睨まれた。あゝあ、こういつのは苦手なんだが……。

『さて、お前等に聞く……部費^{カネ}が欲しいか!？』

《おおー!!!》

全員……とまではいかねえが、かなりの人数が雄叫びをあげる、よし触りはいいな。

『そんなに欲しいのか!？』

《おおー!!!》

『それなら、そんなに欲しけりゃあ勝て! めだかちゃんが『楽しみ』と言ったのもあるが、それ以上に部費^{カネ}が欲しいなら、勝って! 勝って! 勝って!! 勝ちまくれ!!! 金と女は勝ち取るもんだ、勝つ事が全て……勝たなきゃゴミだ!!!』

《……》

かなりの私情が入った発言がまずかったのか、耳鳴りがする程辺りに静寂が走る。

うゝん？ 間違ったか？

《うおおお！！！！》

と思ったら軍隊の士気が最高潮になったような雄叫びが再びあがる。
フツ…… どうやら成功か。

『では第一回戦、水中玉入れだ……総員準備に取り掛かれや！！』

かくして、血で血を染める様な……とまではいかない水中運動会が開催された。

マイクパフォーマンス終了した後をめだか君に引ッ叩かれたのが納得行かなかったが。

続く

14:「実写版の利根川さんが『fuck you! ぶち殺すぞ』ミめら……」

水中運動会編は次回で終わらない……かも？

15：『幸福は金で買う』by岡○津勘吉（前書き）

見てみたら総合評価が500にアクセス数が10万を越えてました。

いや、ホントにありがとうございます。

評価して下さった方々には感謝してもしきれませ。

そういう事で中編ってところです。

特に言う事も無いので、駄文に我慢出来る鋼の精神力を持つ方はどうぞ。

15：『幸福は金で買う』by両○津勘吉

どっかの受け売り臭い俺の演説もめだか君の拳骨で終了し、いよいよ第一戦“水中玉入れ”がスタートする。

ルールは得に説明する必要も無い、陸上玉入れが水中に変更しただけだし。

『部活動対抗、水中運動会！ 第一種目水中玉入れ！ でわでわっ！ これより開始したいと思いますー！！』

実況らしく女の子の声がプールサイドに響き渡る。

姿を見たのだが、アレ（・・・）で三年生だったのを聞いた時は、世の中ってオカシイと再認識したもんだ。

『おーっと申し遅れました！ 本大会実況はわたし、放送部部長代行、阿蘇短冊が解説は――』

『この世に知らぬことなし！ 一文字流、不知火ちゃんでーっす！』

EP15：start

一回戦の水中玉入れでのウチ（生徒会）のチーム分けは阿久根君、善吉君そしてめだか君だ。

なので俺は……。

「フリーフリー」

応援に回る。

てか出来たら全ての競技を応援する役で行きたいのが本音だったりする。

『位置についてよおおいつ……どん!!』

水中玉入れがスタートした。

おー開始早々面白い事になってるな。

「くそっ！ やっぱヘルパー邪魔でもぐれねえ!!」

「バカ！ 足で掴めばいいんだよ!!」

「やつ……これ別にヘルパーしなくても！」

「てかプール深すぎ！ 足がつかない！」

とまあ、色々な声がし、予想以上にシユールな絵だ。

あつ、不知火さんつたら実況席でプールにいる奴らを指差しながら大笑いしてやんの。

とと、変なもんに気を取られて無いで俺達チームを応援せな。

「おや？ 善吉君と阿久根君がプールからあがり、めだか君の姿が見えない……へえ？」

既にプールから上がった二人は見に入ったか、だとすると。

『おつ、おおおつ！？ 黒神めだかつ！ お手玉を一気に！ まとめて投げ入れたああ！！ 生徒会執行部20P！！』

潜水していためだか君がお手玉の塊を一気にシュート、それが決まり我等が生徒会は20P獲得した。
程なくしてタイムアップ今の所は何個かの部活と同点トップになった。

「おゝつかれえ！」

中休憩の間に電光掲示板を眺めてる阿久根君と善吉君の元へと出向き、労いの言葉を掛ける。

といってもこの二人は何もして無いんだが。

「おお、零か」

「あん？ どうした？」

「いや、ほぼ横並びの順位になってしまったってね」

「あー 確かに」

俺も一緒になって眺める、確かに“何個”かどころか殆どの部活が食らい付いてきてんな。

「まあ、主催者がトップじゃあ不公平感是否めませんし、そういう意味では不知火に感謝ですか」

「いや善吉、不知火に感謝する必要など無い」

善吉君が顎に手を置いて語る背後にて、何時ものご登場をするめだか君。

「あゝ、おつかれめだかちゃん」

「……………どういふ事だよめだかちゃん」

「うむ、どの道私達はトップではなかった、あやつらを見よ」

めだか君の目線を追うと、皆とは少し離れた場所にたむろしてる三人組が。

「ありゃあ……競泳部か？」

「うむ、その通りだ」

「あれが不知火の言ってたトビウオ三人衆って奴か？」

ああ、水中運動会の準備の時に何か後ろで言ってたな。
金大好き三人衆って聞いたが。

おや？ いつの間にかめだか君があの人三人に何か話てんな、どれ……。

「どうしたんだ零？」

「ん？ あの人三人の人とナリを知りたいってね」

さて……俺と馬が合えばそれなりに警戒、じゃなければその時点で興味の対象外だな。

そう思い、めだか君が去ったタイミングであの三人の元へと向かう。

「どうも　競泳部の皆さん。楽しんでますか？」

「あ？　何だオメー」

「確か……開始直前に中々に素晴らしい演説をかましてくれた、霧生って名前だったか？」

「あー！　思い出した思い出したわ！」

「……」

無駄にテンションの高いガングロ君こと種子島君に対して冷静な態度のオールバック君こと屋久島君。

そして全く喋らない女の子、喜界島さん。

「フフ、覚えてくれて何よりですよ……ふん？」

「何だよ？」

「いえ別に、あなた達三人共、いや得にその女子さんが一番かな……三人共『人生悟ってます』って目エしてて、自分が中々に好きになれそうなタイプかなあ、って」

「……」

「何？」

屋久島君の目が若干細まる。

大方、俺の言った事に引つ掛かりでも覚えてんだろうよ。

「まあ、あれですわ。“それなりの対価を支払わなければ金は手に入らない”って意味での応援みたいなもんで声掛けただけですの
でお気になさらず、それでは」

そのまま軽く手を振り、その場を後にする。
三人の視線が突き刺さってる気がしますがね。

つー訳で第二回戦、水中二人三脚が始まる。

出場するのは阿久根君と善吉君なので、相変わらず俺は応援をする、手持ち無沙汰なので、パフォーマンスに使用したマイクを弄りながらだ。

「競泳部の代表は、屋久島先輩と種子島先輩か」

「……」

「あん？ どうしたよめだかちゃん」

何時もなら一言二言返してくれるのに言葉が返ってこない。
何やら考えてるみたいだが。

「いや別に——」

「なーんや黒神ちゃん、二回戦は見学かいな」

「お？」

めだか君が口を開いた瞬間、話に割り込んできた人が、この聞き覚えのある声。

「鍋島三年生か、私ばかりが出張っては団体戦の意味があるまい。貴様も同じ考えではないのか？」

「ククク！ まあ後輩にも出番やらんとねー」

「チーッス！ 猫美さん」

「やつ、零君も元気そうやね」

何だかんだで今日初めての会話だったりするんだよな。

「はっはっは！ 元気だけが取り柄…… って訳でも無いですが、俺はまだ今日競技に参加してないんでね」

「そっぴやそうやね、出場せえへんの？」

「うーん正直俺より、めだかちゃんや阿久根先輩や善吉君の方が動けるような気がしませんかね？」

出る気が無いってのもあるのだが、俺が出るよりあの三人の方が遙かに動けるからな。“勝利”するって考えれば、俺は補欠扱いみた

いなもんさ。

「そうか？ 私には“面倒だから出たく無い”って本心が見え隠れしてる様に見えるのだから？」

「まあ、それもあるが」

めだか君よ、何時も思っただが、何で俺の考えてる事の大半を言い当てるんだ？ ちよっと怖いよ。

「なんや、ヤツパリそうなんや。あゝあ、ウチは零君が出場しとる所が見てみたいなー」

「めだかちゃん、気が変わった。次の種目は俺が出るから！！」

猫美さんの言葉に、ソッコーで心変わりをしてしまった。しかし安い俺の決意って。

「貴様は何故鍋島三年生の言う事は聞くんのだ？」

「え？ 猫美さんだからだけど？」

「貴様は……もういい」

寧ろそれ以外に何があるんだ？ それと正直に答えたつもりなのに、めだか君にはジト目で俺を睨まれたあげく『プイッ』ってされた。

「何を怒ってんだろつかあの子は」

「アハハ……相変わらずやね。平気な顔してドキリとする様な事を言うところとか」

「そうですか？ うーん、思った事を言っただつもりなんですがねえ」

「もしかしたら零君は天然ジゴロさんなのかもね？」

うんうんと一人で納得している様子の猫美さんだが、それは違う。

「そりゃあ違いますよ。俺は『好きな人には常に正直であるべし』って信条をもってますから、貴女に対しては、殆ど正直に話してるんですよ」

この信条は元の世界に居る爺ちゃんの教えだ。

「……………それ、一歩間違えれば告白やで？」

「え？ そのつもりでしたか？」

「ほえ！？」

そう言った瞬間、めだか君と猫美さんがビックリした様子で俺を見て来た。

「……………鍋島三年生。コイツの言う事は余り本気にしない方がいいぞ？」

「は？ 俺は本気だ——」

「そ、そうするわ……」

「ちょっと待ってよ、最後まで言わせ——」

「話は変わるが、は屋久島三年生について何か知ってるか？」

「あ、ああ。それなら同じクラスやからわかるで？」

「オーイ、二人共……特に猫美さん聞いてますか？」

何か知らないけど、俺の話を最初から無かった事にされた気がある。言うタイミング間違ったのだろうか……。

とにかく二人から『これ以上言うな！』ってオーラが出ている為、話はそこで終了した。

「もとより特待生は変人奇人ばっかやけど、中でも屋久島クンは輪アかかつとるよ。阿久根君や黒神ちゃんとは違う種類の、あっさり天才ゆう男やな」

先程のやりとりが、ホントに消去されたかの様に話が進む。なんたる、急に悲しくなってきました。

「その実力自体は素直に尊敬するけど、何を考えてるかわからへんし、何がしたいのかわからへんねー」

「ふーん？」

これ以上腐っててもしょうがないので会話に参加する。どーでも良いのだが、俺が思うに、あの屋久島ってのは三人の中じやあ一番常識的な気もするがな。

「……別にわかってもらおうなんて思っ
てないよ。あたし達は」

「「!」」

「お？」

三人で屋久島君を眺めると、
またもや背後から声を掛けられた。
確か喜界島さんだっけか。

「でも何がしたいかは教えてあげるよ、
あたし達はね札束のプール
を作って、そこで泳ぐのがあたし達三人の夢なのさー！」

バブル時代に実際あった様な夢を
淡々と、そして無表情で語る喜界
島さん。

あらやだ、この子ったらホントに夢も希望もなさ
気な目をしてんな。

「ふん？」

「なに？」

その濁った目で俺を軽く睨む様にして見て来る喜界島さん。

成る程ね“顔の整った女が睨む程もの怖いものは無い”って誰が吹いたかのかは知らないが、実際に目の当たりにするとあながち嘘ではなのかも知れないな。

それにしても、札束プールで泳ぐって考えは頂けないな、泳ぐだけなら誰だって出来るんだからな。よし、此処は精神年齢年上のお兄さんがご教示してあげよう。

「いやあ？ 俺としては札束プールで泳ぐより札束風呂でドンペリかゴールドシャンパン飲みながら女はべらして高笑いしつつ『全て愛ですよ』と全く持つて説得力の無い言葉を嫌味全開な顔して言うて札束をばらまきながら……」

「貧乏人よ拾え拾え！！」まで言おうとしたが、途中で言葉が止まる。

だって……。

「……」

「……」

「……」

「ゴメン、軽く妄想入ってました」

だって、「冗談のつもりで言ったのに、目の前の三人から来る「ああ、可哀相な人なんだ」な視線に耐え切れずに平謝りをしてしまった。ホント、女の軽蔑の視線程心に突き刺さるようなものは無い。

「軽いジョークだったのに本気にしやがって……」

隅っこの方で膝を抱えて座ってても、今なら誰にも攻められないだろう。

「まあまあ、ウチは「冗談やと思っとったよ」

「うん……」

喜界島さんは壁に激突した鳩を見る様な、めだか君は着地に失敗して腹から落ちた猫を見るような目でそれぞれ俺を見て来たのに対し、猫美さんだけが何故か異様に優しかった。

その優しさが逆にキツイっすよ猫美さん……。

第二回戦での生徒会のは3位という戦績で終わった……終わったのだが。

「捻挫、だな」

「ぐっ！」

「あんな馬鹿な走り方をすれば、ああもなるわ」

「す、すまねえ」

「返す言葉も無い」

只今、阿久根君と足を触診しつつ氷嚢を乗つける。

理由は、第二回戦の時にこの二人が馬鹿をやらかしたからだ、二人三脚だつてのに何を思ったのかお互いを潰し合う様にしながら爆走した結果が……これだ。

「ホントにすまねえ、頭に血が上りすぎた」

「今更遅いよ、もう……」

「ぐっ、これくらい……平気だ!」

阿久根よ、絶対平気な訳無いだろ。普通に生活しててなる皮膚の色じゃ無いし、確実に数日間痛むぞこれ。

「しょうがない……次からは俺も入るよ」

「むっ、やっと貴様も出る気になったか」

「まあ、こんな怪我状態で無理矢理出させて『俺知りませーん』は流石にねえ？ つー訳で早速次の競技から準備運動がてら入んで」

うん。そこまで俺も鬼のつもりは無いし。

「頼むぞ」

「ウッス、まあ笹船にでも乗ったつもりで待っててくれ」

「それ、沈まないか？」

「ナイスツツコミありがとう善吉君」

善吉君のナイスツツコミで自身にカツを入れつつ三回戦である“鰻

掴み取り戦”に参加したのだが。

「ヒヤーツハツハツハツアアア！！ 鰻だああ！！」

「……………」

ちよっぴり張り切り過ぎたのもあってか５匹しか取れ無かった。
しかもプールサイドに居る奴、果てには実況席にいる奴らすら俺を
不審者を見る様な目で見てきたのがこの上無く腹が立つ、人がこん
なにも真剣に鰻を掴もうとしてんのに。

そんな何かを失った気がした三回戦を終えた俺達の戦績は３８Ｐに
なり、只今の順位は４位。

１位である競泳部は１０Ｐ差だ。

つーかあの喜界島さんってのは、俺が“世紀末・モヒカンモード”
になって周囲に恥を曝してる間に顔色を変えずに淡々と鰻を狩って
いたのかと思うと、いかに自分がハシャイでいたんだろうと思いつ
せば思い返す程に、段々と恥ずかしくなっていた。

「んで、最終競技が」

「ヒヤツハー！！ 水中騎馬戦だああ！！！！」

世紀末モヒカンモードになった俺に若干影響されたのか、阿蘇さ
んの口調に変化が訪れてたのは置いといて、遂に最終競技“水中騎
馬戦”に入る。

続
く

15：『幸福は金で買う』by 岡○津勘吉（後書き）

主人公は、黙ってれば格好良いのに性格と馬鹿な言動のお陰で三枚目キャラが確定しつつあったり。

外：「不死身って言っても一応は空腹感に襲われるんだよね……襲われるだけで

番外編って奴です。

主に主人公がこの世界へと飛ばされて、徐々にチャラ男予備軍に性格が変わる軌跡です。

因みに時系列中学生時代で、安心院さんが封印されて暫く経った位です。勝手な設定も盛り込んでしかもクオリティーも最低値なので、鋼の精神力を持つ方はどうぞ。

外：「不死身って言っても一応は空腹感に襲われるんだよね……襲われるだけで

これは……俺がこの世界へ来てから一年の時が過ぎた年末の出来事。

世間はX・mas一色で、メディアの方もそれはそれは「もう聞き飽きた」て程に取り上げていたのだが、当然の事ながら知り合いなんて者が存在しない俺にとっては、ただただ辛くそして寂しい思いを強いられるイベントだったりする。

そんな時は家に閉じこもってDVD鑑賞会に洒落込みたかったのだが、そういう時に限って冷蔵庫の中が空っぽだったりするもんで、只今買い出しにの為に駅前のスーパーに向かっているのだが。

（ドイツもコイツも幸せそうな顔しやがって……）

寒い、そしてカップルが多いの二拍子が揃ってるお陰で、早速帰りたくなった。

だが、晩飯の材料を揃えなければますます寂しいX・masを送る嵌めになるのだけは避けたいので、腹の中にあるどす黒い感情を一杯表に出し、スエット上下着用、オマケにポケットに手を突っ込みながらのヤンキー歩きで街中を歩く。

一応死ぬパターンに餓死を取り入れてみたのだが、約半年程何も食

わずに水だけの生活にしてみたが、見事に死ねなかったのは記憶に新しい。

ちなみに脱水症状や熱中症でも死ね無かった。

「うつ！」

「こ、怖い……！」

そんな感じで歩くもんだから道にいる人間共（カップルが殆ど）は俺を見た瞬間に顔を逸らしたり、逃げたりする。

まあ、こんな事をした所で誰も得をする訳じゃあ無いし、寧ろ迷惑千万だつてのは自覚はしている……自覚しているのだが考えてみる道を歩く先々でカップル共が手を繋いで歩いているのを想像してみなさい……どうだ、殺したくないか？ 寧ろ「X・masに躍らされてんじゃねえし」とか「告白して玉砕しろ……そして絶望しやがれ！」等とか思わないだろうか？ 少なく共俺はそう思ってしまう。

身勝手だつても解るのだが所詮人間はそういった生き物なのさ。

（……ケッ！）

これが世間で言う所の「リア充爆発しろ！」の現場をリアルタイム生放送で見せられてる俺は、どす黒い感情全開で買物を済ませ、帰宅しようとしたのだが、一件の服屋を見て足を止める。

（そう言えば……最近服買って無かったな）

必要最低限以外の物は、余り買わない主義で通していた俺は、その服屋を見た瞬間、買いたいという感情に襲われた。

（たまにはいい、かな？）

どうせなら適当に服も買い込んで置いてても損は無いと思い、その服屋に入るのだった。

（2時間後）

「ありがとうございました」

（つつい目移りして買ってしまっただが、まあ、いいか……）

どうも、ああいった店に入ると馬鹿みたいに衝動買いしてしまう俺がいるなと思いつながら、店で着替えた服を着ながら街中を歩いて家に帰る。

だが、数分歩いている内に妙な違和感を感じる。

（なんだ、あちこちから視線を感じる？）

そう、さっきまでは視線を逸らされたのだが、今度は逆に視線を周
りから感じる様になったのだ。なんていうか……こう、嫌な視線じ
や無い事は確かなんだが。

（服が変……なのか？）

自身の姿を確認しながら思う。今着ている服は黒く若干生地が厚い
パーカに黒いジーンズという真っ黒スタイルで、別にぶっ飛んだデ
ザインじゃ無く、ごくごく普通にありそうな服……な筈だ。

（何か……居づらい）

ともかく、このチラ見感覚の視線に耐え切れずにその場から退散す
るしかこの嫌な視線から解放される手だてが無かった為、真っ直ぐ
帰る事にした。

（ふう、食料だけだったのに……やはり慣れない事はするもんじゃ
無いな）

X・masだっただけで慣れない事はするもんじゃ無い……そう思

いながら何も入っていない郵便受けを覗き、家の鍵を開けて中に入る。よし、これからの予定は飯を食ってから買って来たつまみとビールないし酒を片手にDVDもしくはTV鑑賞会だな、うむそれがいい。さて、今日の飯は何にすっかなあ……。

「おや、お帰り。遅かったね？」

「うん……」

うん……中華を昨日食ったし、だからと言って洋食は余り好みじやねー事を考えれば……。

「ご飯にあさりの味噌汁そして生姜焼きだな」

うんうん。X・masだからってわざわざ七面鳥なんて馬鹿らしいからな。

普通の家庭の食卓レベルで充分だなうん。

「随分と寂しいね、X・masだよ？」

「別にX・masだからって他と合わせる必要性が無いって言うか……他所は他所、家は家って言うか……」

「ふん？ まあ、どっちでも良いけどさ。あつ、僕は少し多めね」

「はいよ……………あ？」

ちよつと待て…………俺今誰と話してたんだ？ 此処は俺家でしかも俺一人の筈だよね？ てかどつかで聞いた声なんだけど。幽霊……………にしてはフレンドリー過ぎるし。

「…………」

「何ボケーンとしてんのさ？ さつさと作つてよ」

とりあえず声がした方向…………台所を出て直ぐにある俺が寝ているベッドをみると、異常に髪の毛の長い女が、さも当然ですよと言わんばかりの顔をしながらベッドに腰掛けていた。それが全く知らない顔だったらどれほど良かった事か…………その時ばかりは心の底から思った。

「…………何故に？」

「何故に？ じゃ無くて早く作ってくれよ。じゃ無いと僕のお腹と背中がくっついてしまつよ」

いやいやいやいやいや、だから何でアンタが居るんだよ。
しかも普通に晩飯を催促してるし……いや待て、此処は迅速にかつ
的確な言葉と大人の対応で、この俺の城から出て行行って貰おう。
うん、それが良い。

「えーっと……どなたかは存じ上げませんが、とりあえず出てって
貰えませんか？ うん、てか出てけ」

貼付けた様な笑顔で言い切った。

「決まった……」と心の中で呟きながら。

「君はこんな美少女を寒空に放り出して心が痛まないのかい？ あ
ゝあ、お姉さんは悲しいなあ……」

「そんな事は知りませんな。住居不法侵入した犯罪者に情けを掛け
る程、私は器が大きくありませんので」

「風営法を思い切り破ってる君に言われても説得力のカケラも無い
よね」

「……」

「……」

沈黙する……。

俺としてもそこを突かれると痛いのだ。

仕方ない……ほんつつつとーに！ 仕方ないな。

「はあああゝ 何しに来たんですか？ 安心院先輩」

これ以上言った所で、俺がこの人に口で勝てる気がしないので、俺が折れる事にした。

「何って、そりゃあX・masだから遊びに来たんだよ。それと僕の事は安心院あじむじゃなくて安心院あんしんいんさんと呼びたまえ……ってこれで通算100回は言ったよね？」

「うん、そんな建前は要らないし呼ぶつもりも毛頭ござりませんので、さっさと要件及び目的を迅速に話す事を要求します。さもなくば、貴女の身ぐるみを全て剥がして真っ裸で外を歩かせる嵌めになりますので……」

完全に脅し口調にシフトチェンジさせ、何が目的か吐かせる。

この人とは一年前の“球磨川君に封印されちゃいました事件（仮）”以降、ある理由があってちよくちよく我が家に出没したりする。

「霧生君ったら……そんな激しい告白を……キャッ！」

「……」

キレるな……キレたらこの人の思い通りだからな。COOLになれ
零、冷凍庫の様にCOOL DOWNだ俺。

「うん、山椒魚みたいにクネクネしても誰も得なんかしないし、決
して可愛く無いんでさっさと用件を喋りやがれでございますコノヤ
ロー」

日本語が若干おかしな気がしたが……まあ、何が言いたいかは伝わ
っただろう。

「だから、遊びに來ただけなんだけど？」

急に真顔で答えだす安心院さん、コロコロと表情が変わんなこの人。

「本当に？」

「本当さ。僕が何か企んでるとても？ あっ、まさか自分が物語の

主人公だとか思っちゃってる？ 自意識過剰だなあ」

「んな事たあ言ってますんよ……俺が言いたいのは、さっさと消えろって事ですよ」

「ちえ……単に遊びに來ただけでこつも邪険にされるなんて、流石のお姉さんもビックリだよ」

「今に始まつた事じゃ無いでしょうに……てな訳で玄関はあちらでくす」

ジェントルマン風に玄関の場所を示しながら心の中で「帰れ」コールを連発する。

「お腹が空いて空いて、力が出ないよ……ああ、僕はX・masの夜に死んでしまうのか……」

「いや、腹が減つてんのなんてアンタ自身の事だから俺は知らねーよ。それにアンタがんな事で死ぬ様なタマには見えんないし。まあ、仮に死ぬんだつたらこの部屋では勘弁してくださいよ？ 死体処理も簡単じゃ無いんですからね」

紳士的な振る舞いも虚しく失敗した揚句、逆に人のベッドの上で一人芝居を始めた安心院さんを放置しながらの夕食作りに取り掛かる。

多分コイツ帰る気無いな……とか思いながら。

「くすん……お姉さんの硝子で出来たハートは脆くも砕け散ったよ」

「んなもん知るか」

そんなやり取りをしつつの夕食作りも終わり、テレビのある居間に持っていく。

「さて、と。今日の出来も中々って事で、いただきま〜す」

炊いたご飯も調度良い固さだし、うんうん、美味そうだな事を思いながら箸をとって食べようとするが……。

「ちょっと待てよ。僕のは？ 僕の方は無いの？」

いつの間にか俺が座るテーブルの反対側に座ってた安心院さんに止められました。

そして何かを期待した目で俺を見る。

チツ……しょーがないな。

「カロリーメイトなら………」

「えゝ？ 出来れば君が作ったご飯が食べたい……」

「水道水なら……」

「いやいや、レベルが下がってるよね？」

「……………じゃあ帰れよ」

「最終的には何時もそれだね。それが出来るなら、とっくに帰ってるさ。だけどそれが出来ない……君はその理由が分かってる筈だよ？」

そう言われてはみるものの、この女がここに居る理由なんてたかが知れてる。

なんでも“球磨川君に封印されちゃいました（仮）事件”のお陰で“表”に出れなくなってしまったのだが、何故か俺の家の空間だけは能力制限付きで行動が出来る。

と、前に言ってた気がするのを右から左で聞き流してたのだ。だから俺が言う『帰れよ』ってのは『とりあえず消えてる』って意味だ。

「ハアゝ」他に実体化出来る空間とか無かったんですか？ こうも

チヨロチヨロと家^{ウチ}に出現してとなると、いい加減鬱陶しいし、コッ
チにもプライバシーってもんがありますからね」

「真に残念ながら未だ無いよ。人の見る夢の中ならチヨロチヨロと
動けるけどね」

「じゃあもう夢で良いじゃん。それなら腹も減らないし」

「君が作ったご飯が美味い……そう“先生”が言ってたからね、な
ら食べてみたいと人間の心理的に思ったのさ」

「人外とか吐かしてる奴が何ほざいてやがんだか……っーかあの野
郎、余計な事をベラベラと」

豚生姜焼きを箸で突きつつ、俺を若干変えてくれたこの場にいない
進路相談員の先生に恨み言を言う。

「まあ、その情報を教えてくれたお陰でますます僕は君と仲良しに
なりたくなっただって訳なんだ。おめでとっ、これで君は僕と仲良し
さんだ」

「鳥肌が立つような事は言わないでくださいや、あゝやべえ、寒気

もしてきた」

「おやおや、風邪でも患ったの？ お姉さんが看病してあげようか？」

「煩い、ニヤけるな、そしてコツチに近付くな、ええい！！ 頬つぺたを突くな食いづらいだろうが！！」

つんつんと人の頬を突きやがって…… 本当の意味でこの世から消してやりてえわ。

多分、普通の人間の感覚だったら嬉しいポジションにいる筈なんだが、俺にとつちゃあ意味が無いというか…… ああ！ もうとにかく嫌だ。

折角婆ちゃんが隣にいらなくても何とか生きる事が可能になったのに、「クローン人間かつ！」と思ってしまう程似てるこの女のお陰で、俺の感情が嫌な意味で揺さ振られる。

「ご飯ご飯」

「るせえっ！ 食いしん坊かアンタは！！」

「食いたいだよ、霧生君の味が知りたいんだよ！ 僕だってね、女だって事さ！！」

「そんな逆ギレされても……てかそこは「霧生君の作った飯」じゃなくね？ 飯の部分を省略するから、なんか生々しく聞こえるんですけど」

と言いながら、勝手に取られない様にテーブルに並ぶオカズをカードしながら飯にありつく。

むっ、この味噌汁……味噌の量が少し多過ぎたな。

「あら？ 変な事を言っただけなのに霧生君だったら何を想像したの？」

「……球磨川君が貴女の顔を剥がした時ってどんな気持ちだったんでしょうね？」

「おっ？ 今流行りの“ヤンデレ”かい？ 大丈夫、君の為ならお姉さんはどんな愛も受け止めるぜ！」

「……」

ピシッと俺の胸辺りに指を差しながらポーズを取り、何かぶっ飛んだ事をほざいてるなあ、と思いながらアサリ貝の身をほじくりながら思う。

無理……未だかつてこんなに噛み合わない会話があったらうかと。

そんな事があつたお陰か、1年に1度の筈のX・masなのに、普段の倍以上に飯が美味く感じられなかったのだった。

因みに、何時まで経つても帰る気配が無かったのに根負けした俺は、安心院さんの御所望通り飯を振る舞ってやったのだが、それがイケなかったのか勝手に人の家の箆笥からスエット上下を取り出した揚句着用し。

「今日は帰りたく無いから泊まるね？　いいでしょ？　答えは聞かないけど」

とまあ、毎度勝手ながら人の了承も聞かずに泊り宣言した揚句に俺の寝るベッドを占領しやがった。

一瞬本気で顔面剥がしを実行しようと思ったのだが、何故だかやろうと思うと出来ずになし崩し的に了承してしまい、結局俺もチキン野郎だったと改めて思うのだった。

そして就寝前。

当然予備の布団なんて準備してる訳も無く、俺は固い床で寝る嵌めになった。

「そっいえば先生って元気なの？」

電気を消し、携帯のアラームをセットしている最中、安心院さんに

聞かれる。

“先生” ってのはさつきも説明した、俺を再び中学生生活をさせてくれた進路相談員の事だ。

「ああ、元氣過ぎて腹が立ちますよ。こないだも『行こうぜナンパ！』 ってサムズしながら言っ て来ましたしね」

「相変わらずだね……」

「しかしまあ、アンタと先生が知り合いだっ て知っ た時は地味に驚きましたね」

「うん、僕が初めて会っ た時は『君のお陰で仕事が無くて楽だよ、君には感謝だよ』 ハハハハ！ 』 っ て言われたよ」

「ああ、超言いそう。あの人っ て自分の仕事を全力で他人に押し付ける気があるし」

殆ど、いや俺以外にあの進路相談室を使用する生徒はいないだろうな。

なんせ皆の記憶があっ た時は、悩み事等があっ た生徒は安心院さんに相談してたし。

「まあ、僕が消えたんなら先生の仕事も増えたんじゃない？」

「んゝ 余り変わってなさ気でしたぜ？ 貴女の後釜的なのが出て来たし」

「後釜？ …………… ああ、めだかちゃんか。確か霧生君と同じクラスだったね？ 彼女は元気？」

「さあ？ 俺はあの子とはあんまり関わって無いから知りませんな。多分元気なんじゃ無いツスカ？」

黒神めだか、この世界での主人公。

あの子とは時が来るまで関わらない、そう決めてる為敢えて授業にも出ない…… 筈だったのが災いして逆に俺の顔を見るたんびに絡まれる事になった。

だが、いくら絡まれると言っても俺があの子の事を知らないのもまた事実だ。

「ふうん？ まっ、どうでもいいんだけどさ」

黒神さんと関わって無い事を話すと、完全に興味が失せた様子の安心院さん。

あっ、聞きたい事思い出した、調度だから今聞いてみよ。

「安心院さんって『自分以外の人間に興味が無い』みたいな事言っ
といて俺には絡んで来ますよね、何ですか？」

「さあてね、何でだと思う？」

常日頃から疑問だったので聞いてみたら、逆に聞き返された。

「うん？ 体の良い宿泊施設の持ち主だから？」

「……うん、どうやら君には一生分かりそうに無いね」

「じゃあアレだ、暇潰しの相手にたまたま俺が選ばれた」

「おやすみ」

「おい、答え位教えてくれたって……」

「……ZZZ」

「寝付きが良いな……てかこの人寝るんだね……」

結局答えは知れなかったが、何時か聞き出すと心に誓いながら俺も意識を手放すのだった。

終

外：「不死身って言っても一応は空腹感に襲われるんだよね……襲われるだけで

先に言っときますが、主人公はいくら自身の性格が変わろうと、最終的な目的である“死んで家に帰る”は忘れてません。

16：「大丈夫勝つよ？　だつて笑い飛ばしたくなる位にスペックの高いあのマ

えゝつと……申し訳ございません。

アレな感じになってしまいました。

16：「大丈夫勝つよ？　だって笑い飛ばしたくなる位にスペックの高いあのス

「ムカついた、だからあの女を……売り飛ばす！」

「「お、おう……」」

最終競技、水中騎馬戦の始まる前に言っただか君の一言のお陰で、喜界島さんのやる気……いや殺^ヤる気は大気圏突破しています。下の二人が冷や汗ダラダラなのを見て若干同情してしまい、思わず俺と善吉君で作った土台の上で仁王立ちしているめだか君に一言物申す。

「おいおい、何でわざわざ本気にさせる様な真似してんだよ」

「何を言っている。お互い全力でやってこそ意味が在るのだ」

「あそ……」

相変わらず“意味の無い事”がお好きな子だな。

『それではラストバトル、ようい……』

阿蘇さんの号令が掛かり、皆の表情が本気^{マジ}になって行く。

『どんっ！』

スタートと同時に両者が組み合う。

一人は楽しげな表情で、一人は憤怒の表情で。

「さて……競泳部の事は善吉君とめだか君の二人に任ずとして、だ」

競泳部についてはめだか君に任せて何の問題も無いだろうと判断した俺は、周りで俺達が潰し合ってるのを伺ってる何組かの部活を見渡し……。

「お疲れ」

誰にも気付かれ無い様に腕を振って“北〇の拳”にでてくる拳法“南〇紅鶴拳”のように水を還した衝撃波を送り込む。

と、言ってもこれを喰らって皮膚が切れたりする事は無い、精々騎馬のバランスを崩して脱落させるのが関の山だが今はそれで充分だ。

「うわぁ！？」

「急にバランスが!？」

『おーっと!？ 理由が解らないが次々と騎馬から墜ちていくチー
ムが!？』

おし、こんなもんかな。後はめだか君達だが……まっ、大丈夫だろ
うな、主人公だし。

「あたしが死んでも誰も悲しまないよ!!」

「おわっ!？」

「くっ!」

『あーっと! 生徒会、黒神めだか! ここで突き飛ばされたーっ
!?!』

阿蘇さんの言う通り、喜界島さんがめだか君を突き飛ばしたのだ。
バランスの影響とはいえ、めだか君と力比で勝つとは……いや
や、この子も中々どーしてだな、それに“金は命よりも重い”ね…
…ククッ、つくづく話しが合いそうな子だな。

確かに金に困って無い連中からしてみたら『金より命が優先』とか
言うが借金まみれの人間からしてみたら『綺麗言だ』と言われるだ
ろうな。

まあ、それも人によって考えが違うけど、俺はどちらかと言えば喜界島さん寄りの考えだな。
だけど悪いね、俺も割と本気^{ガチ}なんでね、例え君等の考えが変わってしまっても今回はめだか君に力を貸させて貰うよ。

「善吉君！」

「わかつてるよ!!」

俺の声に返事をした善吉君は、腕に括りつけられたヘルパーを投げる。

よし、あの子のスペックならやれる筈だ。

対する喜界島さんは、力を出し尽くしたのか息切れをおこしてる、やはりめだか君との力比べは骨が折れた様^{ツラ}だな。

下の二人も勝った様な顔をしている様だが。

「甘えた事を吐かすな……！ 例え貴様等が地獄の様に不幸でも、命を粗末にしている理由になるか!!」

「!!」

勝ったと思つた競泳部の三人が驚くのも無理は無い、なんせめだか君は今、ヘルパーを介して水の上に立っているのだから。

「金が大切だと言う割に随分と高い買い物をした様だな喜界島同級生……貴様は私の怒りを買った!!」

『く、黒神めだか生徒会長！ 水の、上に、立っているだとおおー！!!』

うん、まあ普通の人間の神経なら驚くわな、俺だって何も知らないでこんな光景を見たら、取り敢えず『人型未確認生物（UMA）か？』と思ってしまうだろうよ。

「別に俺は勝敗とかどーでもいいと思ったけどな、今は流石に力チンときたぜ。だから珍しくけしかけてやる、やっちまえめだかちゃん」

どうやら善吉君も喜界島さんの考えが許せないらしくしかめっ面をしながら言い、めだか君が競泳部の騎馬に……具体的には喜界島さんに飛び付いた。

「貴様等が死んだら、私が悲しむ!!」

とかなんとか言いながら、多分本人には自覚の無い百合っぽい絵面をVIP席並の場所で見せられた。

正直「あゝあゝ」って気持ちになったと同時に、俺程命を粗末に扱ってる人間も居ないだろうなあと思っっていたりする。

だってそつだ、元より俺は“死”がこの世界での最終目標なんであるからな。

ナイフで自身の頸動脈を掻き切ったりとか、自作の爆弾で爆死（誰も居ない場所で）したりとかな。

コイツ等が知ったら、フッフッ……どんな顔をするんだか……。

『おおつと!! 同時着水だあああ!!!!』

「ん、終わりか？」

考え事をしてる間に決着が着いたようだな。

どうやら喜界島さんに飛び付いた時に、ちゃっかりハチマキを掠め取ってみたいで総合点で引き分けになったみたいだ。めだか君も喜界島さんを抱えて競泳部の元へ行き、何やら語ってるのが見える。どうやら……若干修正させられた様だね。

「やれやれ……慣れねー事はするもんじゃ無いな」

「そうか？ それにしちゃあお前も結構本気な顔してたぜ？」

「あ？」

おっと、どうやら善吉君に聞かれてたみたいだね。

「まあ、エンジンが掛からなかった……って言ったら嘘になるが」

「だろ？ まっ『終わり良ければ全て良し』ってな！！」

「余り締まってるぞ？」

「うっせ！」

善吉に小突かれながらも少し笑ってしまったのが自分でもわかる。
そして試合終了のホイッスルが鳴り阿蘇さんが優勝した部活の発表
する。優勝したのは……。

『優勝は鍋島猫美率いる柔道部チーム！ おめでとございます！
！』

「やーどーもどーも！」

「……………は？」

折角いい雰囲気になっていた空気をぶち壊すかの如き事実、俺以外の生徒会のメンバー及び競泳部の空気が固まった。

なんでも俺達がごちゃごちゃとやってる合間に、猫美さんがあれよあれよとハチマキをかき集めて見事優勝したのだ。全くもう……。

「流石ッス！ 猫美さん！！」

「どーもどーも！」

後ろで『えゝ？ そんなのアリですか？』みないな空気が出てるが、んなもんは知らん。勝ちゃあ良いんだからね、しかも別にルール違反じゃ無いし。

「ククク！ 『綺麗な相手に汚く勝つ』卑怯と反則、確かに貰かせてもうたわ」

ピシッとめだか君を指差しながら言う猫美さん。

「やっべ、パネエっす！！」

そんな姿が眩しく映る俺はとにかくボキヤ貧なのを自覚しつつ色々と褒めちぎる。

「けどまあ！ 次こそは直にやろつで黒神ちゃん！ 顔洗って出直

してこいや！ 首を洗ってまつとるわ！！」

そして、ピツと手を軽く挙げながらその場を去る。俺以外の連中は『うわぁ、卑怯なのにカツコイイ……』って顔をしてる。

「やべえよ猫美さん……何か知らないけどヤバイっすわ！！」

「ホホホホ！ そんなに褒めんといてーな零君」

「よくは分からないケド愛してます！！」

「ウチもやで〜！」

お互いテンションが高いお陰で恥ずかしい事を人前で言っても恥ずかしい感情が全く沸いてこない、周りから見たら愛の告白に見えた。と後に聞かされた、そんな水中運動会も無事終了した。

ちなみに部費については「いらん」と他の部活へ適当に分配したらしい。

流石に猫美さんだぜ。

くそして次の日の放課後く

「そんな訳で先日のイベントは成功に終わった。が、私が学校行事に置いて私財を投じたことについて批判が多かったのもまた事実である」

「あ？ 何だよ怒られたんかい……俺が意味無く頑張った意味ねえな」

「らしいけど、そんな事言っなよ」

「だってよ、結局思い返してみたら、只単に疲れに行ったようなもんじゃね？」

「君はどうしてこう、アレなんだよ」

「いやだって……」

と男三人で先日のイベントを思い返す中、めだか君が続ける。

「よって今後このような事が無いよう、生徒会にお金の専門家を雇い入れることにした」

あ？ そうなんだ。てことは俺の仕事も減るってか？

「紹介しよう、これから会計職を任せる喜界島同級生だ。競泳部のレンタルなので大切に扱うように！」

紹介と共に扉を開けて中に入って来る喜界島さん、おゝ眼鏡属……いや、どうでもいいか

「荒稼ぎに来ました。無駄遣いしたら売り飛ばすのでそのつもりで！」

キリツと眼鏡を持ち上げながら何処に売り飛ばすつもりなんだろう、と疑問に思ってる俺に何とも言え無い表情をしている善吉君と阿久根君。

「ちなみにレンタル料は一日320円！」

「驚きのお値段っ！」

「値上げ前のタバコの値段と一緒に……」

「そこに繋げるなよ……！」

ナイス突っ込みサンキュー二人共。

続く

オマケ？

零

「で？喜界島さんの紹介はアレって事にして今日の仕事は？」

めだか

「ほう、貴様にしては熱心な所だが……今日は特に無いな」

零

「very nice！じゃあ帰る！」

仕事が無いと分かった瞬間にいそいそと帰る準備を始める、喜々した表情とオマケ付きで。

善吉

「何時もながら、お前って仕事が無いと分かった瞬間にさっさと帰るよな」

零

「だって俺が残ったてしょうがなくなね？」

善吉

「そうだけどさ……」

零

「だろ？　じゃあ皆、後はヨロピコ」喜界島さんもバイビー！」

喜界島

「え！？　あ、う、うん、じゃなかった、ハイ……」

零

「あ？　ノリを間違えたか？」

喜界島

「そついう訳じゃ……ない、です……」

零

「なんで敬語？ 同い年だよね？（肉体的に）」

阿久根

「世の中、君みたいに初対面でも馴れ馴れしい性格の人間の方が少ないからね」

零

「そうですね？ まあ、どうでもいいですが……じゃっ、帰りまゝす」

喜界島のキャラがイマイチ分からない零は何も考えずに帰るのだった。

終了

16:「大丈夫勝つよ? だって笑い飛ばしたくなる位にスペックの高いあのマ

主人公自身のスペックは高いんだか低いんだか良く分からない。

外：「刺さない蜂に勝利（カチ）は無い」（前書き）

また番外編でしかも駄文ですいません。

外：「刺さない蜂に勝利（カチ）は無い」

ふと思うのだが、何で『ほつといってくれて』と思ってる時に限って、人に絡まれるんだろうか。そりゃあ絡む人間が嫌いじゃ無い人間だったらまだ我慢出来るが、逆だったら取り敢えず殴りたくなつて来る衝動に駆られてしまう。……絡んだ人間からしたら堪ったもんじゃ無いがね。

EP Extra Start

一年目のクリスマス&冬休みが終わり3学期が始まって数日の事、例によって俺は授業には出ずにサボりに勤しんでいた。

「毎日毎日、同じ事の繰り返し……」

「あ、なぐにを言ってた？」

「いや、別に」

冷たい空気に晒されるながらのお昼寝が出来無いので、進路相談室にて一向に傷付かない自分の身体にうんざりしつつもボケーツとしていた。

同じ様にボケーツとしている“先生”も暇そうだ。

「先生って、仕事しないンスか？」

「やらない（……）じゃ無くて、仕事が無い（……）んだよ」

仮にも聖職者の一端を担ってるってのに、呑気に緑茶をすすりながらヤンキー漫画を読んでいる先生。
こつこつのを“給料泥棒”って言っただろうか。

「何でまた……」

「ほら、アレだアレ。お前と同じクラスに居る子で良くオメーに絡む子、え〜っと何だったっけ？ あの喋り方が面白い子」

「ん、あゝ黒神さん？」

喋り方が変で絡んで来る子ってのはあの子位だからな。

「そうそうそう、あの金持ちっ娘。あの子が俺の代わりにやってくれてるお陰で、今まで以上に仕事が無くなってさあゝあ？」

「なるへソ」

安心院さんが消え去った後から、元々その気があったからね黒神さんったら。

しかし、安心院さんが消えたあの日に偶然生徒会室を通り掛かった時に、球磨川君が黒神さんに半殺しにされてる現場を見た時はまあ凄かったね。何が凄いかつてお前……その現場の室内だけ、廃屋みたいにもろもろになつて、とつくに意識が飛んでた球磨川君にマウント取つてぶつぶつと何か言いながら殴り続けてる絵を見た時はもう、ね？そのすぐ横で安心院さんは顔が消えた状態で横たわってたし。

まあ、アレ多分偽物だけど。

話しは戻るが、あんなリアル殺人現場を見たらそらアンタ、いくらあの球磨川君と黒神さんに絡みたくは無いとは言え、止めないと思つて思わず止めたけどさ、その後がまた傑作だよな。

何が傑作かつて？ その後いつの間にか意識を取り戻した球磨川君が泣きながら言つたのがさ。

「『僕が悪かつた』『許してめだかちゃん』『二度と人の心は傷付けない』『二度と君達の前に姿を現さない』『だから僕に罪を償う機会をくれ』」

とまあ、なんの法則か知らないけど白っぽい髪になつてる黒神さんに言う球磨川君、いや嘘でしょ？ と思ひながら俺はただ黙つて見ていた。

それから二言三口程あつて、遂に許してしまった黒神さん、そしてボロボロになつた身体で学校から去っていく球磨川君。魂の抜けた様にその場にへたり込む黒神さん。

んで八割空気となつていた俺に、いつの間にか消えていた安心院さ

ん。

「
……」

「
……」

空気がスツゴク重い。

このままほったらかしにして逃げても良いのだが、それはそれで罪悪的な何かがある。

「あゝ」

「
……」

取り敢えず声を出してはみたが無反応。

「布団が吹っ飛んだ」

「
……」

お次は小寒いギャグを言ったがやはり反応が無い。

「あゝ」

「……？」

おお？ 今度はコツチ見たけど、ヤッパリ魂が抜けた感のある表情だな。

「なんだ？」

「いや」

マズッた、反応して貰ったは良いが、何話して良いのかが分からん。第一この子とは仲が良く無いし……ええい！ ままよ！！

「ええつと、部外者だから余り気の利いた言葉は出ないケド、元氣出せよ、なっ？ キミにゃあ友達が居るんだしさ」

「……」

「じゃあ、まあ頑張ってくれ」

結局気の利いた言葉もクソも無くその場を逃げる様にして立ち去った。
こんなだったら止めなけりゃあ良かったよ、と遅すぎる後悔をしなから。

まあ、そんな事があつて約半年以上が経過したが、今では何事も無く過ごしている黒神さん。
だけど、俺からしたらその後が最悪だった。

「フゝ 玉露最高」

「つーかオメーよ？ 授業出なくて良いのか？ 逢えてツッコまなかつたけどよゝ」

玉露に舌鼓をうつてる俺に言う先生。
漫画に視線を集中させながらだが。

「いいよあんなの。出た所でアウェー感が半端無いし」

「ふゝん？」

気の無い返事をする先生。いやいや 안타さ、仮にも教師なんだからそこは授業に出る様に説得した方がいいんじゃないの？ いや、して貰っても困るがね。

「まあ、此処に来て貰うのは、俺の暇潰しとしては良いんだけどもさ、オメーが此処でサボっていると、その金持ちっ娘が来るから困るんだよね」

「なんで？」

「何か苦手なんだよね、あの子」

「ふん？」

先生に苦手なタイプとか居るんかい、結構意外だなと思いながら玉露を啜っていると半ば忘れ去られてる進路相談室の扉が開かれる。

この扉を開ける人物は限られている、先生と俺そして……。

俺と先生は若干引き攣った顔をしながらその開けられた扉を見るとそこには黒神さんが凜として突っ立ってた。

噂をすれば何とやら……まさにそれだな。

「やはり此処に居たか霧生同級生。さあ、私と一緒に来て貰うぞ！ あっ、先生はそのまま結構です」

「ほら零、お前の彼女が来たぞ」

肘で俺を突きつつ小声で言う先生。

「止めてください鳥肌が立つ」

「じゃあ何だ？ 通い妻か？」

「寒気がするから止めるつつてんだろぅがゴラァ！」

これ以上本気で言わせ無い為に半ば本気^{ガチ}でネックブリーカーをする

「ぐえっ！？ や、止める……！ 死ぬ死ぬ……！」

「ハアハア……！」

ワリとマジで絞めたせいかな先生の顔色が土気色に変化してたので、俺は息切れ混じりで解放する。

「ゴホッ！ わ、悪いケド黒神さんや。後でコイツを引っ張って行くから教室へ戻ってくれないか？」

「……。わかりました。おい霧生同級生、絶対に来るのだぞ？」

「……」

未だに顔色が悪い先生に頷き俺に念を押して相談室から退室する黒神さん。

くっ！ 駄目だな、自分でも解る位に顔が引き攣ってる。

「オメーよーそんなにあの金持ちっ娘が嫌いな訳？」

黒神さんがいなくなった後にお茶のおかわりを用意しながら先生からの一言。

「いや、別に嫌いじゃ無いんだけども」

「じゃあなんだよ？」

なんだよ……と言われてもな。主人公だから、とか言え無いしなあ。そもそも主人公だからとか関係無いし。

「……。言いたくなくちゃあ、言わなくても良いけど、あの子って

将来絶対美人になるぜ？」

「だからなんだよ」

「今の内に仲良くなつとも損はしねえって事だよ」

コイツ、事あるごとにそこに結び付けるケド、アンタも嫌いみたいな事言つてたよな？ まあ黒神さんの造りが良いつてのは認めるけど、俺は絶対に「そんな目」では見れない、そもそも趣味じゃ無いし。

「好みじゃ無いんでね。万が一、いや億が一にでも有り得ない」

「じゃあどういったのが好きなワケよ？」

「年上……しかもお姉さんみたいなの？」

「って、何で答えちゃってんだよ俺。」

「好きだねえお前も」

「『小学生が大好き!』何て言うよりかは百倍ましだと思わんかね?」

「違いねえや」

出されたお茶を飲みながら一服する、うむ、美味しいな。

「それ飲んだら授業出るよ? また来られてもアレだし」

「……………わかってらあ」

結局その後教室行き授業に出る事になったのだがクラスの連中の意外そうな視線を一齐に浴びながらの授業になった。

黒神さんは満足そうに、うむうむと頷いてたけど、そこを無視して寝始めたので再び絡まれる事になったのは当然の流れだった。

やはり俺はこの子とは合いそうになさそうだね、そりゃあ俺も一応大人だから表面上普通に会話なりなんなり出来るが、心の底から笑いながの会話は無理だ。

餓鬼だな俺も……。

終

外：「刺さない蜂に勝利（カチ）は無い」（後書き）

“先生”の名前ってどうしようかしら……。

オリジナルキャラ設定（前書き）

先生の設定？

オリジナルキャラ設定

先生（名前不明……というより考えて無い）

年齢：25歳（原作時点で）

身長：180？

体重：81？（若干筋肉質な為）

血液型：AB型

“備考”

主人公が通わされていた中学校にて進路相談員の先生として働いていて、主人公を中学校に通わせた張本人。

生徒に平気仕事押し付けて自分はサボってばかりで、主人公の中では「給料泥棒」レッテルが貼られてる。

軽い性格で、美人を発見したらすぐに声を掛けてナンパをし、その成功率は80%の確率で成功する。（残りの20%は彼氏持ちとかの理由）

その性格のせいで三年間もの間に主人公をチャラ男予備軍へと導いたある意味での師匠なのだが、ナンパな性格の癖に興味は意外にも釣り。

容姿は一応それなりにカッコイイ（ワイルド系）。

ちなみに、主人公がこの世界に飛ばされてから一番絡んでいる人物で、中学校時代はよく“腐”の付く女子から良からぬ噂をされてた

りする程周りから仲の良さを認知されていて、主人公が高校生になった今でも、主人公の家に転がり込んだり遊び歩いたりする。

その他

喧嘩は滅法強普通の人間……と思いきや主人公の能力についてある程度知ってたり、安心院さんを普通に覚えてたりと何かしら謎の多い人物。

オリジナルキャラ設定（後書き）

名前が……出てこない。

17:「1に気をつけ2に構え、3・4が無くて5にパイプ椅子!」(前書き

史上最つ悪! に来たの悪い回です。

鋼……いや超合金の心を持つ勇者様はよろしければどうぞ。

17：「1に気をつけ2に構え、3・4が無くて5にパイプ椅子―！」

突然だが俺は自分の部屋にいる。

しかもあのアパートの部屋では無く、元の世界に住んでいた自分ちの部屋だ。

「うゝん？　俺って死んだんだっけ？」

意識がある前の記憶が目茶苦茶になりつつも視界に映る景色を観察する。机にテレビ、ベッドや本棚……窓から見えるのは約三年ぶりの景色――やはり間違いない、否定しようも無い、此処は俺の部屋でそれが意味することは。

「帰って、来た？」

何のトリックで帰って来たのかは分からない、だけどこの景色は懐かしい感覚がする。

帰ってこれた――その事実を知った時、俺の中で何かが弾け飛んだ。

「我が家よ！　私は還って来たあああ！　ガハハハハハハハ―！」

何かのパクリ臭のする台詞と腹の底から込み上げてくる感情を、押し込む事無く吐き出す。

「ハア、ハア、ハア」

余りに笑い過ぎて体力が大幅に削られたがこうしちゃおれん、マイハニーよすぐに逢いに行くぜ！

「待ってるよ婆ちゃん。すぐに会ってあゝんな事やこゝんな事を…
…ククク、悪いな爺さん今日の俺は野獣と化すぜ！」

そうこれは戦争なのだ！　と意気込んでいるのは良いのだが現実
は残酷である。

「おい、起きろ」

「グヘヘヘ」

「寝ながら気持ち悪い声出してんじゃねえ！」

「あでっ!？」

「起きたか？」

「え？ あれ？ 此処は何処？ 婆ちゃんは！？ マイハニーは！？」

「寝ばけんのか？ 教室に決まってるだろーが、早く行くぞ」

確か、居間に後ろ向きで突っ立ってた婆ちゃんにサイレント飛び付きをした瞬間に、B2爆撃機並の音と衝撃がしたと思ったら目の前に善吉君が居る、て事はだ。

「夢……?」

「何の夢だか知らねえが、お前は今の今まで寝てたぞ？ 気持ち悪い笑い方しながらな」

淡々と事実のご開張をする善吉君。

「そんな馬鹿な……マイハニーに【ピーッ】する事無く現実世界に戻されてしまった」

「何を言っただわかんねーけど、最低だなお前」

ドン引き顔をしている善吉君にちよこつと傷付きながらも、夢オチか……どうせなら最後まで見せてくれよと、欲望全開な俺だった。

「全く何時まで寝てるんだ。もう放課後だぞ？」

「んあああ……」

どうやら放課後までノンストップで爆睡してたらしいな、軽く呆れた表情をする善吉君を尻目に、俺は呑気に欠伸と共に身体を伸ばす。机に長時間突っ伏してたせいか、ゴキゴキと背中関節が鳴る。

「フウ……どーせなら最後まで夢を見てから起きたかったよ」

「知るかなもん」

なんだろう善吉君が冷たい、やはりあの夢の内容が寝ながらにして顔に出てたのが問題だったか。

「ほら行くぞ」

「あ？ 何処に？」

「ボケてんのか？ 生徒会室だよ」

「あゝ」

「放課後になれば生徒会室に行く」というのがもはや日課となっている。今日は、仕事がなけりゃあさつさと帰って夢の続きと洒落込みみたいな。

「ふわぁ……」

善吉君の後ろを欠伸混じりで歩く中、高校生になってから二・三番目に絡んでるのって善吉君だよなあとか思う。

仕事の為とは言え、律儀に俺を起こしてくれるし一緒に仕事をする回数も多い。

「て、聞いているのか？」

「は？」

「だから、今日めだかちゃんが遅れて来るって話だよ」

「え？ ああそうなんだ……」

どうやら一人で考え込んでいた間、ずっと俺に話し掛けてたらしいな。
傍から見たら“話しているのにシカトこいてる”って絵だつたろうね。

「お前本当に大丈夫か？ 具合でも悪いんじゃない」

「いや大丈夫。ちょっと考え事してただけだよ」

「考え事って、さっきの夢と関係あんのか？」

「え？ あー……まあな」

まさか「君の事考えてました」なんて言って気持ち悪い解釈されたら堪ったもんじゃ無いしな、ここはテキトーに言っとくのが無難さ。

「何の夢見てたんだ？ あん時すつげえ危ない奴みたいな顔してた

ぜ？ クラスの奴ら及び教師までが引きまくってたぞ？」

マジか……。そんなに変態な顔^{ツラ}だったのか、恥ずかしいな。

「まあある意味、酒池肉林を越えた夢だったかな」

あのタイミングで善吉君が起こさなければ、と思うとかなり悔やまれる。

「相当スゲエ夢だったんだな」

そう言って再び前を歩く善吉君。

「それにしてもよお、なんで俺達が最初に入ったってのに後から入っていく奴らの方が階級が高いんだろっな？」

「さあ？」

それから、生徒会室に行く間ずっと善吉君の愚痴っぽいのを聞いている。どうやら後から入ってくる奴らの階級が上なのが気に入らないらしい。

平和だな……。

「でもお前の場合は微妙に違うんだっけか？」

「いや、俺の場合は緊急事態にならないと意味を成さない役職よ？
それにめだかちゃんが生徒会長やってて緊急事態に陥る事なんて
あると思う？」

「今の所想像出来ねえな」

「だろ？」

多分その内緊急事態になるとは思うけど、だからって俺が何かする絵が浮かばないな。

それにしても、何でめだか君は俺なんかを取り込んだんだろうなあ
とか思っていたら生徒会室に到着、先にいた善吉君が扉を開けると。

「……あ」

何か固まってる善吉君。一体どうした、デケエ蛾でもいたか？
と思いつながらヒョイと中を覗くと。

「……」

制服を脱いでいる喜界島さんと目が合い、気の利かない台詞が言え無い俺は。

「露出狂その3つてか？」

全てを台無しにする言葉が思わず口から出てしまった。
後に「キミは、もう少しデリカシーのある言葉を選んだ方がいいよ」と言われるのは別の話だ。

EP17:Start

「お金！ お金払って！」

善吉君がボロボロにされてからの喜界島さんの第一声がそれだった。ついでに俺は善吉君以上にボコられたりする、机の角で殴られたりパイプ椅子で百叩きにされたりとか、普通だったら死んでるぜ？

「ば？ 何言つてんだおゝ前？」

「痛つつつつ……鼻血が止まらない」

全身ズタボロの善吉君は呂律まで目茶苦茶になっている、相当殴られたらしいなちよこつと善吉君に同情してしまう。

ちなみに鼻血が止まらないってのは決して興奮してる訳じゃあ無い、鼻を思い切り殴られた為だ。

「アタシの裸見たでしょ？ だからお金払って！」

「……これだけ人をボロボロにしないと更に金払えってか？ いい性格してんな、え？」

「裸ってなあ……ブフッ！」

「何ですか？」

思わず吹き出してしまった俺に反応した喜界島さんが何故か敬語で俺を睨み付ける。

「だつてなあ？」

そんな痛くも痒くも無い睨みを軽く無視しながら視線を善吉君に向けながら話を振る。

「俺は言わんぞ？」

んだよ俺が代わりに言えつてか？　しょーがない。

「えーっとさあ、取り敢えず何で君の半裸を見たからって金払うワケ？　ここは風俗ですか？　あ、キヤバレーでもやってんスか？　だったらポールダンスでもやってくださいよ。え、出来ない？　じやあ金なんか払えまへんなあお嬢ちゃんよ？　大体ねえ餓鬼の肢体見たからって興奮する程俺は餓えてませんし、もしかしてそう思われてると思うっちゃってる？　うわあーお、勘違いちゃん&自意識かじよー！！」

ちよっぴりハツチャケながら言っちゃったけど、何とか思いの丈をぶつけてやったぜ。

「お、おい零！　ちよつと言い過ぎじゃ」

「あん？　良いんだよ、ハッキリと言わないとこういったガキはドンドン付け上がるからね。じゃないと近い将来、身体に触れられただけで『この人痴漢ですっ！』とか言うぞ？　全くこれだからガキは……」

「お、おい！！」

何か知らないケド冷や汗混じりで俺を止めようとする善吉君、何だよ自分だって言いたげな顔だった癖によ。

「んだよ……！俺が言わなかったら善吉君だって似た様な事言ってた癖によ」

「そ、そうじゃ無くて！」

「何だよ？」

「ほ、ホラ」

と言いながら顎で差した場所を見ると、喜界島さんが爆発まで5秒前な状態だった。

「うつ……」

「言い過ぎだ。泣きそうだぞ？」

確かに目を潤ませているが……。

「へー なんスか、今度は泣いちゃいますか？ 泣けば勝てるとか思っちゃってますか？ ごめんなさいねえ、俺って土下座されても何も感じ無いタイプなんですよ、ハイ残念！」

更に追撃を試みた、と言うより泣かせたくなった。

「ば、馬鹿！」

「うわ〜ん!!」

おっしゃあ！ 遂に泣き出した！！ と内心喜んだのもつかの間、なんと喜界島さんは泣きながら近くにあったパイプ椅子で殴り掛かって来る。

「あぶなっ!?!」

「ほら見る！ お前のせいだぞ!?!」

横ステップでパイプ椅子攻撃を避けつつ善吉君に怒られてしまう。

「何だこの子メンタル弱すぎっしょ!?!」

「あんだけボロクソに言われたら誰でもああなるわ！」

確かに自分で言っというたが「無いわ」とは思ったが、理性が吹っ飛んでるお陰か、関係無い善吉君まで攻撃されてる。仕方ないな。

「アチヨゝ！」

ちよこつとヒートな状態で、喜界島さんが振り下ろそうとしたパイプ椅子を蹴り飛ばす。

「きやつ！？」

「今だ、無効化ダイブ！」

そのまま喜界島さんに飛び付いて無力化し汗を拭う、汗なんかいぢやいないケド。

「痛いだけは勘弁だよ」

「あ、危なかった」

「……クسن」

アレだな、余計な事なんか言わなけりゃよかった……あの程度じゃ痛いだけで死ね無いだろうし、何より掃除が大変そうだぜ。

散らかった生徒会室を片付け終わった後、俺達はそれぞれ財布を取り出していた。

「ほら……750円」

「わーい、ありがとうー!!」

善吉君に渡された750円に目を輝かせる喜界島さん、アレとは言え安いな。

「ホントに払うのかよ」

「だって、見たのは事実だし……」

「律儀なこつて。あん？ 何だその手は？」

「霧生くんも、お金……！」

ああ、善吉君だけで満足して忘れて欲しかったが覚えてたか……。

「分かったよ。冷静に考えりゃあ95%俺が悪いし、ゴメンね……
って許しちゃくれんか」

「い、いえ。あたしもすいません」

ぺこりと頭を下げる喜界島さん、また口調がおかしくなってるな。

「口調」

「え？」

「こんな状況で言うのもアレだけど、そのよそよそしい口調は止めてくれないか？ 背中が痒くなる」

さっきから処か水中運動会が終わった辺りから俺に対する口調がおかしい、それが何と無く嫌だ。

「でも……」

「でももへちマも無い。止めてくれないなら金は払わんぞ？」

「えっ！？ わかりまし——わかった、これで良い？」

「……現金な奴」

金を払わないと言った瞬間に口調を普通にしゃがったな。

「よしそれでいい。えゝつと財布の中身はゝ、チツ、小銭が無い……しょうがねえな、ホレ！」

「えっ！？」

財布から諭吉さんを1人取り出して喜界島さんに渡す、対する喜界島さんはビックリ顔だ。

「お前……金額デカク無いか？」

「札しか無かったし、それに俺も火が点いて余計な事言っちゃったし？　これから喜界島さんも一緒に働くのにギスギスした感じは嫌だしね……ってそうしたのは俺だけど、さ」

「で、でも……」

「あ？　今になって何ビビってるんだよ？」

「い、いやそういう訳じゃあ……」

「だったらその金は募金でもしてくれ。とにかく、ごめんなさい」

ぺこりと頭を下げながら謝罪の言葉を述べる、でもこれって全部自業自得なんだよな。

「うん、じゃあ貰うよ……アリガト」

そう言いながら綺麗に札を折って蝦蟇口財布に入れる。

「うん、じゃあ……どうしよっ。」

「急にオレに振るなよ」

「つーか阿久根先輩どうしたよ？」

「オレが知る訳無いだろうよ」

「そりやそうだ……会計さんの仕事もなあ？ こないだ全部片付け
ちまったしなあ」

「そうなの？」

「うん、そうなの」

手持無沙汰だったので、キョトンとする喜界島さんの頭をポンポン
と叩く、おっ！ 髪がサラサラだ。

「かと言って勝手に帰ると後々面倒な事になるからなあ。とにかく
めだかちゃんが来るまで待機かな」

「だな。じゃあ漫画でも読んでよつと」

そう言って最初から用意してた漫画を机に拡げて読み始める善吉君。

さて、俺は何をしようか。

「……」

「あ？ どーしたよ喜界島さん」

急に黙りだして、何だ？ でも最初からこんなだったか？

「あの……頭」

「頭？ 俺の頭に何かくっついてる？」

「ゴミでも引っ付いてるのだろうかと思い、自分の髪を隈なく触る。

「そーじゃ無くて、アタシの頭」

「は？」

「霧生クンの手がアタシの頭に……」

そう言われてフト気付く、先程からずっと喜界島さんの頭をポンポンと叩いていたんだっとな。

うん、俺の図体が無駄にデカイから、喜界島さんの頭が調度良いポジションなんだよなあ。

「あゝ フリッ！ ん……何か調度良い感じだったからさあ？」

「いや、べつに良いんだケドさ」

と、冷静に言ってるつもりなんだろうけど、目線を逸らしてオマケに若干顔が赤い……ああ、でもこれも元からか？ よし、試してみつか？

「もしかして……照れてる？」

「うっ！ ち、違う」

お？ あからさまに動揺してるな？ やっべ、面白くなってきたっ！

「へえ？」

「な、なに？」

ジーツと喜界島さんを見つめる。
うむ、よくよく見ると……。

「喜界島さんってさあ？ 結構カワイイよね」

「はい！？」

「ぶっ！？」

素っ頓狂な返事をする喜界島さんに吹き出す様なリアクションをする善吉君。

てか聞いてたんかい。

「な、ななな何言ってたんだよお前！？」

壊れたCDみたいな口調で俺に迫る善吉君、ちょっと面白い。

「いや善吉君だってそう思っつしょ、実際この子かなりレベル高いと思うんだけど」

「お、お前、高校に上がってから随分変わったよな」

「今更だな、まあ中坊の頃は色々あったんだよ」

実際俺が変わったのは中二くらいだったかな。

「て、今はそんな話しじゃ無いんだよ。喜界島さんだよ喜界島さん……って喜界島さん、茹蛸になって固まってらあ」

善吉君に気を反らされたお陰で喜界島さんがフリーズしちゃったよ。

「おーい、戻ってこーい」

ペチペチと頬を軽く叩いてこちらの世界へ意識を還さないと、何時まで経っても話しが進まんぜ。からかい過ぎたのもアレけども。

「うつ……！ あたしは一体？」

「おお、戻って来たけど、からかうのは止めとくかな。やっぱこの子、見た通りに免疫がなさすぎるわ」

「そうした方が良い。お前、何時か刺されるぞ」

「はっ、刺殺じゃ俺は殺れないな」

「ワリとマジな気がするから恐ろしい……」

ワリとじゃ無くて本当なだけだね。

刺し傷が短時間で塞がる様は結構ショッキング映像なんだぞ。

「その話しは置いて、マジで何しよ？」

「うん……」

椅子にも座らずに三人で唸ってる絵面つてのは中々にシユールだな。そんな横道に逸れた事を考えていると、勢い良く入口の扉が開いて誰かが中に入ってくる。

「ハロー霧生君！ 暇だつて念話が届いたから飛んで来たよーん！」

何やらすっ惚けた事を言いながら入って来たのは不知火さんだった。

「何言つてんの？ 気持ち悪いよ」

「うわゝお、いきなりの毒舌せんきゅー！」

えっ？　ちょっとおかしくね？

「何この子、酒でもかっくらったのか？　ちょっと怖いんだけど」

「うん、若干変だな」

「てゆーか何で普通に生徒会室に出入りしてんの？」

確かに喜界島さんの言う通りだが、そこは別に突っ込むところちゃうぞ？

「ちよいちよい不知火さんよ、何しに来たんだよ？」

「ん？　べつつに？　暇だから遊びに来た……おやおや、これは喜界島選手じゃありませんか！」

「うつ！」

急に話しを振られたせいか若干顔が引き攣ってるぞ喜界島さん。

「あたし不知火、よろしくね〜！」

「よ、よろしく……」

引き攣った顔のまんま挨拶する喜界島さんに対して不知火さんは「見せたいもんがあるんだ」とか言って例の百合写真のパネルを掲げる。

それを見た喜界島さんが最上級にテンパる様を楽しんでる不知火さんに善吉君のメスが入り、程なくして鎮静化した。

その後漸くめだか君が来たのはいいが、ヤッパリ今日は仕事が無いらしくその日は解散、暇になってしまった。

出来たらあの夢の続きを……………見れる訳無いか。

続く

17：「1に気をつけ2に構え、3・4が無くて5にパイプ椅子！」（後書き

フラグじゃ無いからね！？

……多分。

17・5：「お前のカーチャンでべ〜そ〜！」ってけなしてるつもりなんだぞ

18話にいく前の小話的なアレですが、クオリティーは潰れたトマト並に最低です。

我慢強い方はどうぞ。

17・5：「お前のカーチャンでべくそく！」ってけなしてるつもりなんだぞ
結局早めに帰る事になった俺こと霧生零は、特に面白い事も無く家の前に到着し、ポストの中をチェックするが何も無い。

「今日の夕飯何にしようかしら」

階段を登りながらもはや日課と化している夕飯のメニューを考える。
あれ程さつさと帰るってキメていたのに……順応って怖いわ。

「……あら？」

鼻歌交じりで家のドアノブを回すと、鍵が開いていた。
行く前に鍵はちゃんと閉めたよな？

「……まさか」

その瞬間頭に「空き巣」という単語が浮かんだ俺は、咄嗟に折りたたみ傘を伸ばして武器へと変化させ部屋に突入する。

「御用だ！！」

土足のまま自分の部屋に突入したが。

「おゝ零！ 先にやってるぜ」

そこに居たのはビール缶片手に挨拶する元・恩師だった。

EP18 Start

靴を玄関に置いて、制服から部屋着へと着替えた俺は、目の前で人が買い込んでいたビールやつまみやらを飲み食いする元・恩師に聞いた。

「で？ 何でアンタがいんだよ？」

「あゝ？ 何時も通りガツコの仕事も無くて早めにアガったからオメーんちに泊まりに来た！ おつ、このつまみお前が作ったのか？ 中々美味いぞ、褒めてつかわす」

このチンピラ先生の言った通り、仕事が無くて暇だから俺の家に来たらしい、しかも人が作り置きして置いた食料を貪りながら。

「……ハア。来るなら来るで連絡位してくれよな」

「悪いワリイ、突然思いついた事だったし、オメーから合鍵貰ったから連絡不要かと思ってさ」

「それでも連絡しろや」

「だから謝ってんじゃねえかよ」

「ビール缶片手にエビス顔で言われても説得力のカケラもねえよ」

「アッハハハ！ 違いねえや！」

豪快に笑い飛ばす辺り、反省のはの字も無いだろうなこのチンピラ教師は。まあ、慣れた感があるから諦めてるがね。

「とにかくアレだ。お前も飲めよ、なっ！」

「ああ、飲むケドよ。後ろにあるビールの空段ボール3つ分の説明は？」

そつ、先生の後ろに無造作に放置されているビールの空段ボールが

気になってしょうがない。

俺の記憶が正しければ、アレは俺が買い置きしたビールだったと思うんですがね。

「ん、これ？ 昼から家に居て暇だったんでな、飲んでたらいつの間にかこうなってた！」

と、しつこい様だが全く反省していない顔で言われた。

此処までくると逆に清々しくて怒る気にもならないながら一本目のビールを開けて飲む。

しかも昼間から来たって、アンタそりゃ「仕事が早く終わったから来た」じゃ無くて「怠いんでサボりました」ってのが正解なんじゃ無いか？

（約1時間後）

作り置きしていた料理はほぼ無くなってたが、材料はあったので有り合わせで作った料理をビールないし焼酎片手に二人で談笑していた。

「ングング……相変わらずお前の作る料理は美味しいな」

「まぐまぐ……そらどーも」

適当に味付けしたもんが褒められるとは思って無かったので、ちょっぴり嬉しい。

「で？ 学校はどーよ、楽しんでるか？」

「ん……普通かな」

今まで女の人の話しをしたのに何故か急に学校の話題に変わってた。

どーよと聞かれても別に普通な為に面白い回答が出来なかったがね。

「ふーん？ 金持ちっ娘や金髪不良君とか、金持ち娘にくつついてた男の子とかは元気なの？」

「元気なんじゃねえの？」

“ソルティードック”を飲みつつ先生の質問に淡々と答える、本人達の体調なんぞ俺が知る訳無い。

「『じゃねえの？』ってお前……皆同じ生徒会じゃねえのかよ」

「あの子等とは“持ちつ持たれず”の関係みたいなもんだからな」

氷が入ったグラスを回しながら答える。

現段階ではあの子等に合わせてはいるが、時が来たらどうなるか分からない。「目的の為」とか言って生徒会を抜けるかもしれないし。

「成る程ねえ。相変わらずオメーも大変だねえ、能力スキルだったかに振り回されてるなんてさ」

「別に振り回されては……」

「振り回されてんだろ？ その能力スキルとやらのせいで、オメエは簡単には死ね無い……それじゃあ困るんだろ？」

「……」

先生の言う通りだ。

顔ツラすら見た事も無く、恐らく何処かで俺を見てほくそ笑んでる神とやらが埋め込んでくれた力のお陰で、元の世界に帰る事が出来ない。それどころか、失敗したら永遠に生かされる羽目になるとか『何処の罰ゲーム？』と泣きたくなる事をいつの間にか強要されて早三年

だ。

しかもタイムオーバーになった瞬間、完全にこの世界の住人バケモノになっ
てしまう、そのタイムリミットが約二年半なのだが、不思議と焦り
とかの感情が湧いて来ない。“この世界に俺が順応し始めてしまっ
たのか”それとも“帰れ無くてもいい”と心の何処かで思っ
てしまっているのか……俺自身にも分からない。

「おい、何シブイ顔して長考タイムに入ってたんだ？」

「ん？」

一人で考えていたそぶりをしていた俺に不信に思った先生が俺の顔
を覗き込む様にして俺に話し掛けていた。

「あー……くだらねえ事考えてたわ、悪いな」

先生の顔を見ると、能力だとか何だとかを一々真面目に考えるのが
馬鹿らしく思える。

「オレから振った話だから別に良いけどよ、まあアレだこの話し
止めよう、酒がまずくなるわ」

「それは俺も激しく同意するわ」

それから俺の能力の話から、何故か女の子の話にシフトチェンジした。

しかも、俺が今通ってる学校の子についてアレコレと、だ。

「で？ オレが紹介した箱庭学園はどうだった？ 言った通り“猛者”が多いだろ？」

「あの時言ってた猛者って、ソッチの事も含まれてたの……」

「たりめーよ！ 野郎の話は二割程度だよ、で？ どうだった？」

そんな興奮した顔して机から身を乗り出すみたいにして聞くなよな、いい年した大人が。

「まあ、確かにレベルが高いよ。高いんだけど、皆ガードが固いっぼいな」

「へえ〜？ 何人か声掛けしたんだ？」

「うん、殆どから当たり障り無い断られ方されたケドね」

一応生徒会の目や風紀委員の目やらを盗んで「おっ！ 好みだ」って思った女の子に声掛けしてはみたが、どれもこれも「何コイツ？」みたいな顔された揚句逃げられるのだ。
脈アリもあっただけだね。

「流石にエリート共が通う学校だな」

ちよっぴり割高の酒“山崎25年”をグラスに注ぎながら何処か羨ましそうな声色で話す先生、と思いきやハツとした様に顔を上げて俺の顔を見る。

「殆ど……て事は何人が脈アリがいたのか？」

「え？ まあ……」

しまった……余計な事言っじゃ無かった。

「マジ!？」

興奮した面持ちで言うて来る先生に「お前は中学生か!」と軽く引きつつも答えようとしたが、よくよく考えてみると、確かに脈アリとは言ったが、あの人の場合は普段から飄々としてるからよく分からないな。

まあ、言うけど。

「ん〜と、脈アリかと言えば首を傾げざるえ無いんだけど」

「うんうん！ 早く早く！」

何だこの“親におもちゃを買って貰えるか貰え無いかの駆け引きでギリギリ勝ちそう”みたいな顔は。

「一人いた」

そう言った瞬間の先生の顔は死ぬ程憎たらしかったりもした。

「マジかよ……へえ？お前の好みに合う子がいたんだね？」

「なんだよその言い方」

「だってよー年上好きだっけ？ お前の好みって」

「まあ」

こればかりは譲れませんね。

「更に言えば性格キャラやら何やらが一つでも合致しなければ意味が無いとか豪語してたお前が、ねえ？」

なんだろ、ニヤつく先生見るとムカツとするんですけど。

「しょーがないじゃ無い！ 最初に見た瞬間、俺の中へ直球200？ストレートで入って来たんだもの！」

机をバンバンと叩きながら半ばヤケクソ気味で言う、あの人は俺が今まで会った中でも二番目ぐらいに俺のハートに電流走ったからね……異世界人だけでも。

「へえ？ そこまで言わせる子なら一度会ってみたいなあ。ね、一回会わせてよ？」

「やだ！」

「な、なんで!？」

「アンタ絶対に余計な事吐かすから」

100%……いや120%の確率であの人に余計な事を言いそうだ、主に俺の恥ずかしい過去とか平気でバラしそうだ。それだけは駄目だ。

「チツ！ まあいい、絶対何時か見てやるから」

「仕事しろよ！」

「そんな事より、お前があわてふためく顔^{ツラ}見た方がよっぽど面白いね、クケケケ！！」

「ホントに最低だなアンタ！？」

悪役顔全開で笑う目の前の元・恩師。
ホントになんでコイツは進路相談員なんてやってんだろつか、永遠に謎だな、と思いつつ酒を口に含んだ瞬間。

『面白そうな話しだね、僕も混ぜてよ』

突如俺の背後から声がして。

「うげ！ 重っ！？」

急に背中にGが掛かる。

「安心院さん？　なんだキミも来たんだ？」

そんな俺を余所に、先生は慣れた感じで恐らく俺の背中乗つかかっている安心院さんに話し掛ける。ヤバイ、体勢が体勢だから地味にキツイ。

「久しぶりだね、先生。なんか二人して面白そうな話ししてたから来ちゃった」

そうとは知らずにヘラヘラした表情で先生と話す安心院さん。ヤバイって、早くどいてくれないとヤバイって！

「オレの家じゃねーからそれは良いんだが、取り敢えず下敷きにしているこの部屋の主の許可を取った方がいいぞ？」

「ぐえー！」

その通りだこの馬鹿野郎！！……野郎じゃ無いか、でも性別が不明な点がある可能性もあるんだよなこの人。

そこは置いといてとにかく早く退けと叫びたかったのだが、潰れた蛙のような言葉しか発せられない。

「え？ あっゴメンゴメン、大丈夫零君？」

対して、某偽りの救世主の肩書を持つキャラの如く「ん？ 間違ってたかな？」みたいな感じで悪びれる様子も無く言う安心院さん。
一瞬本気で殺つてやろうかと思つてしまったのは仕方がないのかもしれない。

「あ、謝る暇があつたら早く退け——退いてください、苦しい」

真面目に退いて欲しかったので、俺の中では割りとへりだくつた感じで言つと、背中に掛かつてた負荷が無くなり肺に酸素が供給される。

だが、それまで呼吸すらままらない状態で急に酸素が供給されたのでむせる。

「げほっ！ げほっ！ アフリカ象並にクツツツソ重たかつたあ！！
絶対太つたるアンタ！？」

開口一番にその言葉がマズかったのか、後頭部に鈍い衝撃と痛みが走る。そう、ひっぱたかれたのだ、安心院さんに。
そついった事は気にしないタイプだと思つてた俺の誤算だ。

「零よ……そりゃねえよ」

先生も呆れ顔だったのが無性に腹が立ったので言い返す。

「無くないから！ 何なのこの人！？ 暫く姿を消してくれたお陰でパラダイス気分だったのをいきなり現れたと思ったら人の背中に乗っかってきやがつてよお！ しかも重いし、何気に俺を名前で呼んでるし」

安心院さんに指差しながら怒鳴り散らす。

先生も若干ビクリ顔だが更に怒鳴る。

主に住居不法侵入の件についてあらかた言っただけ。

「ハアハアハア……」

「気は済んだか？」

「若干」

息を調えながら答える。怒鳴りまくったお陰か、若干スッキリした。

「というのが零の言い分なんだけど、安心院さんからは何か無い？」

そう先生が聞くと、安心院さんは半笑いの表情を変える事無く言う。

「半泣きの表情で怒鳴る零君が可愛かったよ」

あ、あれだけ言われて感想がそれかよ！？
しかも謝る気無しですか！？

「ククツ……！　だ、そうだが？」

「Kill You For Me!（頼むから俺の為に死んでくれや!）」

そう言いながら近くにあったビール瓶で安心院さんに襲い掛かろうとしたが、直ぐさま先生に止められた。
先生いわく「勿体ないから殺すな」だと。
一体何が勿体ないだよ。

それからのは紆余曲折的な何かがあって三人……特に俺と先生でギヤース力騒ぐのだった。

結局安心院さんは、何をしに来たのかが分からずじまいだった。

終

17・5：「お前のカーチャンでべ〜そ〜！」ってけなしてるつもりなんだぞ

先生の名前はもはや考え無くてもよくね？　と思い始めてまいりました。

18：「ルールと襖と障子は破る為にあるのだー！」（前書き）

あくまでも寒いギャグ97%仕様でございます。

てか、話が進むにつれてクオリティーが低下する……。

18：「ルールと襖と障子は破る為にあるのだ!!」

箱庭学園風紀委員会、ルールを破った生徒を容赦無く取り締まる、通称“学園警察”又は“掟破りの処刑部隊”（主人公が勝手に命名）。

これはその風紀委員会と生徒会と主人公のしょーもない戦いの記録である。

「校―則違反です!!」

登校の時間帯に響く声。彼女の名は鬼瀬針音、風紀委員会の一人である。今日から学園風紀徹底週間とやらで、正門前にて制服を改造したり崩れた着方をしている連中を取り締まっていたりするのだが。

「だって……」

「なあ？」

「うん、そんな事言われてもなあ？」

言われてる本人達は、余り反省する様子が無かったりする。

「なんですかその態度は！ 口答えは許しませんよ！！」

反省の色が無い態度の生徒達に怒鳴る鬼瀬だが、一人の生徒が反論する。

「アンタの言う通りかもしれないけど、だったらあいつらはどんなんだ？」

「あいつらあ？」

生徒が指差した所を見ると。

「あゝ 頭力チ割れるの如くイテェよ」

「顔色が悪いが大丈夫か？」

「フム、本当に具合が悪そうだな？」

「一体何をしたんだよキミは」

「得もしないのに馬鹿な意地を張った成れの果てって所かな……」

「意地？」

「うん、良い子の皆は知らない方が良いかもね……」

（（（一体何が……？）））

コメカミを抑えながら何故かジャージ姿で歩く主人公に次々と質問をし更に言えば、個性的な制服の着方をする生徒会の面々だった。それを見て口から魂が引っこ抜けそうな顔をする鬼瀬。その隙に逃げる校則違反者達。

そしてこれが、長い様で短い戦いへの狼煙となる事になるとはこの時は思いもしなかった。

EP18：Start

頭がイテエ……。昨日アレから調子こいて飲み過ぎたのがいけなかったのか。

てか、なんでか半不死身状態な俺だつてのに風邪やら二日酔いやらにはなるんだよなこ身体……。なるだけで致死量には至らないのがネツクだがね。あゝあ、俺も学校休めば良かったなあ、今頃あの二人はグース力寝てるだろうし。

「大丈夫？ お水飲む？」

ソファでくたばってる俺に水を片手に声を掛けてくれたのは喜界島さん。何でか知らないが、昨日のアレから若干仲良しになれた。

「おー大丈夫」

手渡された水をグビグビと飲む。

「プハア……。アリガト喜界島さん」

お礼を言いつつ、空になったペットボトルをごみ箱にス〇ムダンクする。

「どーいたしまして」

若干微笑んでる喜界島さんを見ながら、よく此处まで仲良くなれたよなあ……と思う。

だってそうだろ？ まともに会話したのが昨日で、しかも内容が余り良いものでは無かったし。

まあ今はそんな事より、この頭痛を何とかしなければね。

「フウ、こうしてねっころがってると大分楽だな……首が痛いけど」

ソファの手摺りが固いので首を痛める気があるが、贅沢は言え無い。

「零よ、そんなに辛ければ早退を許可するが？」

何時に無く優しいめだか君。

だけど『単なる二日酔いなんですよ』なんて言ったら怒られるなこれ。

もしかしたら気付いてる上で言ってくれてるのかも知れないがね。

「大丈夫心配してくれてサンキューな……。だけど余り動きたく無いつてのが本音なんだよね、帰るのさえ億劫なもんでさ」

「そうか……なら今日だけ特別に寝ているのを許可してやろう」

「ああ、助かるぜ」

めだか君から許可も頂いた事だし、お言葉に甘えて睡眠モードに移行……する前に。

「猫美さん暇かなあ？」

「急になんだ？」

猫美さんの名前に反応する阿久根君。

「うん、暇なら生徒会室に来て貰ってひざ枕して貰おうかって」

弱気な状態だと人肌恋しいってのは結構マジだという事が、今分かった。猫美さんに会いたくてしょうがない。

だが、そんな俺の寂しい気持ちを呆れ顔で見てる善吉君と阿久根君。

「あのなあ、んな事で一々先輩を呼び出すなよなあ？」

「失礼な、俺はこの上なく真剣なんだがね」

んな事って、本当に失礼だぞ善吉君。

「それに猫美さんなら今日いないぞ？」

「え、何ですか!？」

思わず飛び起きてしまったのはしょうがないと思う。
てか何でキミが知ってたんだ？ 事と次第によっては撲殺刑に……。

「さっき正門から帰って行くのが見えた」

おーまいが、納得しました。

それならしょうがないなこの固い枕で我慢……いや待て、猫美さんが無理なら他の人に頼めば良くね？ って事で生徒会のメンバーを眺めてから、枕代わりを探してみたのだが5秒弱で「ありえません」という結論に達したので首を痛めるのを覚悟で睡眠モードに入っただけなのに、わずか30分で現実世界に引き戻されるのだった。

「一体！ 何を考えているのですか、あなたがたは!!」

キーキーと猿みたいな声のお陰で、折角寝付いたと思った矢先に起こされてしまい何事かとソファ身を起こす。

「ウルセエなあ」

「あ、霧生くん起きたんだ？」

何故かソファの隣でそろばんを弾いていた喜界島さんが俺の顔を覗く。
辺りを見渡すと見られない女子生徒が一人、涼しい顔して紅茶を飲んで
いるめだか君に机をバンバン叩きながらなにやら怒鳴ってる。

「あー喜界島さん？ 一体全体何事？」

今起きてる状況が全く掴め無いので喜界島さんにヘルプをかける。

「実は……」

喜界島さんの説明に耳を傾ける。

説明によると、風紀委員に所属している鬼瀬とかいうちびっこが俺達……いやめだか君と阿久根君と善吉君の制服の着用が校則違反とかで物申しに来たとか。

「まずは人吉善吉君！ どうして制服の下にジャージを着ているのですか！ まさかオシャレのつもりじゃありませんよね！？ 次に阿久根高貴さん！ 貴方が例えエルヴィス？ プレスリーのファンだとしてもその大胆さはありえませんか！」

「いやその……そろそろ時代が俺に追いついて来たかなと」

「真正面から言われた……」

制服の下にジャージを着込むのがどうやら駄目らしい、しかもオシヤレじゃ無いとまで言われてるが少なく共俺は良いと思ってるから安心しろ善吉君。

てか、阿久根君に至っては疑問では無くもはや否定だ。

「それと……！」

そう言いながらソファに足を組んで座ってる俺とその隣に座って三人のやり取りを眺めていた喜界島さんに予先が向く。

「あ？」

「何？」

怒りで興奮した様子で睨みつけてくるちびっ子……もとい鬼瀬さん。対して喜界島さんは真逆と言って良いほどの無表情で聞き返し俺はといえば、自分で勝手に煎れた緑茶を啜りながら何時もの癖で睨み返す。

「なぐにを『自分は関係無い』って顔してるんですか！ 喜界島もがなさん、そして史上最悪超問題児である霧生零君！！」

ツカツカとこちらに歩み寄りながら怒涛のラッシュを繰り出す鬼瀬さん。

「あたし関係ないよね？ 制服改造なんてしてないし、スカートの丈だって普通だし」

「右に同じ、俺も普通に着ているつもりなんだが？」

着崩した制服の着方は中学生で卒業したし。

「ほほう、ならこれでも同じ事が言えますか！？」

そう言って手錠を手に嵌めてメリケン代わりとした拳をを振るうと喜界島さんの制服が……。

「水着？」

誰が言ったか分からないが、どうやら喜界島さんは制服の下に水着を着込んでたらしい。

この子も若干変わり者だったのか。

「ほおらごらんなさい！ 貴女が制服の下に水着を着込んでいる事位この私に実装されている“風紀眼”でお見通しなんですよ！！」

顔が干上がるんじゃないかと思う位真つ赤な喜界島さんを余所に、もの凄いでやってたり顔の鬼瀬さん。

なんだよ風紀眼ってよ、写○眼のパクリか？

「そして霧生君は！」

おう次は俺か？ と言ってもここ最近が目立った事はしちやいねえがね。

「取り敢えず今までの極悪非道っぷりを上から下まで言っても良いのですがそれは保留にして、まずなんで貴方はジャージ姿なんですか？」

確かに今の俺の姿はジャージだけど、それについてはちゃんと説明してやるにしても、何だよ極悪非道って。

俺そこまで人様に迷惑掛けてないんだけれども。

「いやさ、ジャージの格好については制服がねえんですよ」

「そんな馬鹿な話がありますか！」

「嘘だ！」と言わんばかりの表情をしながら俺の足を踏む勢いで接近して来る鬼瀬さん。
なんだろ……全然嬉しいとかって感情が湧いて来ないね。

「いやさ……盗^ギられたんだよ制服」

「ぎら？　なんですって？」

しまった、殆ど先生との間にしか伝わらない単語で喋っちまった。

「だから盗まれたんだよ」

今度はちゃんと盗まれたと説明したら、一瞬惚けた表情になる鬼瀬さん。まあそんな顔になるのも分かるケド事実なんだよ。

「そうだったのか。知らなかったぞ、何故言わんのだ？」

「いや、別に言う程のもんでも無いかなってさ」

めだか君の質問を返しつつ緑茶を啜ると「確かに」と阿久根君と善吉君の呟きが聞こえる。

盗^キった犯人も知ってるしそんなしょうもない事をわざわざ他人に言う程お喋りじゃない。

「の割には随分と冷静ですね？ 本当に盗まれたんですか？」

胡散臭さそうな目で俺を見て来る鬼瀬さん。

チツ……。こんなならすぐにも制服を取り返しとくんだったな。あんにやろつ、次会った時はひざカックンしてやる。

「まあ、犯人は分かってるし、その本人いわく「借りただけ」だと言うつもりだろうから別にね。あ、ちなみにジャージ姿^{アンタラ}については担任にちゃんと許可貰ってるから、風紀委員に取り締まられる言われは無いよ？」

「ぐっ！　そうですか……」

何故だか凄い残念そうな顔をする鬼瀬さん、もしかしてこいつ、適当な理由付けて俺を引っ張るつもりだったのか？　残念だったね君の思い通りにはならんよ。

「まあ、そういう訳だから無事解決しましたって事でハイさよなら……」

「なりません！！　まだ貴方には別の罪がつ……！！」

チツ！　流れで帰って貰おうとしたのによ、もう君には飽きたから帰ってもらって構わないんだけど。

そんな俺の考えを尻目にぎゃあぎゃああと俺が入学してから“やらかした”犯罪歴をマシングンの如くぶつけて来る。
いいや、シカトだシカト。

そんな過去の犯罪歴（風紀的な）なんか言われても正直今更感が否めない俺としては痛くも痒くも無いし、そんな事より別の事が気になるのでその気になる本人に聞いてみましょう。

「鬼瀬さんはそこで適当に言わせれば良いとして、喜界島さんって“もがな”って名前だったんだ？」

「良く無い！　話を聞いてください！！」

阿久根君と善吉君がそんなやり取りを冷や汗混じりで見てるのも俺には関係無いし。

何やら横で眼鏡チビが突っ込んでる気がするがそこはスルーだ。
俺としては喜界島さんのほうが気になるし。

「う、うん……そうだけと言わなかったっけ？」

「聞いてるんですry——」

「うん。めだかちゃんも“喜界島会計”って呼んでたからね。なぐめだかちゃん、そうだったよなー？」

「私の話をry——」

「そういえばそうだったな」

「確かにそうだったな。めだかさんは〇〇同級生とか苗字の後ろに名前ないし役職を付けて呼ぶからな」

「でしょ？」

「俺は不知火から聞いたから知ってたぞ？」

「ちよつry——」

「ふん？」

善吉君と不知火さんってホントに仲が良いよな。てか不知火さんが

ら聞いたって言ってるケドさ、何氣にあの子って時たまスゲエ情報
持って来るけど何ルートなんだろう。………って、違う違う話が
逸れてるよ。

「で、話を戻すけど。俺が喜界島さんの名前を今知ったって事でこ
れから下の名前で呼ばせて貰うよ。ね？　ね？　喜界島さん許可ち
よーだい？」

別に許可なんか取らずとも勝手に呼んじゃえば良いとは思うのだが、
一応取つとかないと呼ばれた本人から嫌な顔されたらへこんじまう。

「え！？　べ、別に良いけど……」

若干テンパリ気味の喜界島さんではあったが、無事に許可を貰った。

「マジ？　サンキュー！　じゃあ改めてよろしく！　もがなちゃん
！！」

早速下の名前で呼びつつ右手を差し出し、握手を求める。
仲良くなる位なら別に罪じゃないしってね。

「う、うん。ヨロシク、霧生くん……」

妙なテンションになってる俺に着いて行けないのか、怖ず怖ずとした感じで握手に応じてくれたのは良いが。

「オイオイ、俺ンことは零って呼んでくれたら嬉しいんだけど?」

そこは空氣的に俺の下の名前で呼ぶべきでしょ?

「へ!? えつと、その……ぜ、ゼロ?」

恥ずかしいのか知らないけど、顔を真っ赤にして俺の名前を呼ぶもがなちゃん”

「なんで疑問形&片言よ? まあそこら辺は追々慣れてくれりゃあ良いか」

本当に一々反応が面白い子だね。

「イチヤつくなああ!」

「おわっ!」

折角良い雰囲気になってたのを、六割忘れていた鬼瀬さんのメリケンパンチのせいでぶち壊された。

「つか何処をどう見たらイチャついてる様に見えんだよ!? しかもつい条件反射的に避けたのは良いが、そのせいで俺の第二のベツドが真つ二つに割れてしまった。」

「人の話しの腰を折って尚且つそのヘラヘラした態度……!」

ヘラヘラて……俺はこの上なく真面目だったんだがな。

「それにそうやって女子に軽々しく声を掛けるその軽さ……!」

「軽々しくじゃねえよ、誠意持って声を掛けるんですけど、なあ皆!?」

これじゃあ、まるで俺が「女なら誰でも良い」みたいになっちゃってしまっじゃないか! そう思った俺は、誤解を溶こうと取り敢えず生徒会のメンバーに同意を求めてみたが。

「めだかさん。霧生君はどうやらアレで誠意って思ってるみたいですよ?」

「フム、そういう事に関しての零は悪いが全く信用ならんからな」

「チャラ男だもんなアイツ。そもそも誠意って意味知ってるんのか？」

「ちょっと言い過ぎじゃ……」

オイ……。ひそひそと四人で内緒話をしているつもりだろうが全部聞こえてんだけど。
いや、もがなちゃんだけは俺を庇護する感じだったのは嬉しかったよ。
取り敢えず鬼瀬さんのジトーとした視線を何とかしなけりゃと思った俺の取った行動は。

「……………な？」

ちよつくら間を置いてから鬼瀬さんの肩に軽く手を添えてのサムズだ。

そんな俺の行動に「シメた！」といえ顔をした鬼瀬さんは。

「貴方が軽い性格だったのは周知の事実みたいですね？ 諦めてください」

こんな事を小憎たらしいニヤケ顔でハッキリと言われた。

「チクシヨ〜!!」

そんな事を言われて取った行動は、半ベソかきながらの逃走だった。逃走の途中で「畜生、何時か泣かせてやる!」と鬼瀬さんに対してしようもない復讐心を抱いた瞬間でもあったりする。

ちなみに逃走のついでにそのまま帰りました。

18：「ルールと襖と障子は破る為にあるのだ！！」（後書き）

主人公はもうチャラ男でした（笑）

19：「フハハハ！　いくら雑魚のパワーを吸収したところで、このオレを超え
久しぶり？　なのかは分かりませんが投稿します。

その間に作者名って奴ですか？　を変えてみたのですが、決して執筆を“サレンダー”するつもりは無いので悪しからず。

そして今回は、過去最長クラスの文字数ですが、内容は「ああ……。リアクションの起こし様が無い」そんな感じです。

なので、錬金術で強化した精神力を持つ自信のある方どうぞ。

19：「フハハハ！　いくら雑魚のパワーを吸収したところで、このオレを超えるぜ！
うつす、俺は箱庭学園生徒会役員補佐を勤める霧生零だ。
16歳の蠍座だけど精神年齢をマジカウントすれば二十歳を超えてるぜ！

「オハヨーさん」

好きな物は酒とタバコと婆ちゃんと……。

「婆ちゃん……」

血液型は2000人に一人とか言われてるRH-A B型で、致死量出血をしたらさあ大変！

「血が足りねえ！　レバーを食せ！！」

だったけど、ある日を境に俺の人生は180度変わってしまった……。

「此処はどこじゃあああ！？」

知らない世界にいきなり飛ばされ。

「暇潰しに俺を選ぶな！」

会った事すら無い神（自称）の手紙を読んでキレたり。

「グハッ！ …………… って死ね無いいっ！?!？」

元の世界に帰る為に死のうとしても、勝手に実装された第二能力セカンドスキルのお陰で半不死身君にされちゃったり。

「使用する、又は一年周期で能力がパワーアップって……何処のサ
○ヤ人だよ」

その能力に振り回されたりと様々な出来事に遭遇して早三年近く、
現在はそれなりにこの世界に馴染みつつある。

だが、完全不死身君になるタイムリミットも近付いてたりする。
それだけでも避けたい、だから今日も主人公の周りをうる
ついて事件にわざと巻き込まれるように頑張っていたりする。

目指すは、G o T o H e l l だ！

あつ、地獄じゃ無くて元の世界だった。

EP19 start

珍しく長々しい授業に出た俺は、放課後になって善吉君と不知火さんと一緒にフラついて……じゃなくてパトロールをしていた。事件が起きたのはそのすぐ後になる。

「ねーねー帰りに何食べてく？」

「それだけ食ってまだ食うんかい」

「フムフム」男から積極的だったのはモテねーゲスのする真似』か、やべえ、俺ってゲスの部類だったのか……」

よくある放課後の風景ではあるが、ちゃんとしたパトロールなので、決してサボってる訳では無い。

ほほう、『余裕を持って女と接する』こいつは参考になりそうだからメモっとこ。

「霧生くんは何食べたい？」

「オイ、聞いてんのか零？」

「何！？ 『女は物欲しそうにしている男を見下す傾向がある』……だと？ うっ、俺ってもしかしくても猫美さんに見下されてた？」

「ヤバイな、先生の影響をモロに受けたって自覚がある分、今までやって来た事は無駄だったのか？」

「おい霧生くん？」

「ハッ！？ な、何かな？」

知らぬ間に不知火さんに袖をグイグイ引っ張られ、意識が現実に戻る。

「いや、霧生くんは何が食べたいのかな？ って……」

「え？ なんか何でもいいぞ。今日は俺が奢るから二人で好きなもんセレクトしといてくれ」

「ホントに！？ やった〜！！」

ぴょんぴょんと跳ねながら喜ぶ不知火さんに対して、何やら渋い顔をしている善吉君。

何だろうと思っていると、言いにくそうにその口を開く。

「毎度の事ながら良いのか？　なんか何時もお前に奢って貰ってる気がするんだが……」

ああ、どうやら遠慮してんのね。

確かに世間一般的な学生だと思われる……のかは知らないけど、頻繁に他人に奢るってのは余り無い話ではあるわな。

まあ、心配しなくとも金なら暫く遊んで暮らせる位まで稼いでるか
ら良いんだよね。

稼いでる手段は、決して胸を張って言える方法じゃ無いケド。

「良いんだよ。どーせアブク銭みたいなもんだし、何より結婚する
直前以外に金なんて貯める必要が無いからね」

「でもよお……」

それでも食い下がる善吉君。

もう、苗字の通りお人よしだねこの子ったら。

「じゃあ今日は割り勘にすつか？ 多分……いやどーせ不知火さんは財布を持ち歩かないと思うから除外するけど」

ホントならバイトすらしてないこの子達に金を出させるのはアレなんだが、いくらそれを言った所で善吉君が引くとは思え無い、だから俺の中での最低ラインの妥協だ。

善吉君も暫く考えた結果「それなら……」と納得してくれたし、これで万事解決だ。

やれやれ……。一応君達より年上なんだから少しは頼って欲しいもんだね、言って無いけどさ。

と、少し頬が緩くなつたと感じつつ再び読書に戻ろうとしたその時である。

「校内に置けるみだりな飲食、買い食い及び歩き読みは校則違反です！！」

何処かで聞いたような甲高い声が聞こえそれに反応する不知火さんと善吉君。

どうやら風紀委員の鬼瀬さんが飛び出して来た様だ。

そして三人で何やらギャース力喚いているが、俺は本の方が気になるのでスルーを決め込み、読書に励む。

「霧生君！！ 聞いているんですか！？」

直ぐ右横で名前を呼ばれた気がしなくても無いが、勉強だ勉強。

「フムフム……『男は焦らずCOOLに構え、一気に落とす。そうすれば自ずと女は向こうからよって来る』……これがモテ男、関東鋭牙会・三代目ボス榊真〇男が編み出した“榊の左手の法則”……か。うーむ」

最後の頁を読み終え、本を閉じての深呼吸。

フム、今日はなんと充実した時間だったんだろう。

一時間目の授業から今の今まで読んでいたが、これ程俺に知識を与えてくださった本は無かった。ありがとう、俺の中に存在するマイボス・マイヒーロよ。

さて……。

「なんか呼んだ？」

お次は現在進行で俺に降り注ぐ八つの目に対応しなければね。

何かこう……若干善吉君と不知火さんからの視線が生暖かい様な気がしたが、気にしたら負けだ。

「お前って……ホントに人の話を聞かない奴だよな」

「なにが？」

ジトーとした目で俺に言う善吉君。

ああ、ヤッパリ生暖かい視線だったのね。

てか、話って何の？　そう心で疑問を投げ掛けると、代わりに答えてくれたのが不知火さんだった。

「いやね？　霧生くんが何の本読んでるのは知らないけど、ずっと鬼瀬さんが霧生くんに怒鳴り散らしてたんだよ？」

ニマニマしながら答えを導き出してくれた不知火さんに心の中で感謝をしつつ、その問題とされている鬼瀬さんの方を見ると、その名の通り“鬼の様な形相”だったりする。

うゝむ顔芸が上手い子だねえ、とまあ他人事のように全く関係の無い事を考えていると、鬼の形相そのまま俺に食って掛かる鬼瀬さん。

「先日の事といい、貴方には反省つてものが無いんですか！？」

そしてまたもやグイグイと俺の足を踏む勢いで接近して来る。
なんだろ、やっぱ嬉しく無い。

「だって本の内容の方が気になる……」

「校内に置ける立ち読みはき・ん・し!!」

「は、ハイ。すみません……」

聞く耳持たないとはまさにこの事、いくら言い訳をしようともそれ以上の勢いと迫力で封殺してくる鬼瀬さんについて謝ってしまう。まあ悪いのは俺なんだから仕方無いのだけど。等と思っていた矢先、善吉君がブックカバーで覆われた俺の本を不思議そうに眺めながら聞いてくる。

「一体なんの本なんだ？ 人の話が聞こえる程面白い本なのか？ しかも時たま独り言まで漏らして……」

「あ！ アタシも気になるー!!」

「ちょっと三人共!? まだ私の話は終わって——ry」

二人の視線が俺の持っている本に集中する。

でも善吉君はアレだとしても不知火さんには余り関係無い本なんだけど、教えるけど。

え、鬼瀬さん？ フツ……少し位待ってて貰うさ。

「この間たまたま本屋にて発見した『The・モテ男』って本なんだけど……君達知らないっしょ？」

ブックカバーを丁寧に外して二人に見せる。

案の定二人は苦い顔をして知らないと言い、善吉君に至っては「んな馬鹿らしい本を朝っぱらからズット読んでたのかよ!？」と、有り難いツツコミを頂戴いたしましたとき。
チャンチャン♪

「で？ お前のせいで鬼瀬があんな事になってる事についてはどうすんの？」

「は？」

本の件から話は戻り、本人をスルーしての三人の会話がまづかったのか、今にも爆発しそうな表情で、俺を睨み付けてくる鬼瀬さん。顔芸大会があつたら文句なしで世界一なんだろうなあ……と不謹慎な事を思ってたのは秘密だ。

「やっぱり俺が原因なの？」

「「うん、100%！」」

Oh……二人同時に言われちまった。

でも話を逸らしたのは君達なんだから君等にも原因があるんじゃない？ とは思ったものの黒幕は俺だから敢えて言わない。

フム、かくなる上は“必殺技”を使うかね。

あのチビ子ちゃん（心の中で勝手に付けた鬼瀬さんのあだ名）が初実践つてのはちょいと気に入らないがこれもまた試練だと思えば。

「だったらしょーがない。それならあの怒りんぼうは俺が沈静させてくるよ」と

「え？」

「どうやって？」

二人してあの切れたナイフをどうやって鎮静化させるの？ と言わんばかりの顔をしてこちらを見て来る。そんな顔しなくても直ぐに分かるし、たいした事はしないつもりなんだが。

「じゃあ行つてくらあ」

ごちゃごちゃと考えても仕方が無いので後ろに居る善吉君と不知火さんが見守る中、俺は鬼瀬さんに近付き。

「お待たせしました鬼瀬さん」

「フー！ フーッ！！」

「Ah……」

なるべくラフっぽく話掛けてみたら、ブチ切れ状態の猫みたいな反応と今にも飛び掛かりそうな目で睨んでくる鬼瀬さん。

ちよっぴり怖かったけど、此処で引く訳にはいけない、後ろで見守りながら固唾を飲んでる二人の為に、何より面倒な事態を避ける為に。

で事で、無理矢理感が否め無いが俺流にアレンジしたやり方で行くぜ。

「まあ……そんなに怒らないで、楽しくやりましょうや」

なるべく当たり障りのなさ気な口調のつもりだったのだが、それが逆に鬼瀬さんの神経を逆なでしてしまった。

「クヒヒ……貴方には情状酌量の予知はもありません。だから、此処で死ねやああ！！」

やはり馴れ馴れしかったのが原因なのか、明らかに鬼瀬さんのキヤラじゃ無いと思われる口調で手錠メリケン形態へと移行しそのまま俺の顔面向かって拳を走らせる……が。

「危ないよ、っと」

「え！？」

自分の顔面に飛んで来た拳を掌で受ける。

その際、鬼瀬さんと後ろに居た善吉君が「えっ！？」って顔をしてたが、意味が分からん。

だってあんな単調な攻撃位なら避けられるし、失礼だとは思うがその程度の攻撃如きではまず間違い無く死ねない。

まあ、それは置いといて今度は俺の番だ。

……………この子にこの手が通用するか分からんが。

「鬼瀬さん…………」

「ッ！？」

まずは鬼瀬さんの両肩を掴んで俺の方へ向ける。途中、鬼瀬さんがビクッと反応したが無視だ無視。

「フッ……」

軽く微笑みながら、鬼瀬さんの顎を優しく持ち上げて俺に視線を合わせる。

「そんなに怒ると……可愛い顔が台なしだよ？」

うわぁ……。いくらアレでも言っちゃまずかったかな？ 寒い台詞に加えてこんなお子様に言ってしまうなんて。あゝ蕁麻疹が出そう……。

「「「へ！？」「」」

自分のやってる行動に内心ゾツとしている中、予想通り面白い反応を示しだす鬼瀬さん。
後ろの二人までが一緒に反応なのが意味分かんがね。

「フッフ……ソッチの顔の方が俺は好きだよ？」

イーッ！ 痒い！ 背中がこそばゆい！！ だけどそれを顔に出したら一発でバレてまう。
だから、なるべく怪しそうな笑みを崩さずにそのまま自身の顔を鬼瀬さんの顔へ近づける。

「ククク……」

「あ……え……？」

「「ゴクリ！」」

よしよし、鬼瀬さんの思考が段々フリーズしてきてるな。

後ろの二人は怖い物見たさ見たいな感じで俺達……いや俺の次なる行動を見守る中、俺は更に鬼瀬さんに顔を近付ける――

が。

「嫌ああああ……！！！」

「バンビツ……！」

おデコがくつつくかくつつか無いかの刹那、右頬に暫く無かった重い衝撃が走る。

ええ、皆さんの予想通りシバかれましたよ？ それも手錠メリケン形態の状態で思い切り右頬を殴られましたよ……と。

「ぐ、グホツ……！！ イツツツ！」

「ハアハア、ハア！」

「……」

廊下の壁に頭から激突して悶絶する俺に、その近くで顔を真っ赤にしながら息を切らす鬼瀬さん。その流れに着いて行けて無い善吉君と不知火さん。

一分位沈黙した空気が流れたが、いち早く回復したのは善吉君と鬼瀬さんだった。

「あ、あな、あなななっ！！ 貴方は！？！？」

「おま、おままつ！ お前！？」

口が回らないのか、壊れたCD再びである。

「二人共落ち着けよ、何言ってつかわかんねーぞ？」

このままバグった状態もそれはそれで面白いのだが、何時まで経っても話が進みそうにないので取り敢えず二人を落ち着かせる。だが二人は落ち着く処か、更にヒートアップしていく。

「貴方、今私に何をしようと思いました!？」

「何って……事態の鎮静化？」

本を参考にしてでの行動だけど、寧ろそれ以外に一体何があるんだ？

「余計に悪化したじゃねーか!？」

「落ち着けよ善吉君、君は中学生か？」

というより、君に関しては不知火さんと一緒に事態の流れを見ていたよな？

「あひゃひゃひゃ！ さっすが霧生クン!! 誰も予想しない事を平然とやってのけるその根性に憧れるうゝ!」

「おう！ サンキュー!!」

不知火さんだけは褒めてくれたぜ。
途中で「写メ撮れば良かった……」って聞こえたのはきつと気のせいさ。

「やっぱり貴方を野放しにしとくのは危険です！ だから此処で殺…… 肅正します！ ついでに不知火さんも！！」

健闘虚しく、鎮静化しなかった鬼瀬さんが“殺”と言いかけながら、やはりワンパターンな攻撃で俺に突っ込んで来る。

やはりあの程度で動揺するたあ、これだから餓鬼は扱いづらいんだ。だがまあ……。

「そうは行くか！！ 不知火さん！」

「オツケー！」

目で不知火さんに合図を送りそれに反応した不知火さん。やはりこの子とは、何か通じるもんがあると思いつつ、二人して事態を飲み込めていない生贄の背中を引っつかみ。

「善吉君（人吉）バリアー！」

イケニエ 善吉君の背中を二人で押して、鬼瀬さんに特効させる。

「うわっ！？」

「キヤツ!？」

押された善吉は鬼瀬さんに向かって覆いかぶさる様にして倒れ混む。どうやら上手く行ったみたいだ。

「成功!」

「フハハハ! 引いて駄目なら押してみるってか!？」

多分今の俺は殴りなくなる様な顔をしながらの高笑いからの。

「ヘーイ!!」

不知火さんとのハイタッチ。

いやぁ、悪戯が成功して嬉しい気持ちってのが久しぶりに感じられましたよ。

「フフン、さっきの件については餓鬼に通用するとは端から思っ
ては無かったからね! だから遭えて正攻法で行かせて貰ったぜ!」

「これが正攻法なのかよ!？」

「しかも餓鬼って、私の事ですか!？」

さあねー君以外に誰がいるんだろうね？ 自分で考えて欲しいもんさ。

「それは自分で考える事だね。それに余りはしゃいでると何時か痛い目に逢うって事を覚えときな鬼瀬!」

おう、俺が思ってた事を不知火さんが代弁してくれたぜ、しかも意味ありげな事を言ってるし。

「はい？ それはどういう意味——ry」

「「さらばっ!！」」

鬼瀬さんの質問に答える事無く二人並んでその場から逃走。

その場に残した二人から「待て!」だの「何時か殺す!」とかって声が聞こえたが、殺^ヤれるもんなら殺ってみるよと言ってやりた

あの二人を放置してでの逃走から暫く経つ。

不知火さんとは直ぐ後に別れ、一人生徒会室にてお仕事を黙々と熟したのが好を奏したのか、自身のやる仕事が思いの外早めに終わったので帰りの支度中。

あ？ 善吉君達はつて？ …………… さあ？ 何とかなんじゃね？
俺としてはそんな事よりさっさとオサラバしたいしい。

「さて、と。掃除も完了したし鍵の場所もメモつといた……後は帰るだけってね」

帰る前の最終確認を済ませいざサラバ！ つて時にポッケに入れてた携帯が鳴る。

着信相手は不知火さんで、何だ？ と思いながらも出る。

「もし〜？」

『やほ〜霧生くん！』

先程ぶりだが、何時ものテンションで話すのが何故か印象的だ。

「お〜 さっきぶりだね〜 どしたの？」

『やだなあ、忘れたの？　今日はこれからお食事に行く約束だったじゃ〜ん？』

「ああ……」

あり？　行くのか？　逃走ついでに今日のは中止かと思ってたんだけど。

「たった今やる事終わったから、行くのは構わないんだけど善吉君いないのにいいのか？」

そもそも不知火さんは善吉君とツルむのが好きな訳で、俺とだけで何かをする事がまず無い。

更に言ってしまうば、不知火さんとまともな話題で会話をした事すら皆無なのだ。

そんな感じで受話器の音量を調節をしつつ不知火さんの言葉を待っていると、意外な返事が返ってくる。

『ん〜？　アタシは別に人吉が居なくても大丈夫だよ〜？　霧生君も人吉と同じ位トモダチやってるつもりだし〜！』

あらあらまあまあ、嬉しい事言ってくれるじゃないの？　それなら友達^{タチ}としては喜んで付き合わせて頂きますか。

「よっしゃ！　なら喜んで行かせて頂きますぜ、お嬢さん？　で、今何処にいんの？　迎えに行くよ」

友達と真正面から言われたのに、少し嬉しく思いながら不知火さんの現在地を聞くが。

『いいよ、今近くだからアタシがソッチに行くよーそれじゃあ！』

そう言って電話を切る。別にコッチから行っても良いんだがねー
と思っていると、1分と掛からずに生徒会室に入って来た不知火さん。
ホントに近くだったんだ。

「お待たせっ！　じゃあ行こっ！」

何時も通りのテンションで俺の手をグイグイと引っ張って急かす。

「お、おう。そんなに急がなくても行くから待てっの」

さっきもあんだだけ食っというてまだ腹が減ってんのかよ、と内心ツツ
コミを入れながらも鞆を取り出してめだか君が座る机の引き出しに鍵
をしまう。

そして、やり残した事が無いかと最後の確認を終え「いざ夕飯！！」
って時だった。

「あれ？ きりゅ——じゃなかった……零。もう帰るの？」

俺の苗字から名前に言い直しながら入って来たのは喜界島さん基、もがなちゃんだった。

俺の名前を言うのは片言では無くなったのだが、相変わらず苗字で呼ばうとする時があったりする。

「おーす、もがなちゃん。そうだよ、3日分の仕事は片付けたしこれから不知火さんとメシ喰って帰るんだ」

「そう……」

「……」

あら？ 余り高いとは言えない、もがなちゃんのテンションが更に下がってる気がするんだが、何でだ？ ……ああ、横でニヤニヤしてる不知火さんが居るからか。

確かこの子達の初絡みも余り良いとは言え無かったんだっけ？ フム、それなら……。

「もがなちゃん今日はもう帰るのか？」

「え？ う、うん。そうだけど……」

何時もの通りワテンポを間を置いてから返事を返すもがなちゃん。
あれ？ 不知火さんの表情から段々と笑みが消えて来たぞ？ まあ
いいか。

「ふ〜ん？ じゃあこれから暇だったりする？」

「？ 特に何も無いけど」

「……」

おしおし、今何も無いって言ったな？ フフン、ならやる事は一つ
だ。

「よし、ならこれからデートしよーぜ？」

暇だつて言つてから誘われると、大半の人間はノってくれる心理を
突いてみました。
は？ デートって言葉がおかしいだと？ 別に誘い文句なんてなん
だつていいだろ。

「「……はい？」」

ん？ 何故二人してそんな反応なんだ？ デートの意味位知ってんだろうに。

「いやだからデートよデート。これから三人で飯食いに行こうぜ？
って意味合いでの——」

「え、ええええ！?!?」

「うつさ!？」

突然叫び出すもがなちゃん。

余りの声のデカさに自身の耳を塞ぐ、隣に居た不知火さんも耳を塞いでる。

あゝしまった、この子ったら純情ちゃんだっただっけか。
でもまさかこの程度で取り乱すとはね。

「で、で、デートって……」

オイオイ、爆発すんじゃないかって位に顔が真っ赤だけど大丈夫か？

「霧生君ってたまに予想外な行動なり言動を発するよね？」

「ハッハッハー！　そをなに褒めてくれるなよ？　照れちゃうぜ！！」

不知火さんに褒められてちよつと照れる俺。

声のトーンが低いのがちよいと気にはなるが。

まあ、こういう反応をする子には更に追撃を掛けてみたくなるんだよね。て事なので……。

「ほほぅ？　顔を真つ赤にしちゃって、照れてんのかな？　可愛いなもうつ！」

てな事を口走りながらその場のテンションで抱き着いてみた。

「はえ！？」

「あつ！？」

おお？　色々と試しては来たケド、もがなちゃんって意外と抱き心地は上位クラスだな……。

てか不知火さんの「あつ！？」って何だよ、リアクションが違くないか？　そこは普通に「おおくだいたくん！」な感じじゃ無いんかい。

「き……」

ん？ き？ …… って気功波か？ いや違うな、氣○團か？ それとも……。

「キヤアアア！……！」

「ブヘッ！？」

心の中でもがなちゃんが何が言いたかったのかを考察してみたのだが、勿論気功波な訳無く、普通に悲鳴をあげられてからの左頬への手首のスナップが効いたビンタだった。

しかも結構力強いビンタだったのか自身の身体が軽く吹っ飛び、その先に都合良くあった机の、しかも角っこに額を強打した。

「ハアハアッ……！」

「あ、あががが……！ 今の不意打ちはかなり痛かったぜ……」

ギャグ漫画みたいに額から血がピューピューと吹き出しつつ立ち上がる。

ただ、もがなちゃんがまさかの攻撃とは…… 失敗したぜ。

「き、霧生君って。噂に恥じないチャラ男っぷりだね……」

そんな事態を、黙って眺めていた不知火さんからの更なる駄目出し。まあ周りから“チャラ男”とか“ヤリ○ン野郎”とかって言われまくってるから自覚はあるんだよな自覚は。

決して“ヤリ○ン野郎”じゃ無いし、まず相手がまずいない。

「いやほらさ、あそこまですれば気絶するかなあ〜？ って思ってからのお茶目な悪戯のつもりだったんだが」

「悪戯って……アレが？」

「うん、仮にけど不知火さんがもがなちゃん立場だったら涼しい顔して『何してんのさ？』って言うでしょ？」

寧ろその後『アンタとの付き合い方を改める必要があるかもね〜』ってニヤニヤしながら言いそうだな。

「……………まあ、そうかも。でも全部の女がそんな反応すると思わない方が良くないんじゃない？」

うん、それは鬼瀬さんの時に思い知ったよ。
アレだな、今度からは慎重にからかう事にしますか。

「まあ、その事は置いといて、早く喜界島を何とかしないと……ピ
ンタのモーションのままズット固まってるよ?」

「だな……。ホレツ！ もがなちゃん、起きろー！　　ったく、そんな格好でフリーズするなんて器用な子だよ」

呆れた顔をしている不知火さんを横に置きつつ、ペチペチと頬を軽く叩き、向こうの世界に旅立ったもがなちゃんをこちらの世界へ強制送還させる。

本当につくづく反応が面白い子だ、何をしてても予想以上の反応が返って来る辺りまずハズレが無い。

あ、ちなみに傷なら普通に完治させました、誰も突っ込まない様に徐々に……さりげなく、ね。

続く

オマケ……か？

向こうの世界に居た喜界島を呼び戻した主人公は、紆余曲折した結果三人で何処かに行く事になり、学校を出て三人でテクテクと歩い

ていた。

その途中、手錠で繋がれた三人組が金属バットと木製バットを持った二人組の不良に襲われてる……てな構図を見てしまったのだが、敢えて何も見なかった事にしたのは別の話だったりする。

零

「てな訳で何食いたいんだっけ？」

不知火

「アタシ的にはお好み焼きをリスペクトかな〜！」

零

「フムフム、まあ俺は何だって良いから別に構わんが……もがなちやんは？」

喜界島

「アタシは別に……何でもいい」

零

「そ、そう？　じゃあ今日はお好み焼きね、うん行きますか」

不知火

「やた〜！」

何時も以上にテンションが低い喜界島に引き攣った表情で対応する主人公。

こうなった原因が主に自分だと自覚があるので気を使ってるのだ。まあ、だからと言ってからかうのを止めるか……と言われれば「止め無い！」と爽やかに言うちよっぴりSな主人公だったりするのだが。

不知火

「しかし、喜界島もあんな程度で一々反応するなんてねえ？」

喜界島

「う、なによ……」

不知火がする何時もの企み顔。

それに対してムツとした表情で言い返す喜界島。元凶だけに、下手な事が出来ないで見守る主人公。

不知火

「霧生君のアレは只の挨拶みたいなもんだから、余り本気にしない方が良いと思う訳よ、アタシ的には」

喜界島

「なっ！？ 別に本気にしてない……」

零

「（別に挨拶がわりのつもり無いんだが……）」

ヤッパリ周りからもチャラ男なキャラ付けをされているのか……と
今までの行動を少し反省する。

不知火

「どーだかね、さっきやられてた時は満更でもなさそうな様な気がするんだけどねー！」

喜界島

「ち、違っー！」

不知火

「ねー？ 霧生君はどう思う？」

零

「いや別に、もがなちゃんが何を思ってくれたのかは知らないけど、俺としては一々初な反応を見せてくれるもがなちゃんが面白くてしょーがないし、何より好きだね」

ハッハッハ！ と豪快に笑い飛ばす主人公。

喜界島・不知火

「「……………」」

零

「あん？ 二人して何だよその目は？ 俺なんか変な事言ったか？」

喜界島

「いや……………」

不知火

「べつつに〜？」

喜界島・不知火

（（やっぱりチャラ男なのかもしれない））

零

「??？」

二人が内心そんな事を考えているのを露知らず、主人公は阿保な顔して考える。

が、根底は馬鹿な主人公なので直ぐさま考えるのを止め急に微笑んだと思いきや二人の肩を掴んで軽く抱き寄せる感じにして歩き出す。不知火の場合は軽く抱っこに近いが……。

零

「まっ！ 何かよくわかんねーけど、これから仲良くやろうぜ？
なっ？」

喜界島

「ちよっ！ 止めてよ！？ まだ学校のグラウンドが目の中にあるし
皆見てるから！！」

不知火

「これはいくらアタシでも流石に恥ずかしいかな〜と……」

二人が言う通り、此处はまだ学校を出たばかりの通りで、目の前にはグラウンドがあり、更に言えば下校中の生徒がチラホラ……では無くてかなり居た。

そんな人通りが多い所で異性に抱き寄せられてる、とまあそんな恥ずかしい事をされてる二人からしたらたまったもんじゃ無い。

例え目の前の男が別に好きでも何でも無い男だとしても、羞恥心が込み上げて来るもんだ。

だが、二年半という歳月で大分毒されていた主人公がそんな気持ち
が解る訳も無く、寧ろ「しめた！」と言った表情をしながらの一言
が。

零

「ん〜？ なら俺達の仲の良さをこのチラ見している人達に見せ付
けながら行こうじゃ無いか！ ハッハッハ〜！」

これが「好きになった子をイジめる小学生の気持ちか」と新たな知識を得た主人公だった。

まあ、主人公の場合は“Love”と言うよりかは“like”と言った所だろうが……本当の所はこの主人公にしか分からない。

只一つハッキリしている事は、これをキツカケに元から「霧生零はチャラ男っぽい」と噂になっていたのが「霧生零は紛れも無いチャラ男」とランクアップしたらしい。

ちなみにこの出来事から次の日、生徒会庶務と生徒会長に割と全力で殴られたのは言うまでも無いだろう。

しかも生徒会長に至っては、その現場を見た生徒会のメンバーいわく「会長の髪の色が若干白っぽかった」との事だった。

終われ

19：「フハハハ！　いくら雑魚のパワーを吸収したところで、このオレを超越は立ってない……………　かもしれない。」

フラグについては、主人公のキャラ的に立ってる様に見せ掛けて実が。

こんな作者ですいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9469w/>

The tale of a man with the title of infinity and redo

2011年11月23日06時52分発行